『荒島古墳群発掘調査報告書』
（安来市埋蔵文化財調査報告書　第27集）抜刷

島根県安来市
大成古墳第4・5次発掘調査報告書

１９９９年３月

島根大学考古学研究室
安来市教育委員会

卷頭図版　大成古墳竪穴式石室全景

1．調査に至る経緯

(1)　国庫補助事業　荒島古墳群発掘調査事業の経緯

保存運動でゆれ動いた仲仙寺古墳群の環境整備が完成してまもない昭和54年、安来市基本構想の中で国指定史跡造山古墳、県指定史跡造山３号墳を中心とする造山古墳群が整備の対象として位置づけられた。しかし、それが具体化するのは昭和62年であり、自治省リーディングプロジェクト「神話と鉄学の道」事業の付帯事業（仮称）風上記の里整備事業である。平成元年、安来市はまず造山古墳群の墳丘測量調査と造山古墳群から仏山古墳までの尾根の地形測量図の作成を実施した。次に平成２年から２ヶ年かけて整備に先立ち“国庫補助事業造山古墳群発掘調査”として造山２・４号墳の発掘調査を実施した(1)。この事業こそが荒島古墳群発掘調査の前身である。平成４年に造山古墳群は“古代出雲王陵の丘”として整備が完了した。

整備に伴う造山古墳群の調査や後述する本村豪章氏による大成古墳の調査は、荒島地区に所在する首長墓を調査により再評価する必要性を高めた。そこで、“荒島古墳群発掘調査”と名称を変え国庫補助事業による調査を継続することとなった。まず、平成４年から２ヶ年で清水山古墳群の発掘調査を行い(2)、首長墓の墓域がさらに西に広がることを明らかにした。その後、本村氏の調査を引き継ぐかたちで行われた大成古墳の発掘調査(3)と、史跡指定に向けて塩津山墳墓群と岩屋後古墳の測量調査が併行して平成10年度まで行われることとなる。

(2)　大成古墳発掘調査に至る経緯

大成古墳は明治44年に土地所有者に発見され、梅原末治氏によって学界に発表されて以来、出雲の代表的方墳として位置づけられてきた。しかし、古墳そのものの本格的調査がなされないまま近年に至った。そこで、発見以来80年を経た平成３年に、東京国立博物館考古課長（当時）本村豪章氏を団長、島根大学渡辺貞幸教授を副団長とする大成古墳発掘調査団が組織され、２次にわたる発掘調査を行った。そして、第１次調査では墳丘測量図を作成したほか竪穴式石室の一部を調査し、第２次調査では排水施設を確認するなど多大の成果をあげた(4)。しかし、調査は一部にとどまっており多くの課題を残していた。

平成６年度安来市は国庫補助事業として第３次調査を実施し、南側・西側の裾を確認した。この調査に訪れた文化庁西田調査官から「石室内に遺物が残存している可能性が高く、早急に石室の調査を実施したほうが良い」との指導を受けた。こうした経緯から、大成古墳第４・５次調査は平成８年度から３ヶ年の国庫補助事業として石室の調査を実施することとなった。

(3)　塩津山墳墓群・若塚古墳測量調査に至る経緯

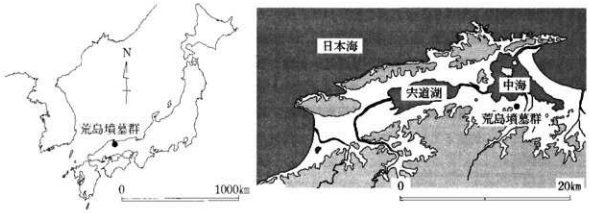
平成６年、島根県教育委員会は高速道路（山陰道安来道路）建設に伴い塩津山遺跡群の調査を実施した。塩津山の丘陵には石棺式石室の塩津神社古墳（市指定文化財）、出雲東部最大の四隅突出型墳丘墓（以下、四隅突出墓と略す）である塩津10号墓（県指定史跡）が存在するため、これらを避けて両墳墓の間に高速道路が設計された。調査の結果、ルート上から弥生墳丘墓の特徴を残した特異な古墳が新たに発見された(5)。島根県・安来市の保存要望に対して、建設省は史跡指定化・遺跡保存整備・土地の買い上げを条件に工法変更による塩津山１号墳の保存を了承した。

これを受けて安来市は史跡指定・保存整備の資料として塩津山墳墓群の概要を把握すべく、平成８年度から３ヶ年の国庫補助事業として墳丘測量調査と丘陵の測量図を作成することとした。また、史跡指定については、既に指定されている“史跡造山古墳”（造山１号墳）の名称を“荒島古墳群”に変更し、造山２～４号墳・塩津山墳墓群・大成古墳も含めた面的な保護を目指すこととなった。荒島古墳群の指定に伴い若塚古墳も荒島古墳群最後の首長墓として指定候補にあがった。しかし、十分な墳丘測量図がないため、今回の補助事業で資料化することとなった。

（金山尚志）

註

(1)　安来市教育委員会『安来市造山古墳群発掘調査報告書』1992
(2)　安来市教育委員会『清水山古墳群発掘調査報告書』1994
(3)　安来市教育委員会『大成古墳第３次発掘調査報告書』1995
(4)　木村豪章ほか『熟掘前期古墳資料の綜合的再検討』1992
(5)　島根県教育委員会『塩津山古墳群発掘調査報告書』1997



2．位置と歴史的環境

(1) 地理的環境（第1図）

安来市は山陰地方の中央、島根県の東端に位置する。日本有数の汽水湖として知られる中海の南岸に広がる能義（安来）平野は、飯梨川・伯太川によって形成された典型的な三角州扇状地性低地である。荒島地区はこの平野の西縁にあたる。古墳が立地する丘陵は中国山地の支脈の末端で、流紋岩類・凝灰岩類等の火山性の山地でかなり風化侵蝕を受けており、標高30～60mの低丘陵が多い[1]。特に凝灰岩は“荒島石”と呼ばれ、古墳時代後期には埋葬施設の石材として、その後も建築部材や墓石として現代まで広範囲に流通している。

大成古墳①はJR山陰本線荒島駅のすぐ南一標高46.4mの通称“岩田山”の頂上から北西に痩状に突出した地形を利用して築造されている。墳頂部の標高は約41mで、北西には中海西岸が、北東には中海と弓ヶ浜半島が一望でき、主に北方向の眺望に優れている。

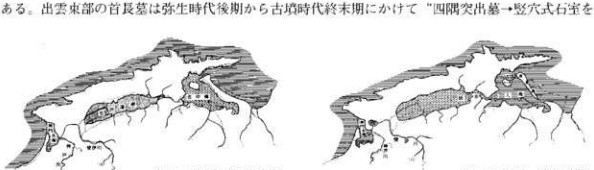
塩津山墳墓群②は標高約50mから北東に派生する標高約30mの塩津山に立地する。東には仲仙寺墳墓群⑧・能義平野・大山が広がり、特に東方向の眺望に優れる。北は大成古墳が立地する岩田山により中海は見えない。西には同時期の大集落である塩津丘陵遺跡群④が見渡せる。

大成古墳・塩津山墳墓群が築造された弥生時代後期～古墳時代は景観が現在とかなり違っていた。造山古墳群の西に広がる水田は近世まで池であった。また、岩屋遺跡⑤は縄文時代の波食台であるが、古墳時代前期まで付近に海岸線が入り込み、古墳時代後期には岩屋遺跡は沼地化したとその堆積状況から考えられる[2]。つまり、凹凸に富んだ海岸線を形成していたと考えられる。

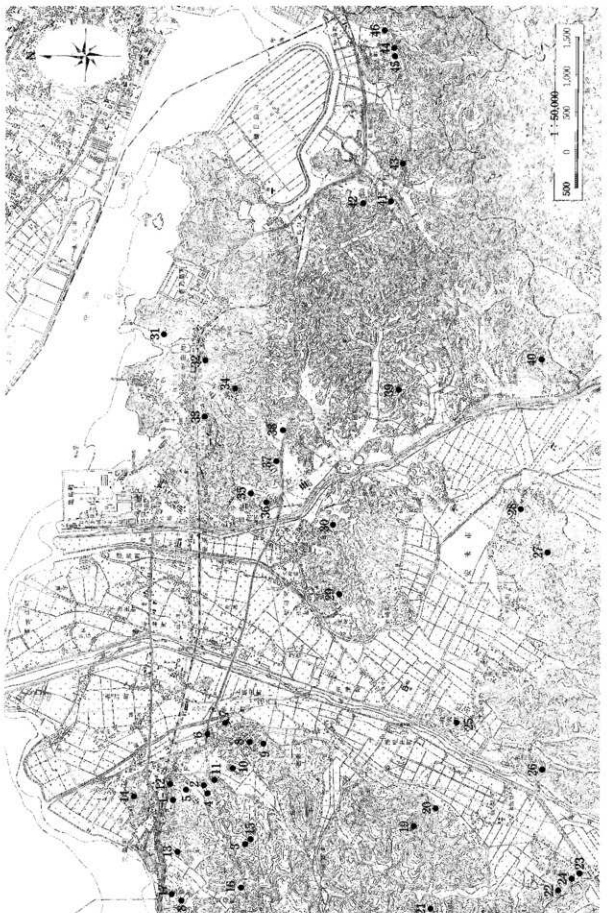
若塚古墳（ひとつづか）③は標高74mを頂上とする丘陵の南に延びる尾根上標高約60mに立地する。かなり奥まった立地のため、見通しは悪い。

(2) 歴史的環境（第1～3図）

荒島地区は弥生時代後期から古墳時代中期にかけて出雲地域で最も大きい墳墓が造られた地域である。出雲東部の首長墓は弥生時代後期から古墳時代終末期にかけて“四隅突出墓→竪穴式石室を



（徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨　昂「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』36、1990より引用）



第１図　周辺遺跡分布図

表１　荒島古墳群周辺の主要遺跡一覧表

1	大成古墳	古墳時代前期、60mの方墳、竪穴式石室を中心主体とする。
2	塩津山墳墓群	四隅突出墓２基、古墳９基他。
3	若塚古墳	古墳時代終末期、畿内の横口式石槨の影響を受けた単葬石室。
4	柳・竹ヶ崎遺跡	四隅突出墓と同時期、弥生時代後期の拠点集落。
5	岩屋遺跡	縄文時代の漁食台の跡。
6	安養寺墳墓群	四隅突出墓２基。消滅。
7	宮山墳墓群	４号墓は四隅突出墓。１号墳は57mの前方後方墳。
8	仲仙寺墳墓群	19基からなる墳墓群。うち３基は四隅突出墓である。古墳は中期～後期。
9	下山墳墓群	四隅突出墓１基を含む墳墓群。
10	橋松古墳群	石室の一部が露出している。同一丘陵には山根古墳群がある。
11	塩津神社古墳	古墳時代後期。石棺式石室が露出している。市指定文化財。
12	仏山古墳	古墳時代後期、50mの前方後方墳、獅噛環頭大刀や馬具などが出土。
13	造山古墳群	１号墳は大成古墳と類似。古墳時代前期と後期の首長墓域。国指定史跡。
14	高塚山古墳	石棺式石室の一部が露出している。
15	小久白遺跡	奈良時代末期の火葬墓、須恵器製の蔵骨器と鉄壺が出土。
16	中山墳墓	奈良時代～平安時代の火葬墓、石製の家形蔵骨器が出土。
17	清水山古墳群	古墳時代中期、２段築成42mの方墳。
18	塩田横穴墓群	凝灰岩を刳り抜いた横穴墓群。
19	卑山烽台	出雲国風土記に記載された、奈良時代のろし台。市指定文化財。
20	飯梨穴神古墳	後期古墳、石棺式石室が露出している。
21	飯梨岩舟古墳	後期古墳、石棺式石室が露出している。国指定史跡。
22	かわらけ谷横穴墓群	古墳時代後期、13基、石棺・双竜環頭大刀出土。
23	鰐ノ湯病院跡横穴墓群	８穴以上、石棺をもつ。市指定文化財。金銅冠、単鳳環頭大刀が出土。
24	寺輪古墳	墳長40mの前方後円墳。
25	能義神社奥院古墳群	12基（１号墳35m円墳）隣接して祭祀遺跡もある。
26	矢田古墳群	出雲地域最大の群集墳。古墳107基、横穴墓57基。
27	鍵尾土壙墓群	弥生時代後期土壙墓群。標式遺跡。
28	教昊寺跡	出雲地域最古級の奈良時代寺院。礎石は市指定文化財。
29	小谷古墳	古墳時代前期、15mの方墳。埋葬施設は木棺直葬。内行花文鏡出土。
30	月坂放レ山古墳群	古墳時代中期～後期の方墳。短甲・珠文鏡が出土。
31	小馬木古墳群	古墳時代中期～後期、径11mの円墳。珠文鏡・家形埴輪が出土。
32	長曽underline土壙墓群	弥生後期墳丘墓・土壙墓群。
33	毘売塚古墳	古墳時代中期、41mの帆立貝形前方後円墳。舟形石棺・鉄鉾・短甲出土。
34	高広遺跡	横穴墓13基、双竜環頭大刀。
35	新林古墳群	古墳時代前期、円墳・方墳。
36	あんもち山古墳	古墳時代中期、径35mの市内最大級の円墳。
37	大原遺跡	古墳時代後期、玉作遺跡他。
38	臼コクリ遺跡	古墳時代後期、横穴墓19基、単竜環頭大刀出土。
39	九重土壙墓群	弥生後期土壙墓群。標式遺跡。
40	清瀬山古墳群	安来平野最大の57mの前方後円墳を含む古墳群。
41	五反田１号墳	古墳時代前期～中期の円墳。竪穴式石室を埋葬施設とする。
42	門生古窯跡群	出雲地域最古の須恵器窯跡群。窯畑支群では工房跡が検出されている。
43	陽徳遺跡	弥生時代後期の住居跡。高地性集落の可能性がある。
44	吉佐山根１号墳	古墳時代前期の方墳。埋葬施設は箱式石棺３基。
45	穴神横穴墓群	４基からなる。１号横穴墓は石棺に装飾が施されている。県指定文化財。
46	神代塚古墳	横穴式石室が露出している。市指定文化財。

もつ大型方墳→前方後方墳→石棺式石室”という変遷がたどれる。全国的にも地域性がきわめて強く、このような変遷が長期間にわたって一つの地域で認められる数少ない場所である。

荒島墳墓群[5]の分布は大きく４つの支群に分けることができる。弥生時代後期の首長墓を中心とした塩津山を中央として、東には弥生墳丘墓と中期以降の古墳が密集する仲仙寺墳墓群を中心とするグループ（安養寺・宮山・下山）、北には古墳時代前期から後期の大型墳墓が並ぶ造山古墳群・大成古墳を中心とするグループ（高塚山・仏山・清水山）、南西には古墳時代後期から奈良時代の墳墓が点在する若塚古墳・中山墳墓⑯のグループである。それぞれの支群には大型墳墓のほかにも中小規模の墳墓が数多く造営されているが、以下、各時代ごとの代表的遺跡の説明を行う。

a）　弥生時代中期以前

出雲地域は弥生時代中期に荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡をはじめ銅剣・銅鐸など青銅製祭器が最も集中する地域として知られる。しかし、能義平野では現在のところ検出されておらず、次代の出雲地域を代表するような首長墓の出現につながる遺構・遺物は検出されていない。

b）　弥生時代後期

大型の四隅突出墓は地域における有力首長墓と考えられているが、出雲地域において東西二つの密集地が認められる[4]。荒島地区はこのうち東部の密集地である。日本各地で青銅祭器や特殊な土器をシンボルとしたまとまりを見せる中、山陰地域では四隅突出墓を伸介とする結びつきがあったと考えられている。その分布は山陰から北陸にかけて認められるが、出雲地域は集中度や形態の完成度においてその一大中心地といえる。荒島地区内の四隅突出墓は“仲仙寺８～10号墓⑧・下山墳墓⑨・宮山４号墓⑦・安養寺１・３号墓⑥（消滅）・塩津山６・10号墓②”であり、およそ南東部に分布する。

塩津山１号墳②はコーナー部分が突出ぎみであること、外表施設に貼石を用いるなど弥生墓制を色濃く残した前期古墳として注目されている。

飯梨川を挟んで対岸の飯梨川東岸には九重土壙墓群⑲・鍵尾土壙墓群⑳など墳丘や区画をもつ墳墓が造られている。また、塩津山丘陵の裾に位置する柳・竹ケ崎遺跡④は四隅突出墓と同時期の拠点集落である[5]。門生町の陽徳遺跡㊸は高所に立地する集落であり、高地性集落の可能性がある[6]。

c）　古墳時代前期

荒島地区の首長墓は墳丘規模においてこの時期の出雲地域で傑出しており、荒島地区が出雲地域で最も有力な首長の墓域であったことをうかがわせる。特に大成古墳①と造山１号墳⑬は古墳時代前期としては全国最大の方墳である。全国各地の首長墓が前方後円墳または前方後方墳であるのに対して、出雲地域では方墳という形態をとる点できわめて特殊である。造山１号墳⑬は１辺60mを測り、墳丘は片側２段築成であり、斜面には葺石がほどこされている。大成古墳と立地・形態がきわめて類似する（第４図）。墳頂部には２基の竪穴式石室が平行して築かれている。第１石室は7.1mを測り、二角縁神獣鏡１・方格規矩鏡１などが出土している。第２石室は5.6mを測り、方格規矩鏡１・紡錘車形石製品１などが出土している。墳丘からは山陰独特の形態をした円筒土器が出土している。造山３号墳⑭は38m×30mの方墳である。長さ4.75mの竪穴式石室からは斜縁二神二獣

表1　荒島古墳群周辺の主要遺跡一覧表

1	大成古墳	古墳時代前期、60mの方墳、竪穴式石室を中心主体とする。
2	塩津山古墳墓群	四隅突出墓2基、古墳9基他。
3	若塚古墳	古墳時代終末期、畿内の横口式石槨の影響を受けた単葬石室。
4	柳・竹ヶ崎遺跡	四隅突出墓と同時期、弥生時代後期の拠点集落。
5	岩屋遺跡	縄文時代の波食台の跡。
6	安養寺古墳墓群	四隅突出墓2基。消滅。
7	宮山古墳墓群	4号墓は四隅突出墓。1号墳は57mの前方後方墳。
8	仲仙寺古墳墓群	19基からなる墳墓群。うち3基は四隅突出墓である。古墳は中期～後期。
9	下山古墳墓群	四隅突出墓1基を含む墳墓群。
10	橋松古墳群	石室の一部が露出している。同一丘陵には山根古墳群がある。
11	塩津神社古墳	古墳時代後期。石棺式石室が露出している。市指定文化財。
12	仏山古墳	古墳時代後期、50mの前方後方墳、鈴唾環頭大刀や馬具などが出土。
13	造山古墳群	1号墳は大成古墳と類似。古墳時代前期と後期の首長墓域。国指定史跡。
14	高塚山古墳	石棺式石室の一部が露出している。
15	小久白遺跡	奈良時代末期の火葬墓、須恵器製の蔵骨器と鉄釜が出土。
16	中山墳墓	奈良時代～平安時代の火葬墓、石製の家形蔵骨器が出土。
17	清水山古墳群	古墳時代中期、2段築成42mの方墳。
18	塩田横穴墓群	凝灰岩を刳り抜いた横穴墓群。
19	卓山烽台	出雲国風土記に記載された、奈良時代のろし台。市指定文化財。
20	飯梨穴神古墳	後期古墳、石棺式石室が露出している。
21	飯梨岩舟古墳	後期古墳、石棺式石室が露出している。国指定史跡。
22	かわらけ谷横穴墓群	古墳時代後期。13基、石棺・双竜環頭大刀出土。
23	鷺ノ湯病院跡横穴墓群	8穴以上、石棺をもつ。市指定文化財。金銅冠、単鳳環頭大刀が出土。
24	寺輪古墳	墳長40mの前方後円墳。
25	能義神社奥院古墳群	12基（1号墳35m円墳）隣接して祭祀遺跡もある。
26	矢田古墳群	出雲地域最大の群集墳。古墳107基、横穴墓57基。
27	鍵尾土壙墓群	弥生時代後期土壙墓群。標式遺跡。
28	教昊寺跡	出雲地域最古級の奈良時代寺院。礎石は市指定文化財。
29	小谷古墳	古墳時代前期、15mの方墳。埋葬施設は木棺直葬。内行花文鏡出土。
30	月坂放レ山古墳群	古墳時代中期～後期の方墳。短甲・珠文鏡が出土。
31	小馬木古墳群	古墳時代中期～後期、径11mの円墳。珠文鏡・家形埴輪が出土。
32	長曽土壙墓群	弥生後期墳丘墓・上壙墓群。
33	毘売塚古墳	古墳時代中期、41mの帆立貝形前方後円墳。舟形石棺・鉄鉾・短甲出土。
34	高広遺跡	横穴墓13基、双竜環頭大刀。
35	新林古墳群	古墳時代前期、円墳・方墳。
36	あんもち山古墳	古墳時代中期、径35mの市内最大級の円墳。
37	大原遺跡	古墳時代後期、玉作遺跡他。
38	口コクリ遺跡	古墳時代後期、横穴墓19基、単竜環頭大刀出土。
39	九重土壙墓群	弥生後期土壙墓群。標式遺跡。
40	清瀬山古墳群	安来平野最大の57mの前方後円墳を含む古墳群。
41	五反田1号墳	古墳時代前期～中期の円墳。竪穴式石室を埋葬施設とする。
42	門生古窯跡群	出雲地域最古の須恵器窯跡群。高畑支群では工房跡が検出されている。
43	陽徳遺跡	弥生時代後期の住居跡。高地性集落の可能性がある。
44	吉佐山根1号墳	古墳時代前期の方墳。埋葬施設は箱式石棺3基。
45	穴神横穴墓群	4基からなる。1号横穴墓は石棺に装飾が施されている。県指定文化財。
46	神代塚古墳	横穴式石室が露出している。市指定文化財。

もつ大型方墳→前方後方墳→石棺式石室”という変遷がたどれる。全国的にも地域性がきわめて強く、このような変遷が長期間にわたって一つの地域で認められる数少ない場所である。

荒島墳墓群[3]の分布は大きく４つの支群に分けることができる。弥生時代後期の首長墓を中心とした塩津山を中央として、東には弥生墳丘墓と中期以降の古墳が密集する仲仙寺墳墓群を中心とするグループ（安養寺・宮山・下山）、北には古墳時代前期から後期の大型墳墓が並ぶ造山古墳群・大成古墳を中心とするグループ（高塚山・仏山・清水山）、南西には古墳時代後期から奈良時代の墳墓が点在する若塚古墳・中山墳墓⑯のグループである。それぞれの支群には大型墳墓のほかにも中小規模の墳墓が数多く造営されているが、以下、各時代ごとの代表的遺跡の説明を行う。

a）　弥生時代中期以前

出雲地域は弥生時代中期に荒神谷遺跡・加茂岩倉遺跡をはじめ銅剣・銅鐸など青銅製祭器が最も集中する地域として知られる。しかし、能義平野では現在のところ検出されておらず、次代の出雲地域を代表するような首長墓の出現につながる遺構・遺物は検出されていない。

b）　弥生時代後期

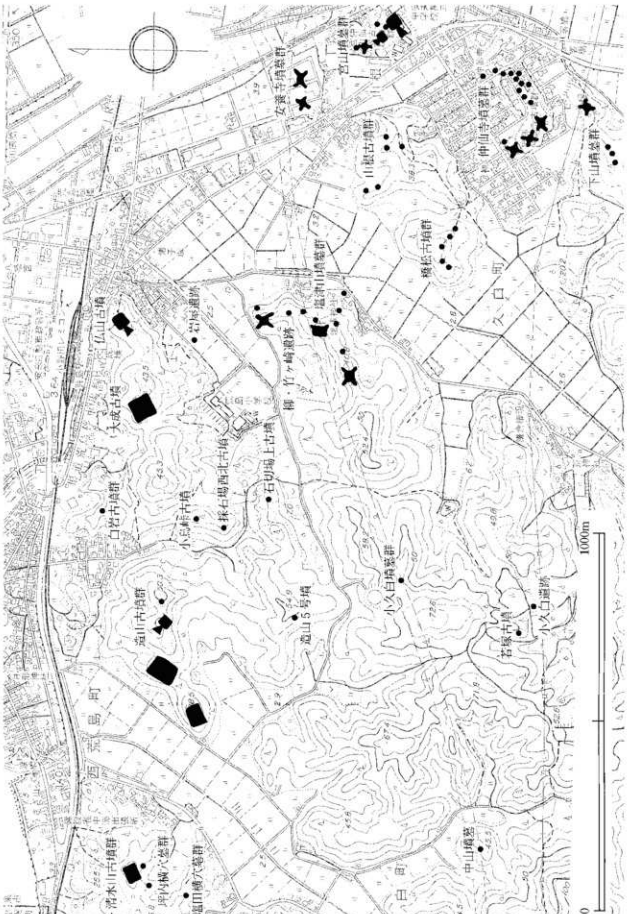
大型の四隅突出墓は地域における有力首長墓と考えられているが、出雲地域において東西二つの密集地が認められる[4]。荒島地区はこのうち東部の密集地である。日本各地で青銅製器や特殊な土器をシンボルとしたまとまりを見せる中、山陰地域では四隅突出墓を仲介とする結びつきがあったと考えられている。その分布は山陰から北陸にかけて認められるが、出雲地域は集中度や形態の完成度においてその一大中心地といえる。荒島地区内の四隅突出墓は“仲仙寺８～10号墓⑧・下山墳墓⑨・宮山４号墓⑦・安養寺１・３号墓⑥（消滅）・塩津山６・10号墓②”であり、およそ南東部に分布する。

塩津山１号墳②はコーナー部分が突出ぎみであること、外表施設に貼石を用いるなど弥生墓制を色濃く残した前期古墳として注目されている。

飯梨川を挟んで対岸の飯梨川東岸には九重土壙墓群㉙・鍵尾土壙墓群㉗など墳丘や区画をもつ墳墓が造られている。また、塩津山丘陵の裾に位置する柳・竹ケ崎遺跡④は四隅突出墓と同時期の拠点集落である[5]。門生町の陽徳遺跡㉓は高所に立地する集落であり、高地性集落の可能性がある[6]。

c）　古墳時代前期

荒島地区の首長墓は墳丘規模においてこの時期の出雲地域で傑出しており、荒島地区が出雲地域で最も有力な首長の墓域であったことをうかがわせる。特に大成古墳①と造山１号墳⑬は古墳時代前期としては全国最大の方墳である。全国各地の首長墓が前方後円墳または前方後方墳であるのに対して、出雲地域では方墳という形態をとる点できわめて特殊である。造山１号墳⑬は１辺60mを測り、墳丘は片側２段築成であり、斜面には葺石がほどこされている。大成古墳と立地・形態がきわめて類似する（第４図）。墳頂部には２基の竪穴式石室が平行して築かれている。第１石室は7.1mを測り、二角縁神獣鏡１・方格規矩鏡１などが出土している。第２石室は5.6mを測り、方格規矩鏡１・鍾乳石製品１などが出土している。墳丘からは山陰独特の形態をした円筒土器が出土している。造山３号墳⑭は38m×30mの方墳である。長さ4.75mの竪穴式石室からは斜縁二神二獣


荒島古墳群
荒島古墳
荒島1号墳
荒島2号墳
荒島3号墳
荒島4号墳
荒島5号墳
荒島6号墳
荒島7号墳
荒島8号墳
荒島9号墳
荒島10号墳
荒島11号墳
荒島12号墳
荒島13号墳
荒島14号墳
荒島15号墳
荒島16号墳
荒島17号墳
荒島18号墳
荒島19号墳
荒島20号墳
荒島21号墳
荒島22号墳
荒島23号墳
荒島24号墳
荒島25号墳
荒島26号墳
荒島27号墳
荒島28号墳
荒島29号墳
荒島30号墳
荒島31号墳
荒島32号墳
荒島33号墳
荒島34号墳
荒島35号墳
荒島36号墳
荒島37号墳
荒島38号墳
荒島39号墳
荒島40号墳

鏡・ガラス製小玉・鉄器などが出土している。前期の首長墓域は荒島地区の北部に分布する。

対岸には小谷古墳㉙・五反田１号墳㊶・新林古墳群㊸・吉佐山根１号墳㊹など中小規模の円墳や方墳が分布する。中でも前期末から中期初頭の五反田１号墳㊹は竪穴式石室をもっている(7)。

d）　古墳時代中期

出雲地域東部では、全国的にはほとんど築造されなくなる前方後方墳を中期以降首長墓に採用する(8)。こうした最初の前方後方墳が宍山１号墳⑦である。宮山１号墳は宮山４号墓と同一丘陵に立地する全長57mの出雲地域で二番目に大きい前方後方墳である。清水山１号墳⑰は造山古墳群と谷をはさんで西に立地する、一辺42mの二段築成の方墳である。

中期の首長墓は荒島墳墓群の東と北西の端にそれぞれ築造されている。

荒島地区の首長墓では前方後方墳・方墳などが一般的なのに対し、対岸の首長墓は毘売塚古墳㉝、あんもち山古墳㊱など中規模の前方後円墳・円墳が多い。しかし、横矧板鋲留短甲などが出土した月坂放レ山５号墳㉚は方墳である。また、大原遺跡㊲では玉作工房跡が検出されている。

e）　古墳時代後期～終末期

後期になると荒島墳墓群の首長墓よりはるかに大きい100mクラスの古墳が出雲地域中部と西部に出現する(9)。これらは西日本でも特に大規模なものである。荒島地区の造山２号墳⑬は全長50mの前方後方墳である。斜面は２段築成であり、葺石が施されている。朝顔形埴輪・円筒形埴輪・形象埴輪が出土している。仏山古墳⑫は大成古墳と同一丘陵に立地する50mの前方後方墳である。獅噛環頭大刀や鍬形杏葉などが出土している。後期の首長墓は荒島地区北部に分布する。

その後、出雲東部地域の首長は、横穴式石室の一種で横山式石棺を独自に発展させた石棺式石室を埋葬施設として採用する。塩津神社古墳①は塩津山の東裾に築かれた、石棺式石室を埋葬施設とした古墳である。若塚古墳③は畿内の横口式石槨の影響を受けた切石造りの単葬石室をもつ荒島古墳群最後の首長墓である。墓域は“塩津神社古墳→若塚古墳”と荒島墳墓群の中央から南の丘陵頂部に分布する。

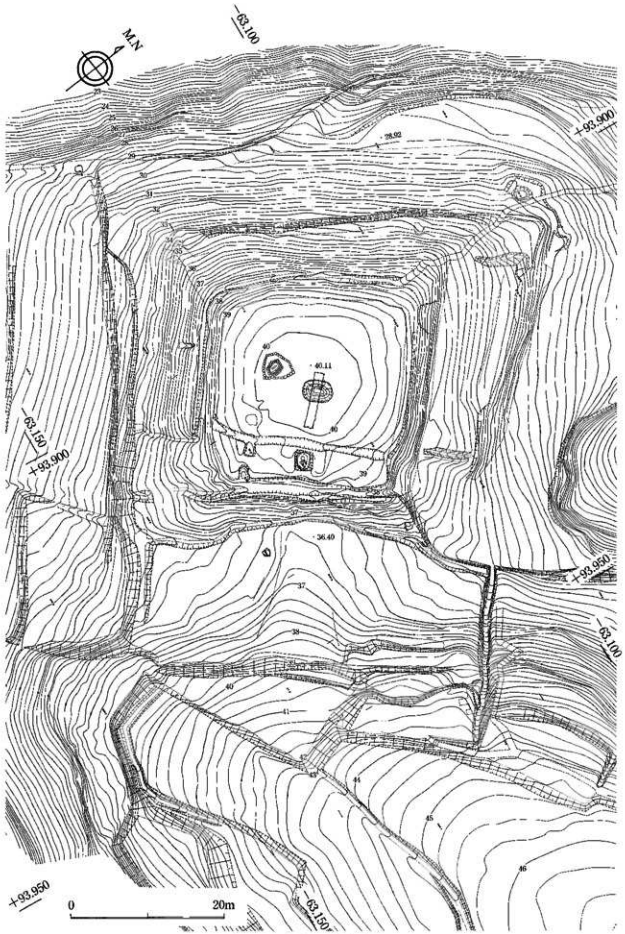
石棺式石室は荒島墳墓群以外には南方の岩舟古墳㉑・飯梨穴神古墳㉒にも採用されている。飯梨川対岸では県境に位置する神代塚古墳㊾まで、石室を埋葬施設とした古墳は見られない。

この時期、能義平野一帯に多数の横穴墓が築造される。荒島地区の塩田横穴墓群⑱は凝灰岩に掘り込まれた横穴墓である。地元の人の話では岩田山の南にも多くの横穴墓があったということである。その他の地区にも、冠が出土した鷺ノ湯病院跡横穴墓群㉗や55基の横穴墓が群集する矢田横穴墓群㉖、石棺に装飾が施された穴神横穴墓群㊽など、豊富な副葬品をもつ多数の横穴墓が分布する。

f）　奈良時代以降

この頃の首長墓は丘陵の先端から南の比較的高い場所に分布する。中山墳墓⑮は家形石製蔵骨器を埋葬施設とした墳墓である(10)。小久白墳墓⑯からは鉄製盤をもつ須恵器製蔵骨器が検出されている。

出雲国風土記によれば荒島地区は国庁と中央を結ぶ正東道の北、意宇郡野城駅にあたる(11)。周辺には初期寺院である教昊寺㉘ややのろし台である車山⑲など風土記に記載された遺跡も多い。吉佐



第４図　造山１号墳測量図

町徳見津遺跡からはこの時期の鍛冶工房遺跡が検出されている(12)。

g） 文化財としての荒島古墳群

文化財として荒島地域の遺跡が認識されたのは仏山古墳が発見された明治43年からである。その後、昭和40年代にはほとんどの首長墓が見つかった。しかし、仲仙寺10号墓・安養寺１・３号墓は昭和47年住宅地建設で、宮山１号墳は昭和34年中学校建設、柳・竹ケ崎遺跡・中山墳墓は平成６年山陰道安来道路建設で消滅した。

現在、指定文化財になっているものは造山１号墳（国・昭和11年）・仲仙寺古墳群（国・昭和46年）・宮山支群（国・昭和49年）・造山３号墳（県・昭和41年）・塩津10号墓（県・平成４年）・塩津神社古墳（市・昭和42年）である。この内、仲仙寺古墳群と宮山古墳群は昭和52年に国庫補助事業として盛土で保護した上に貼石を復元した整備がされた。造山古墳群は平成５年に自治省リーディングプロジェクトの一環として“古代出雲王陵の丘”として整備されている。今回の報告書に掲載した大成古墳・塩津山墳墓群・若塚古墳は現在未整備である。しかし、安来市は仲仙寺墳墓群と荒島古墳群については今年度整備構想を策定し、計画的に整備を行っていく方針である。

（金山尚志）

註

(1) 河井昭道「地理 ―位置・地形・地質・気候・生物」『安来市誌』安来市、1970。

(2) 島根大学徳岡隆夫教授のご指導による。

(3) 昭和60年、出雲考古学研究会は『古代の出雲を考える４　荒島墳墓群』で仲仙寺墳墓群を含め“荒島墳墓群”と呼称した。本書でいう“荒島古墳群”とは、指定名称を念頭に置き、弥生墳丘墓を主体とする仲仙寺墳墓群に対して、古墳を主体とする造山古墳群・大成古墳・塩津山墳墓群とその周辺の首長墓を指すものとする。

(4) 渡辺貞幸「古代出雲の栄光と挫折」『日本古代史４　王権の争奪』集英社、1986。
渡辺貞幸「『出雲連合』の成立と再編」『出雲世界と古代の山陰』名著出版、1995。

(5) 島根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群』1998。

(6) 島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラ１遺跡』1993。

(7) 島根県教育委員会『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』1998。

(8) 渡辺貞幸「出雲の方墳、出雲の前方後方墳」『古代出雲文化展』島根県教育委員会、1997。

(9) 渡辺貞幸「山代・大庭古墳群と五・六世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』1986。

(10) 島根県教育委員会『中山遺跡・巻林遺跡』1994。

(11) 加藤義成『修訂　出雲国風土記参究』1957。

(12) 島根県教育委員会『徳見津遺跡・日畑遺跡・陽徳遺跡』1996。

Ⅰ　大成古墳第４・５次発掘調査

大成古墳第４・５次発掘調査
例　　言

1　本編は平成８～10年度に安来市教育委員会が国・県の補助金を受けて実施した、荒島古墳群発掘調査事業（大成古墳）の調査報告書である。

2　今回報告する古墳の地籍は島根県安来市荒島町字大成2946番地他である。

3　大成古墳の調査は島根大学法文学部考古学研究室の協力を得て行った。調査参加者は本文に記す。

4　調査組織は下記のとおりである。（肩書きは当時のもの・順不同・敬称略）

調査主体：安来市教育委員会

調査指導：岸本直文（文化庁文化財保護部記念物課）・渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）
門脇等玄（安来市文化財保護委員）・東森市良（同）・野津弘雄（同）
牛嶋　茂（奈良国立文化財研究所）・下條信行（愛媛大学教授）
望月幹夫（東京国立博物館）・古谷　毅（同）・川上敏朗（文化財保存計画協会）
大谷晃二（島根県立八雲立つ風土記の丘資料館）
西尾克己（島根県教育委員会文化財課）・柳浦俊一（同）
守岡正司（同）・岩橋孝典（同）

事 務 局：市川博史（安来市教育長）・川井章弘→長瀬博美→成相二郎（文化振興課長）
永見　英→廣江奈智雄（文化係長）・堀江候司・水口晶郎・大塚　充・金山尚志

調 査 員：金山尚志（安来市教育委員会文化振興課）

5　調査に際しては島根大学考古学研究室、仲仙寺住職小村海満氏、土地を所有されている松本直樹氏・松本勝利氏、島根県教育委員会、鳥取県立博物館、大安寺住職松尾昭倫氏、杉本和樹氏（撮影家）、新井　悟氏（明治大学大学院）、五十嵐智恵子氏（文化財保存計画協会）、前畑幸雄氏（中島町教育委員会）、更埴市教育委員会、八日市市教育委員会、㈱サン電子工業をはじめ関係諸機関に多大な協力をいただいた。

6　本調査に伴う遺物・実測図・写真は安来市教育委員会で保管している。

7　本編の挿図の方位は、調査時の磁北であり、真北に対し約７°西偏、平面直角座標（Ⅲ系）の方眼北に対し約８°西偏する。

8　本編で使用した墳丘測量図は、平成３年に東京国立博物館が作成したものである。

9　土層の記載は、小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』（日本色研事業、1989）によったが、本報告ではマンセル記号は省略して示した。

10　図面類及び出土品の整理作業は島根大学考古学研究室と安来市教育委員会で実施し、本編の編集は渡辺（島根大学）・金山（安来市教育委員会）が行った。執筆分担は文末・目次に示した。

11　竪穴式石室は、本来「石槨」と呼ぶべきものであるが、一般的な分かり易さを考慮して、本編では「石室」の語を使用した。

12　地中レーダー探査はマイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所ディーン・グッドマン氏に委託して行った。

1．大成古墳調査研究略史

(1) 古墳の発見

大成古墳に関する調査研究史の概要については第3次調査の報告書でも記した[1]（以下、旧稿という）が、古墳発見直後の経過について、今回新たに東京国立博物館で若干の資料を閲覧する機会が得られた[2]ので、主としてその部分を補いつつ概述する。

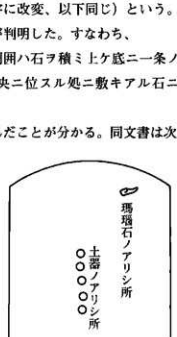
大成古墳は1911（明治44）年6月28日（後述の梅原論文が20日とするのは誤り）に発見された。この顛末は、7月17日付で島根県より宮内省宛に出された文書に詳しい。それによると、土地所有者が「…大字荒島字大成ト称スル所ノ山畑約壱反歩ノ中央部降雨ノ為メ墳穴ヲ生シ不審ナリシヲ以テ探索シタルニ古墳并ニ埋蔵物ヲ発見シタ」（一部の漢字を新漢字に改変、以下同じ）という。発見者からの届け出を受けて県の係官が調査したところ、次のことが判明した。すなわち、

「古墳ノ構造ハ長サ約二十六尺横巾約三尺七寸位ノ壙穴ニシテ周囲ハ石ヲ積ミ上ケ底ニ一条ノ水樋ノ如キモノヲ設ケ其ノ上一面ニ小石ヲ敷詰メアリ而テ其ノ中央ニ位スル処ニ敷キアル石ニハ朱ヲ塗付シアリテ蓋ハ平面石十四枚ヲ以テ覆ヘリ」。

この文面から、最初の「発掘」は右室床下の排水施設にまで及んだことが分かる。同文書は次に、「古墳中ヨリ発見シタル物品」として、

「刀　約五本、鏡　壱個、土器　五個、土ト混合セル朱　約百匁位、瑪瑙石　壱個」

を挙げ、それぞれ簡単な説明を付し、スケッチ図を添えている。また、「発見当時ノ古墳中ノ状況」という出土状態を伝える付図もあるので、参考までに第5図にその写しを示した。ただし、この図の信頼性については全く不明で、方位も記されていない。



第5図　発見当時ノ古墳中ノ状況

その後、宮内省諸陵寮から東京帝室博物館に対し、発掘品が入用かどうかという問い合わせが行われた。入用という返事を受けて宮内省は、8月下旬、島根県に「発見ノ古墳ハ陵墓ノ徴証ヲ認メス但シ発掘品ノ儀ハ悉皆東京帝室博物館ニ差出スヘシ」という指令を送る。こうして、大成古墳の出土品は同年10月に帝室博物館に一括送付されたのである。

翌1912年2月、帝室博物館は県に対し「法定期間満了候処右ハ入用ニ付譲受度該品ハ当館ニ陳列公衆ノ縦覧ニ供スヘキモノニ付可成寄贈ノコトニ御取計相煩シ度若シ相当代価ヲ要スル義ニ候ハヽ其旨御回報相成度…」という文書を送り、買い取り価格についてやりとりがあった後、最終的に同年12月、帝室博物館がすべて購入した。そのときの文書によると、品

目は、

「鏡」1個
「盌」3個
「高坏」2個
「環頭刀身」1本
「刀身」2本
「剣身」2本
「剣身残欠」一括
「石」　一括

となっている。それぞれに簡単な注記が付され、「石」については、「朱ノ付着セル丸石弐個、石材破片壱個、瑪瑙石破片壱個、朱ノ付着セル土塊添」と書かれている[3]。なお、品目のうち、盌は丸底坩、高坏は低脚坏と呼んでいる土器のことである。これらの資料の詳細については、本書7の古谷毅氏報文を参照されたい。

(2)　その後の検討

大成古墳は、梅原末治氏によって広く学界に紹介されることになる。1918年、氏は、当時島根師範学校生徒だった石倉啐栄氏[4]から寄せられた情報によってこの古墳の概要を紹介し、あわせて帝室博物館所蔵の遺物、特に鏡について報告して、本墳が古式方形墳の一例であるとする卓見を示した[5]。梅原論文に引用されている石倉情報は、今日から見るとかなり不正確と言わなければならないが、葺石を持つ大型の方墳であることはきちんと押さえられている。また、遺物の出土状態について、「石室の北壁に接して刀剣類東西にならび置かれ、鏡一面はその南方の中央にあり、土器其他の遺物は更に南に連続して存在せり」という土地所有者の言を伝えている。しかし、石倉氏は石室を南に開口する狭長な横穴式石室と思い込んでいたし、しかもこれは前記した発掘当時の文書の付図とは全く合わない話なので、実際の副葬品配置がどうだったかは不明と言わざるを得ない。また、梅原論文には出土品リストが付されているが、これには仏山古墳出土品が混ざってしまうという誤りが犯された。同じ誤りは、次の野津左馬之助氏の論文でも繰り返されたが、両古墳出土品の帝室博物館収納手続きが時期的に重なっていることを考えると、博物館側の資料に一時的に混乱があった可能性もある[6]。なお、翌1919年に県が刊行した『名勝史蹟及天然記念物』[7]では、簡単な紹介記事の後、「地名大成は御成の訛りたるものならんと而して約三丁を隔てゝ御厩と称する所あり石の厩ありしと云ふ共に関係を有せしものゝ如し」というコメントを付記している。

梅原氏がこの時点では現地に足を運ばずに大成古墳を論じたのに対し、野津氏は、発見翌年における自身の踏査に基づいて『島根県史』(1925年)に本古墳を紹介した[8]。氏はこれが葺石を有する方墳であることを述べ、石室については「開口後年々土砂流入して、今日に於ては内部測定困難なれども」と断った上、全長7.28mの横穴式石室として紹介しているが、これは石倉氏の理解に従ったものであろう。その後、石室は完全に埋まってしまい、しばらくは東京帝室博物館(1947年に国立博物館、52年より東京国立博物館)所蔵の遺物と墳丘のみが検討材料という状況になる。

こうした状況下にあって、大成古墳に正当な考古学的評価を与えたのは山本清氏である。氏は、

出雲地方の方墳と前方後方墳について総括的に論じた論文[9]の中で、大成古墳が竪穴式石室をそなえた方墳であることを初めて正しく指摘するとともに、国立博物館での実査に基づいて、梅原論文以来の同古墳に関する記事には仏山古墳出土品が誤って混淆していることも明らかにした[10]。こうして大成古墳は、出雲地方における代表的前期古墳の一つという位置付けを与えられて[11]、今日に至っている。

東京国立博物館に所蔵された出土品に関しては、特に二角縁神獣鏡と素環頭大刀が学界の関心を集め、いくつかの注目すべき検討が行われて、この種の遺物についての研究を大きく前進させたことは旧稿に記した。また、1980年代になると、この地域の墳墓群を再評価する動きが始まり[12]、出雲考古学研究会によって初めて本墳の測量図も作られた[13]。更に1989年度には、安来市教育委員会の手によって大成古墳や造山古墳群等を含む荒島丘陵主要部の地形測量図が作成された。

(3)　東京国立博物館による調査（第１次・第２次発掘調査）

1990年度から、東京国立博物館学芸部考古課長だった本村豪章氏を研究代表者とする「既掘前期古墳資料の綜合的再検討」という研究課題に対し、文部省科学研究費補助金（総合研究A）が交付されることになった。本村氏はかねてからこの計画の研究対象として大成古墳を挙げており、早速この調査を実現すべく、島根大学考古学研究室に協力を求めた。そこで両者は協力して「大成古墳発掘調査団」（団長・本村、副団長・渡辺）を組織し、翌91年３月と８月の二次にわたって発掘調査を実施した。調査内容は本村氏によって「研究成果報告書」としてまとめられている[14]が、簡単に紹介しておく。

第１次調査では、国土座標による墳丘と周辺の測量を進める一方、80年前に発かれた後埋まっているはずの石室を探すために墳頂部に発掘区を設定した。最終的には10m×４mの範囲（A区・B区）を深く発掘したが、これによって初めて石室の正確な位置や主軸方位が明らかになっただけでなく、石室内の南側過半部分を再発掘して石室構造の調査を行い、また、石室を納める大きな墓壙が南東方向に開口部を持つことを確認するなど、予想以上の成果を挙げることが出来た。しかし、日程的な事情もあって、発掘を中途半端なまま終わらせざるを得なかったことも事実である。発掘の終了に当たっては、石室の発掘部分には土嚢を詰め、石室蓋石上にはエースライトの板を敷いて埋め戻した。ちなみに、このときの発掘範囲（A区・B区・C区）は、今回の第４・５次調査で全面的に再発掘した。

第２次調査では地形測量を続行するとともに、墳丘の北斜面で葺石の、南裾部で石室内から続く排水施設の出口を探す調査を実施した。植林の隙間を縫って設定された北斜面のトレンチでは、葺石が比較的良く遺存していたものの、明確に墳端を画するような構造は確認出来なかった。南の裾部では、排水施設の出口と考えられる遺構が発見された。これは、地山に溝を掘り、左右に石を逆ハ字形に立てた上に蓋石を置いた構造で、一部に数個の拳大の円礫が置かれていた。排水施設内には土が詰まっていたが、雨の後に水がしみ出すのが観察されて、調査員を感動させた。

なお、第１・２次調査に際しては、石室内空気、石材、赤色顔料、粘土、鉄器、土器などに関する自然科学的な検討も並行して行われた。

(4)　安来市教育委員会による調査（第３次発掘調査）

1991年の東京国立博物館による調査は、大成古墳の実像を明らかにしたという点で画期的なものであったが、調査範囲や期間が限られていたため、多くの課題を残すことになった。調査終了時に「調査団」は地元・安来市に対し継続した調査を計画するよう提言し、更に93年にも渡辺が同趣旨の申し入れを行った。一方、安来市教育委員会としても、造山古墳群をはじめとする荒島地区の古墳群を保存し整備する計画を進めつつあったので、その一環として、1994年度より、安来市教育委員会による大成古墳の発掘調査が実現する運びとなった。

こうして1995年３月に行われた第３次調査は、引き続いて島根大学考古学研究室が全面的に協力する体制をとり、東京国立博物館の協力も得て、古墳の墳端を確認することを主要な課題として実施された。詳しくは報告書[15]に譲られたいが、成果の要点を記しておく。まず、墳丘の東西（より正確には、北東ー南西）規模に関しては、墳丘東側は破壊が著しいため、墳丘西側に二カ所トレンチを入れて、そこで本来の墳端と推定される地山の立ち上がりを検出した。この位置を墳端と考えた場合、石室主軸が墳丘中央の位置にあると仮定すると、大成古墳の東西規模は60m近くあったことになる。次に、墳丘南側（つまり山側）のトレンチでは、墳端を画する砂利敷きの深い「区画溝」を検出した。その墳丘側には狭いテラスがあって、その内側に葺石を貼った墳丘（恐らく二段墳丘）がある。前回調査の排水施設出口はこのテラス上面にあったことも判明した。

以上のような発掘所見から、古墳の本来の形状がかなり明らかになった。大成古墳は同じ荒島丘陵にある前期の大方塚・造山１号墳と、立地だけでなく規模もよく似ていることが分かったのである。しかし、想定される段築の実際や「区画溝」の東西両端がどのように処理されているかなどは、今後の調査課題として残されることになった。

以上が、今次の発掘調査に先立つ大成古墳に関する主な調査研究の概要である。

（渡辺貞幸）

註

(1)　渡辺貞幸「既往の調査の概要」『大成古墳第３次発掘調査報告書』安来市教育委員会、1995。

(2)　『明治45年・大正元年埋蔵物録』。東京国立博物館客員研究員として1998年７月に調査した。

(3)　購入品中の「石」に関しては、『東京国立博物館収蔵品目録』(1956)では「石材一括」とあるだけで内容は記載されず、また、本村豪章氏の「古墳時代の基礎研究稿　資料編(1)」(『東京国立博物館紀要』16、1981)では欠落している。なお、各品目に付された注記は後註(10)の『安来市誌』に引用されている。

(4)　石倉暉栄氏については八雲立つ風土記の丘資料館の本間恵美子氏から教示を得た。

(5)　梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳（特に方形墳に就いて）」『考古学雑誌』９－１、1918。

(6)　旧稿では野津氏は梅原論文に倣ったため誤ったように記したが、野津氏は博物館の列品台帳等によってリストを作ったと書いている。

(7)　島根県内務部庶務課『名勝史蹟及天然記念物』1919。

(8)　野津左馬之助「島根県内の古墳」『島根県史』４、1925。

(9)　山本　清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集（人文科学）』１、1951。

(10)　大成古墳出土品に関する山本の実測図と検討は、内田孝ほか『安来市誌』(1970)に紹介されている。

(11) 当初山本は「少くとも中期を下らざる様相」と慎重な表現だった（山本　清「遺跡の示す古代出雲の様相」『出雲国風土記の研究』1953）が、のち、造山１号墳と並ぶ前期的様相の古墳という明確な評価を与えた（『玉湯町史』1961、『新修松江市誌』1962など）。

(12) 渡辺貞幸「寺床1号墳の諸問題」『松江考古』５、1983。
東森市良「安来平野の古墳文化（上）」『島根県立安来高等学校研究紀要』24、1985。
出雲考古学研究会『荒島墳墓群』1985。

(13) 前註(12)『荒島墳墓群』

(14) 本村豪章編『既掘前期古墳資料の綜合的再検討（平成３年度科学研究費補助金研究成果報告書）』1992。

(15) 渡辺貞幸・金山尚志編『大成古墳第３次発掘調査報告書』安来市教育委員会、1995。

2．古墳の現状と調査経過

(1) 古墳の現状

第6図は、大成古墳発掘調査団による1991年の調査の際作成された測量図である。図に見るように、大成古墳墳丘の各辺は東西南北方向とはかなりのずれがあるが、便宜上、北西側のきれいな斜面をなしている辺を北辺と表現し、他の辺についてもこれに合わせて東・西・南の語を使用することとする。

まず墳丘北辺は、現在は檜の植林がなされているが、等高線にさほど大きな乱れが見られないので、旧状をある程度とどめているのではないかという印象を受ける。第2次調査で、植林の隙間を縫うように発掘区を設定して葺石と墳端を確認するための調査を行ったことはすでに記した。

東斜面は今は雑木林となっているが、開墾によって著しく改変されている。段々畑の跡が残り、各段には石垣が造られている。この石垣はかなり崩落しているが、石垣の背後には地山が露出しているので、これらの段が、後世に古墳の墳丘を大きく破壊することによって作られたものであることは確実である。

墳丘の西斜面は特にその北側が急傾斜になっているが、斜面下はなだらかな平坦地形になる。このなだらかな部分はかつて畑だった所（現在は荒れ地）で、第3次調査で2本の発掘区を設定して墳端を確認するための調査を行ったところ、畑を造成する時に墳丘をかなり削り込んでいることが分かった。等高線の流れからすると、北方ほど墳丘の破壊は大きかったことが分かる。

南斜面は今は竹林だが、幅20m余りにわたって大きく墳丘を削り畑としていた平坦地があって、そのカット面にはやはり石垣が作られている。これら現在の墳丘各所に見られる石垣は、墳丘を削った時に出た葺石を再利用したもので、すべて後世の、おそらく近代以降のものであろう。南斜面では第3次調査で断面逆台形の溝を検出した。この畑だった部分のさらに南は南東に向かって高くなり、岩田山と呼ばれる丘陵へと続く。南西側は逆に谷になって落ち込んでいる。南斜面西寄りの部分は、墳頂の土が流出したかのような緩斜面をなしている。

なお、現在墳丘上は全面に檜の苗木が植えられている。

(2) 調査経過

第4・5次調査の目的は石室及び墓壙の構造の解明と残留遺物の回収であった。期間は3ヶ年で、2ヶ年を発掘調査に、1年を報告書作成にあてた。また、発掘調査に先立ち地中レーダー探査を実施した。

a） 地中レーダー探査

期間：1996年8月5日

目的：類似した形態である造山1号墳では2つの竪穴式石室が検出されていることから、埋葬施

設が複数あるかどうかを探査した。

経過：墳頂部に1m間隔の格子状に、深さ3.3mまでデータを収集した。

結果：いくつかの反射のみだれが確認できたが、既掘の石室以外に石室が存在する可能性は低いと判断された。

b） 第4次調査

期間：1997年3月4日～28日

目的：期間が限られていたため、墓壙平面形態の把握を目的とした。

経過：まず、第1次調査の埋め戻し土をすべて取り除いた。そしてAB区北壁ラインを東に延ばすC区、B区東壁ラインを北に延ばすD区を設定した。その後、石室の主軸ラインを設定し、これを基準に排水施設出口部分にE区、主軸に直交するF区・主軸に沿って北にG区を設定した。

結果：地山を掘り込んで南北約16m、東西約11mの墓壙の存在が判明した。また、3～4の段をもつことが明らかになった。また、東西に別の埋葬施設の可能性が強い遺構を、墓壙埋め土から柱穴・上器溜りを検出した。

c） 第5次調査

期間：1997年6月10日～10月8日

目的：石室内外の調査・残留遺物の回収・土器溜りの完掘

経過：D区・F区・G区を控え積みもしくは地山が出るまで掘り下げた。北端の大井石を出すためH区、控え積み外側の排水施設の構造を確認するためI区を新たに設定し掘り下げた。併行して土器溜りも掘り下げた。

結果：石室保護のため、完全な断ち割りはできなかったが、石室の構築過程をうかがう最低限の情報を得た。石室内の鏡片を回収することができた。土器溜りは予想外に深く、調査は中断した。

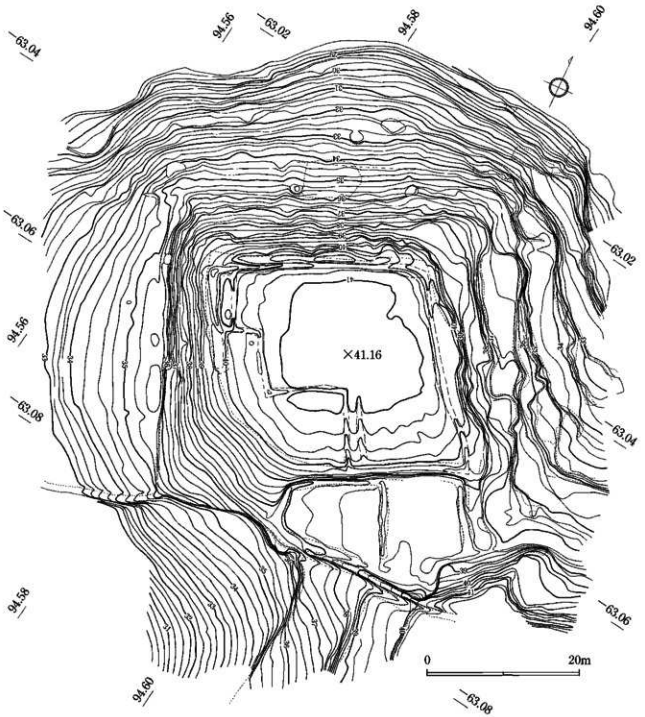
その他：8月24日に現地説明会を実施し、約300人の見学者があった。

埋め戻しは石室内に土嚢を詰め、石室の上に土を盛り、その上に調査で外した蓋石を乗せ、その上にシートをかぶせ、再び土で覆った。その際、石室直上部分を高く埋め戻し、水が石室に直接浸透しないよう留意した。

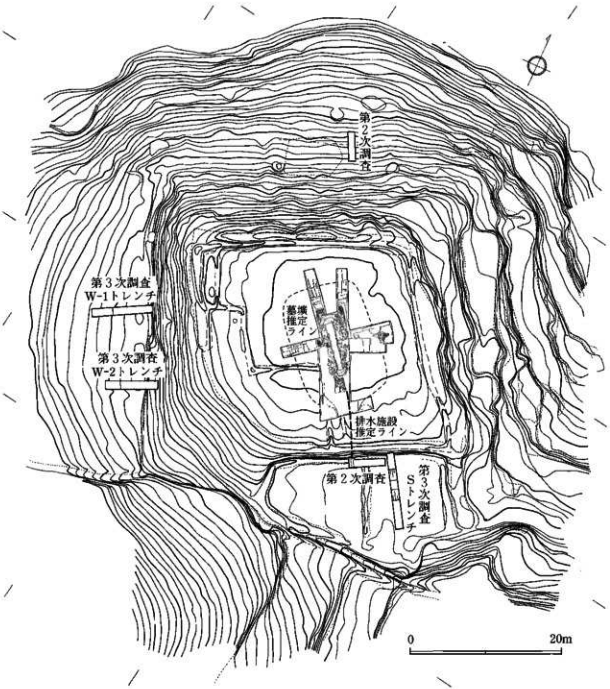
d） 遺物整理と分析、報告書作成

期間：1997年10月～1999年3月

経過：遺物整理は島根大学と安来市教育委員会で分かれて進めた。その間、古谷　毅氏・川上敏朗氏を交え2度の検討会を実施したほか、数回の討論会を行った。鏡についてはブロンズ病が進行していたため、保存処理を行った。また、粘土の分析を三浦清氏に、鏡の合成写真を牛嶋茂氏にそれぞれ依頼した。


94.56
63.02
94.58
94.60
63.04
63.06
63.02
94.56
63.08
63.04
94.58
63.06
94.60
63.08
×41.16
0
20m

第６図　大成古墳測量図



第７図　大成古墳発掘区配置図

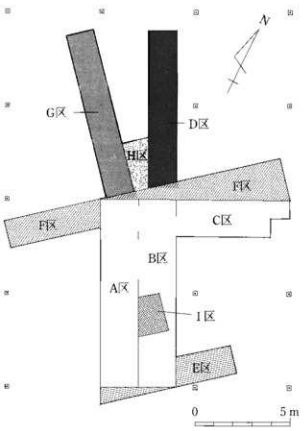
(3) 発掘区の配置

今回２つの軸を基準に設定した９本のトレンチを調査した。

見かけの墳丘主軸（以下“墳丘軸”と略す）は第１次調査の際設定した軸で、見かけの墳頂平坦面の輪郭に平行する。この軸は磁北に対しN25°Wである。墳頂部に５mの方眼で杭を設置している。

石室主軸は第４次調査で新たに設定された石室の主軸ラインで、方位は、N39°Wである。

なお、重複部分は先に設定した発掘区名を優先することとした。



第８図　墳頂部発掘区概念図

〈A　B　区〉

第１次調査で設置された、墳頂部南側に墳丘軸に沿って設けた東西４m×南北10mの発掘区である。このうち東２mがBトレンチ、西２mがAトレンチにあたる。石室の南半分にあたるため、再び掘り返した。今回の調査では新たに1区の部分のみ掘り下げた。

〈C　　区〉

墳頂部東側に墳丘軸に直交して設けた東西６m×南北２mの発掘区である。第１次調査でも設定したが、表土しか掘っておらず、移動された葺石が埋め戻されていた。

第４次調査で、墓壙の東側掘形を検出することを目的としてさらに掘り下げた。その結果、上器溜りを検出し、最終的にはF区東と合体した。

〈D　　区〉

墳頂部北側に墳丘軸に沿って設けた東西1.5m×南北8.5mのトレンチである。B区の延長にあたる。

目的：石室主軸ラインはすでに南半分の土層が失われているため、１次調査のB区西壁断面図と合成することによる墳丘軸での南北断面図作成。

結果：段をもつ墓壙と最下段のコーナーを検出した。最下段はほぼ直角に曲がっている。控え積みの礫の高さまで掘り下げた。

〈E　　区〉

墳頂部南側に石室主軸に直交して設けた東西7.5m×南北1.5mのトレンチである。石室南側排水施設の出口方向における墓壙掘形の確認を目的として設定した。その結果、南側の掘形を検出した。排水施設の出口が南に抜けるため、南にかけてすぼまっている。

〈F　　区〉

墳頂部中央に設定した石室主軸に直交した東西15.0m×南北1.5mのトレンチである。

目的：石室主軸直交ラインの墓壙と、石室構造の関連の確認。

結果：墓壙と石室の構築の関係が明らかになった。墓壙埋土を掘り込んだ柱穴を検出した。また、石室の東西に新たに別の埋葬施設に関連する遺構を検出した。そのため墓壙の掘り形は検出できなかった。

〈G　　区〉

墳頂部北側に位置する石室主軸方向の東西1.5m×南北9.0mのトレンチである。

目的：石室主軸ラインの墓壙と、石室構造の関連の確認。

結果：4段の墓壙を確認した。

〈H　　区〉

墳頂部中央に設定した石室主軸方向の東西1.5m×南北2.5mのトレンチである。

目的：天井石北端の確認。

結果：北端の天井石を検出した。

〈I　　区〉

石室の南側のB区内に設定された石室主軸方向の東西1.5m×南北2.0mの発掘区である。

目的：石室外における排水施設の確認。

結果：南の裾え積みを検出し、排水施設蓋の上の粘土を確認した。

【発掘調査参加者】

渡辺貞幸（島根大学）・望月幹夫・古谷　毅（以上、東京国立博物館）・片倉愛美・細田美樹・田浪文雄・
石田陽子・神柱靖彦・横原桃代・渡辺桂子・岩田亜希子・竹内　希・宮崎克美・藤原光代・山内英樹・
赤井和代・浅井宏是・石川未知・石田為成・五十嵐真人・伊藤国義・今岡利江・小倉育子・久保奈都美・
下田幹子・住友孝嘉・塚上清之・坪井聡子・樋口正典・本庄　研・宮原　泉・池田成志・大井江梨奈・
坂上祐　・樋口武史（以上、島根大学院生・学生）・竹広文明（島根大学汽水域研究センター）・
会下和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター）・金山尚志・水口晶郎・
大塚　充（以上、安来市教育委員会）・渡辺公子・金山喜次大・田川栄重・福谷和大・田川喜好・
弓浜俊夫・福本俊雄・福島延好・水野　孝・日野　登

【整理作業参加者】

渡辺貞幸（島根大学）・古谷　毅（東京国立博物館）・細田美樹・田浪文雄・石田陽子・神柱靖彦・
横原桃代・渡辺桂子・岩田亜希子・竹内　希・宮崎克美・藤原光代・赤井和代・石田為成・今岡利江・
小倉育子・久保奈都美・下田幹子・坪井聡子・宮原　泉・福谷知子・太田貴之・沖塩陽一郎・坂上祐　・
佐々木知子・杉　朋子・樋口武史・増田のぞみ・水町裕子（以上、島根大学大学院生・学生）・
桃崎祐輔（筑波大学歴史・人類学系日本学術振興会特別研究員）・加納幸正（奈良大学学生）・
金山尚志（安来市教育委員会）・安達裕子・泉あかね

（金山尚志）

3. Ground Penetrating Radar Survey

Dean Goodman
Geophysical Archaeometry Laboratory-Nakajima
University of Miami Japan Division

(1) Introduction

The Ohnari Kofun in Yasugi City, Shimane Prefecture was surveyed with a ground penetrating radar (GPR) system in August of 1996. The kofun is a square shaped mound in which a stone chamber burial was discovered during earlier excavations. The primary objectives of the GPR survey was to determine the location, size and depth of any additional burials at the site as well as to determine the location of the earlier excavated burial and possibly any anomalies which may have been just outside of the excavated trenches.

The site was surveyed with a Geophysical Survey Systems Inc., SIR-2 digital pulse radar system using a 300 MHz antenna. Profiles across the site were collected at 1 meter intervals along approximate west-east and south-north lines. A map showing the areal coverage of the kofun with radar is given in Figure 9. All radar reflections within a 110 nanosecond time window were recorded. Assuming a nominal microwave velocity of 6cm/ns for the soils at the site, an penetration depth of the 3.3 meters for the survey was estimated.

(2) GPR Results

An example radargram showing radar reflections down to 260cm (86ns) is given for line 12.0m along a south-north transect in Figure 10. This profile corresponds to the area where the first excavation revealed a stone burial at the site. Near the 8 meter range on the radargram reflections from the previously excavated burial were recorded. In general, the radar reflections were relatively weak on most of the profiles, and very few continuous anomalies could be discovered simply by viewing the radargram dataset alone.

Time slice analysis was applied to the data to better compare the weaker amplitude reflections measured across the Ohnari Kofun. Time slice were computed at 10ns intervals, or approximately 30 cm depth intervals. The top 5 time slices down to a depth of 150cm are shown in Figure 11. Anomalies associated with the earlier excavated burial on the site can be seen very clearly on the 90-120cm and 120-150cm maps. This anomaly extends from about x=13.5m, y=5.0m to about x=13.0m, y=12.0m as seen on the deepest map from 120-150cm. The actual size of the burial may in fact be slightly shorter and narrower than their corresponding radar pattern would suggest as a result of the wide field of view in which microwave from the antenna are transmitted into the ground. Some

reflections appear to be just outside and slightly northwest of the earlier excavated area as can be seen in the 90-120cm map. This might indicate that not all of the burial structure was revealed during the first excavations.

Various low reflection rectangular areas which appear to be connected can be seen particularly well on the 120-150cm time slice map. It is not known what features in ground account for these reflections however, there is a possibility they may represent some previous excavation trenches, modern farming disturbances, or soil structures connected with the initial building of the kofun.

A large area in the southwest corner of the site where large trees exist (approximately near x=7m, y=6m) relatively strong radar reflections were recorded. The strong reflections here may be a result of several factors including reflections from tree roots, reflections from different soils, or from some other unknown structures.

(3) Discussion

It is not possible to determine absolutely from radar if an additional burial is present on the site. Nonetheless, strong reflections which might indicate an intact stone burial were not discovered from the radar records. This hypothesis may support the claim that the Ohnari Kofun is a single stone burial mound.

3．地中レーダー探査

(1) は　じ　め　に

1996年８月、地中レーダー（GPR：Ground Penetrating Rader System）を用いて、島根県安来市大成古墳を探査した。本古墳は正方形であり、事前に行われた発掘により石室が１基が発見された。本レーダー探査の主な目的は、先に発掘された埋蔵物の位置を確認すると共に、試掘坑の外に他の変則的な反応があるかどうかを確認することはもちろんであるが、さらに遺跡に新たな埋蔵物が存在するかどうか、あるとすれば、その深さ、位置を確認することであった。

探査はGSS社製のSIR-2型デジダルパルスシステムに、300MHzのアンテナを用いて実施した。現地における断面図のデータ収集は、ほぼ東西及び南北線に沿って、１m毎に区切って行った。

レーダー反射による古墳の範囲を示す地図を第９図に示す。110ナノ秒時間帯内全ての反射がデータ収集された。現地の推定伝播速度が６cm／ナノ秒なのでレーダー浸透の深さは3.3mと推定される。

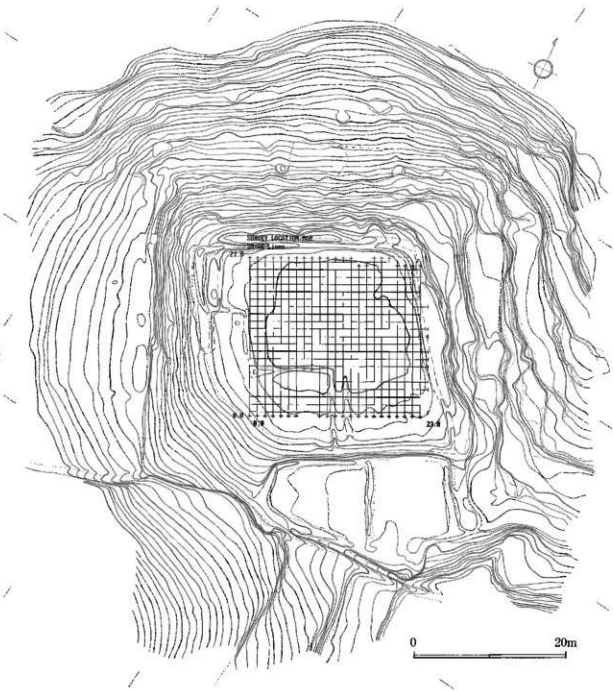


Figure 9. Survey location map

(2) 探 査 結 果

深さ260cmまでの反応を示すレーダー図例として12mラインの南北断面が第10図に示されている。

この断面図は第一次発掘調査で石室が１基発掘された地点に一致する。前回発掘された石室のレーダー反応が約８m範囲で記録された。一般的にレーダー反応はほとんどの断面図において比較的弱いものであった。レーダーのデータセットだけを見ただけでは継続的な変則反応は発見しにくい。

大成古墳全体で測定された比較的弱い反応をより比較しやすくするために、タイムスライス分析を適用した。タイムスライスは10ナノ秒毎にタイムスライスかもしくは深さ30cm毎に作成した。

深さ150cmまでの上から５枚のタイムスライスを第11図に示す。以前に発掘された石室に関連する変則形が90～120cmと120～150cmの図表に非常に鮮明に表れている。この変則形は120～150cmの最深部図表に見られるようにおよそX＝13.5m、Y＝5.0mのところからほぼX＝13.0m、Y＝12.0のところまで伸びている。石室の実際の大きさはレーダー反射が示すものよりも若干短く狭いものと推定される。これはアンテナから発するマイクロ波が地中に伝播する範囲が広いため誤差が生ずるためである。

90～120cmの図表で見られるように、以前に発掘された石室のやや北西に若干の反応が見られる。このことは第一次発掘調査で石室の構造物が全部掘り出されたわけではないことを示している。

0.9～1.2mのタイムスライスマップで関連があると思われる様々な低い長方形の反射域が見られる。これが何であるか定かでない。事前に行われた発掘トレンチか、近代に行われた整地などによるものか、古墳作成の構造上のものなのか色々な可能性があろう。

大木が存在する（X＝7m、Y＝6m付近）南西部の大きな範囲において、比較的強いレーダー反射が記録された。これらの反射は木の根によるものか、地形の変化、土質の変化によるもの、もしくはその他の未知の構造物などいくつもの理由が考えられる。

(3) 課　　題

本古墳においてレーダー探査から、別の石室を示唆する強い反射は見られなかった。このように見てくると大成古墳は単一の石室のみの古墳といえるだろう。

（ディーン・グッドマン）

（和訳：金山尚志）

註

・和訳に際しては、ディーン・グッドマン「地中レーダー探査報告書　大成古墳：島根県安来市」マイアミ大学地球物理学応用考古学研究所1996を参考にした。

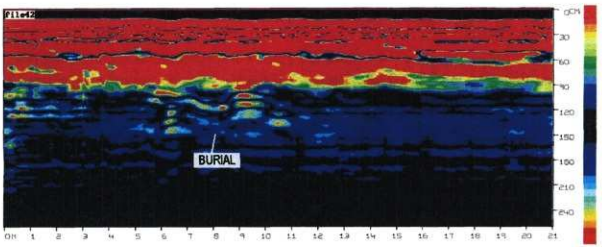


Figure 10.　Profile along 12.0m south-north at Ohnari Kofun.　Reflections from the suspected burial at the site are seen near the 8 meter range.

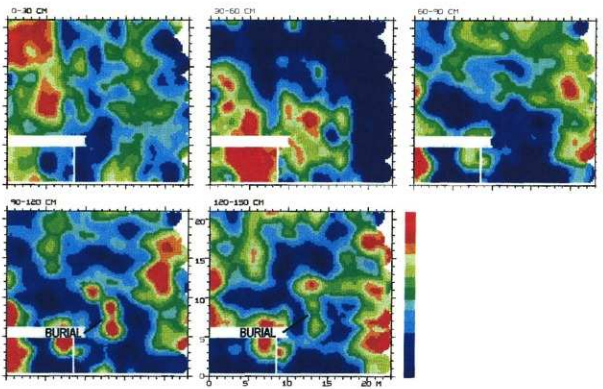


Figure 11.　Time/depth slices computed at 30cm intervals for the Ohnari Kofun.　The location of previous excavations trenches and burial reflections can be seen on the 90-120cm and 120-150cm time slice maps.

4．竪穴式石室の発掘調査

竪穴式石室の調査は、1991年に行われた東京国立博物館による第1次発掘調査を引き継ぐものである。今回の発掘に際して同博物館から当時の図面類の提供を受け、また、以下の記載に当たっても、当時の所見を参考にしていることを明記しておく。なお、墓壙長軸や石室中軸線は東西南北の方向とは45°前後ものずれがあるが、便宜上、石室の中軸方向をおおよその南北と見立てて、墓壙開口部のある方向を南と表現して記述する。

(1) 墓　　壙（第7・12図、図版7）

墓壙の調査はD区、E区、F区、G区において行った。墓壙は地山のクサリ礫層を掘り込んでつくっている。全面的な発掘をしたわけではないが、トレンチ調査の結果を総合すると、平面形態は隅丸長方形を呈するものと推定され、南側に、漏斗状に狭まる平面形をした開口部を持つ。開口部の底面には石室内から続く排水施設が通る構造である。墓壙の規模は、長軸（南北）は南方に開口部があるため計測が難しいが、およそ16m前後であろう。短軸についても、東西両辺とも別の遺構で切られているため正確な計測は出来ないが、石室が墓壙の中央にあると仮定すると、約11mと復元される。墓壙最下段（1段目）の短軸（東西）長は約4.8mを測る。墓壙は3～4の段を有するが、各段がトレンチ間でどのように対応するかは必ずしもはっきりしない部分がある。以下、それぞれの調査区について所見を述べる。

〈D　区〉

墓壙の壁には4つの段が検出された。最下の1段目は70°ぐらいの急な立ち上がりで、上面のレベルは約39.5m、テラス幅は0.4m前後である。この調査区では1段目の北東コーナーを検出することが出来た。コーナーの平面形は隅丸をなす。2段目はきわめて低い段で、レベルは39.6～39.7m、発掘区西壁においてはわずかな段を有するのみである。3段目は30°～50°の角度で立ち上がり、テラスのレベルは約40.2m、テラス幅は約0.7mを測る。4段目は一部に撹乱があって明確ではないが、勾配は40°～50°、墓壙上端の推定レベルは約40.8mである。墓壙の最深部には拳大の円礫が敷かれているが、セクション・ライン（D－D'）沿いで礫をはずして調査したところ、墓壙底のレベルはその北端で38.85m、礫層の厚さは約25cmであった。従って、この辺りにおける墓壙の現存の深さは1.95m、1段目の高さは70cmぐらいである。この礫は、後述する石室基底部に敷かれた礫とつながるものと推定されるが、石室内北端における壁体の下の礫の面と比べると15cmほどレベルが高い。

〈E　区〉

墓壙の開口部に当たるが、底まで露出せず、39.8m辺りのレベルで発掘を停止した。発掘深度までは段は検出されていない（C－C'）。西側は1991年の調査で墓壙の立ち上がりの一部が明らかになっており、今回はその対岸である東側の肩を検出すべくトレンチを設けた。しかし、E区の東寄りには大きな植樹穴による撹乱があって、法面がわずかに検出されたのみであった。検出部分の墓壙壁傾斜角度はきわめて急峻で、およそ80°を測る。西側では表土直下の40.5m前後のレベルで地

山が現れるが、攪乱を受けていることも考えられるので、これを墓壙の肩のレベルと断言することは出来ない。西側立ち上がりの傾斜角度もかなりきつく、75°ぐらいある。石室の中軸線は西側の肩から２m近く東の地点を通っており、東側に残っていた地山の立ち上がりとも考え合わせると、開口部の中心は石室中軸の延長線よりやや西に片寄っているようである。

〈F　区〉

石室横断方向のトレンチである。東側は、後述の粘土様かと思われる遺構によって切られており、最下の１段目が検出されたのみである。60°前後の急傾斜で立ち上がり、39.6mでテラスとなる。テラス幅は1.3m以上あったことは確実である。ここでは１段目の壁に控え積みの石が接していたため、墓壙最深部まで発掘することは出来なかった。

西側では、少なくとも３段あったことが確認された。１段目は最深部に礫敷きがある。礫の上面レベルは39.2mで、石室内壁体下部の礫のレベルと比べると20㎝以上高くなっている。１段目の壁は70°ぐらいの急傾斜で立ち上がっていて、テラスのレベルは東側と対称の39.6m、テラス幅は約1.4mである。この段の上は、後に述べるⅠ段階の埋め土の時点までに、５～10㎝の「置き土」がなされている。２段目は傾斜角50～60°、レベル40.1m前後のやや凹凸のある段で、幅は約1.0mある。断面図（B－B'）で見ると、この段は上に厚く土が盛られて、傾斜角度30°ぐらい、テラス高約40.4mの段が造作されているように見える。この「置き土」は墓壙埋め土のⅡ段階以前になされているのであるが、墓壙の段を造り直したものか、墓壙を埋める過程で何らかの必要があってこうした造作をしたのか、よく分からない。その上の３段目の肩は、また別の遺構によって切られており、本来の位置は不明である。狭い段がもう１段あった可能性も全く無いわけではない。残存する墓壙上面のレベルは約40.7mである。

〈G　区〉

石室中軸上のトレンチである。隣のD区と基本的に対応して４つの段が検出されている（A－A'）。１段目は70°前後の急勾配で、上面レベルは39.5m、テラス幅は約0.5m。最深部には礫敷きがあり、上面レベルは39.2mで、石室内北端における壁体下の礫面より20㎝以上高い。２段目は40°ぐらいのやや緩い傾斜で、上面レベルはおよそ39.7m、テラス幅0.6m前後である。３段目も30°ほどの緩傾斜で、上面レベルは40.0～40.1m、テラス幅は約0.7mである。４段目は約50°の傾斜で、約40.6mのレベルである。その外にもう１段ごく低い段があるようにも観察されるが、D区では対応するものが見られないので局部的な変異かも知れない。

(2)　石室上方の土器出土状況

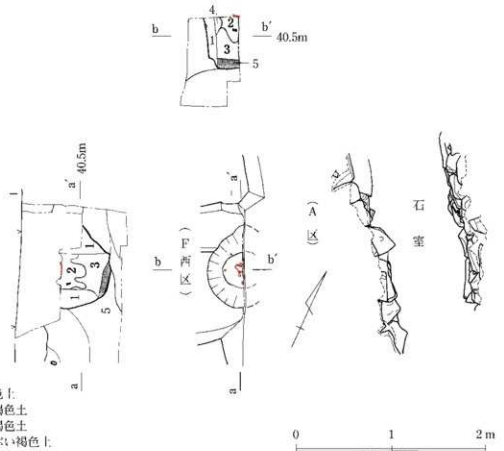
今回の発掘では各発掘区で土器片が出土しているが、石室上方で出土が特に集中する地点があった。それは、D区・G区の南部及びH区の、竪穴式石室の蓋石、控え積み、墓壙最下段を埋めている礫の部分の上方、言い換えれば、墓壙最下段より内側に当たる範囲の上方の表土中である。D区・G区ではこの地点以外にも土器が散在していたが、それほど数は多くなかった。C区・F東区・F西区でも石室に近いところから土器の出土が見られた。土器はすべて表土層下部の墳丘面（墓壙埋め土最上層）直上から出土しており、墓壙埋め土中に包含されたものではない。また、石室内からも検出されているが、すべて石室内に崩落した表土の中からの出土であった。

出土土器はそのほとんどが接合しない細片であった。こうした点から考えると、土器が墳丘上に並べられていたという可能性は低く、むしろ、すでに細片となっていたものを墳丘上の石室上方部に置いたと考えた方が良いように思われる。

(3)　F西区の柱穴（第13図、図版13）

墓壙の調査中、F西区においてピットが1基検出された。ピットが発見されたのはF西区とA区の接する地点で、A区の側は1991年の第1次調査の際に掘られていて既に失われていたため、ピットの西半分を検出するにとどまった。ピットは、石室西側控え積みのすぐ背後の真上に位置する。ピットの掘形を確認したのは40.70mのレベルであったが、掘り込み面はもう少し高かったと考えられ、また、掘り込まれているのが後述するⅣ段階つまり最後の墓壙埋め土中であることから、本来、このピットは墓壙が完全に埋められた後で墳丘上面から掘られた可能性が強い。

上記したようにピットはその西半を調査したのみだが、ほぼ円形を呈するものと考えられ、復元すると直径およそ80㎝、深さ55㎝以上あり、底面のレベルは40.15mである。形状は南北セクションでは比較的緩やかなU字形を呈するが、東西セクションではほぼ円筒形で、部分的に段が出来ている。ピット内の土層の状況から、このピットは木柱を立てた柱穴であると推定される。木柱は直径40cm程度のもので、ピットの底には明黄褐色粘土を敷き、柱の周囲には橙色土を入れて裏込めと



第13図　柱穴位置図及び土層断面図（赤は土器片を示す）

している。ピット内の柱根部分の土からは若干の土師器片が出土しており、検出面付近からは壺形土器の底部が出土している。なお、この柱穴に対応する他の柱穴の存在も想定して発掘区内を精査したが、検出することは出来なかった。

(4) 石室の構造（第14図、図版２～４、６～12）

今回の調査では、1991年に行われた南側の発掘調査を引き継いで石室の完掘を目指した。未発掘だった石室北半の部分にも多量の崩落土ないし流入土が堆積していたが、後述するように、これは明治末年の「発掘」以降に、新たに蓋石が崩落したことによって流入した土である。これを取り除いていくと、39m前後のレベルで、多量の円礫と粘土塊が混ざった明褐色粘質土の面が現れる。この上層は、明治期の乱掘時に棺床の粘土や礫が流入土とかき混ぜられて形成された攪乱土であることが、第１次調査で明らかにされている。そこで、浮いた礫を取り上げながら床面の状況を調査したところ、排水溝の蓋石がはずされた部分がかなりあり、排水溝内からも副葬品の残片が出土することなどから、石室床面は地山直上まで徹底的に攪乱を受けていることが再確認された。なお、石室の南側の前回調査部分は、棺床粘土の残りが比較的良好な部分があるため、今次の調査では、主として石室北側において石室基底部の構造を明らかにすべく掘り下げを行った。また、今回の調査では、壁体を断ち割る調査は実施していない。石室に使用された石材は、第１次調査の際の三浦清島根大学教授の分析で、板状節理の発達したカンラン石玄武岩と、流紋岩の円礫であることが明らかにされている。なお、石室南部の西壁下部に四角い石がかませてあるが、これは明治時代の「発掘」時に置かれたものであろう。

a）石　　室

大成古墳の竪穴式石室は、磁北に対しN39°W、真北に対しN46°Wに主軸をとる（平面直角座標Ⅲ系の方眼北に対してはN47°W）。石室全長は7.5m（壁体最下段の石を基準にすると7.55m）、幅は南端で1.0m、北端で1.2mとわずかに北側が広がっている。排水溝が南へ傾斜していることからも、北側が頭位であったと考えられる。石室の高さについては、攪乱のため当時の棺床レベルを知ることができないが、排水施設の蓋石上面から石室蓋石下面までの高さは約1.2mを測るので、棺床面からの高さは1.0～1.1m前後であったと推定される。

〈蓋　　石〉（第15図、図版６・10）

古墳発見当時の記録では石室の蓋石は14枚あったことになっているが、原位置で残存していたのは６枚のみであった。すなわち、第１次調査の際確認されていた南寄りの連続した３枚、中央部の連続した２枚、及び北端の１枚である。今回新たに発掘した石室北半の部分では、おそらく３枚分の蓋石が割れて石室内に落ち込んでいたが、いずれも石室内攪乱土の上の流入土中にあるので、明治期の「発掘」以降の崩落であることが確実である。調査中に、中央部で割れて傾いていた蓋石が１枚崩落した。石室南寄りの蓋石欠落部では、第１次調査の際に、起こされた状態の蓋石を検出しており、明治期の「発掘」がこの部分から行われたことは間違いない。

蓋石の架け方には南側と中央部・北部とで違いが見られた。南側では大きな石と石の隙間をひとまわり小さな平石でふさいでいるのに対し、中央部・北部ではその隙間を40cmほどの割石を並べる

ことによってふさいでいる。そしてその上はいずれも粘土で覆っている。この粘土は灰白色の精良なもので、蓋石全体を被覆するのではなく、上記したような隙間を埋めるといった使い方をしている。粘土は控え積みの上部をも覆っている。蓋石は厚さ15cm程度の比較的薄い割石を用いている。蓋石には表裏に、一見、はつったような痕跡が見られるものもあったが、人工的なものであると断言することは出来なかった。なお、石室の発掘調査に当たっては、蓋石は南北両端のものを残して取り外した。

〈壁　体〉

石室壁体はほぼ最上段まで比較的良好に遺存していたが、特に南側においては孕み出しが見られた。壁体は緩衝材として粘土を多量に用いて、11～13段に築き上げられている。緩い持ち送りがあり、石室幅が最下段と最上段では、北小口で15cm、南小口で10cmの差がある。南北両小口の壁体は垂直に積み上げられている。石材は丸みをおびた自然石とスレート状の割石が使われており、石室の下部において扁平な自然石が多く用いられる傾向が見られた。スレート状の割石は壁体の重みを受けて剥離したものも多く見られた。石室のコーナーは下部は直角になるように積むが、南壁では東で6段目、西で8段目、北壁では東で3段目、西で5段目辺りから上では斜めに石を架け渡して、弧を描くように処理している。また石室の壁面には赤色顔料が塗布されており、緩衝材の粘土にも赤色顔料が認められた。赤色顔料は最下段から5段目までほとんどの石に認められ、更に最上段まで所々認められるので、石室構築当時は石室内壁全面に塗布されていたと考えられる。なお、壁体に塗布された赤色顔料はベンガラ（酸化第二鉄）であることが、91年の調査の際に分析されている。孕み出しのため明確でない部分もあるが、下から5段目前後の石の上面で横方向の目地が通るように観察される（第39図参照）。

b）基　底　部

石室の基底部構造を明らかにするため、墓壙横断セクションに沿ってサブトレンチを設けた（第14図B－B'）。ここでは地山直上まで撹乱を受けており、朱の付着した粘土塊や円礫が無秩序に混在し、排水施設の蓋石もはずされていた。しかし、東西壁体の近くは本来の姿を残しており、壁体最下段の石（根石）の下に拳大ぐらいの円礫が詰まっているのが確認され、東側の壁体根石と円礫との間には粘土塊が混じていることも観察された。こうしたことから、まず排水施設を作った後、地山上に15cm程度の厚さ（現状）で円礫を敷き、次に壁体を積み上げる部分の一部に粘土を置き、その上に壁体を築き上げていると判断された。石室南壁においても、円礫と粘土の上に壁体最下段の根石を置いており、その後再び礫と粘土をかませて、その上に壁体を積み上げている状況が観察された。

石室基底部に敷かれた礫は、D区・F西区・G区で確認された墓壙最下部の礫面とつながる可能性が強い。前述のように、壁体根石の下の礫のレベルは控え積み背後の礫面より低いのであるが、その理由としては、墓壙は中央がより深くなるよう掘られていたか、もしくは、石室部分では礫の厚さがもともと薄かったことに加えて壁体の重みで締まり沈んだことなどが想定されよう。

明治期の徹底的な撹乱によって棺床の本来の姿は失われているが、第1次調査の際、排水施設の上に敷かれた礫の上に棺床粘土が一部残存しているのが観察されており（第14図のD－D'セクション）、今回の調査でも、特に壁際近くでは各所で粘土が残っているのが認められた。しかし、撹乱

土の中の粘土の量から考えて、棺床粘土はそれほど厚くはなかったと推定される。また、攪乱土中の粘土塊には多く朱が付着しており、粘土棺床もしくは棺底に水銀朱（91年の調査の際に分析）が塗られていたことが分かる。

c）排水施設

排水施設については、石室内および石室外南方のⅠ区においてその構造を調査した。排水施設は石室中軸線の地山に、断面V字形ないしU字形の素掘りの溝を掘り込み、上部は厚さ5～10cmの扁平な自然石を並べて蓋石とするものである。石室基底の円礫はこの蓋石の上に敷かれる。溝の規模は上端幅20cm、深さは10cmほどである。この溝は、石室中軸上を南北に貫き、両端とも壁体の下をくぐってさらに伸びていると見られた。排水施設の北端の処理については未調査のため不明であるが、石室外南方への延長は、Ⅰ区において確認されている（第17図）。Ⅰ区においては排水施設の蓋石を確認したが、ここでは蓋石上面を約5cmの厚さの粘土で被覆しており、石室内とはやや異なった様相を呈していた。排水施設の南端については、91年の調査で、墳丘外へ排出される出口が明らかにされている。それによれば、排水施設は石室外に出てからやや西にカーブしながら緩く下降し、南側の墳丘テラス上で墳丘外に出る。その全長は19.5m以上、傾斜角度は石室内では2°前後、全体では3°前後である。石室内北端の排水溝底とその出口とのレベル差は約1mである（表2）。

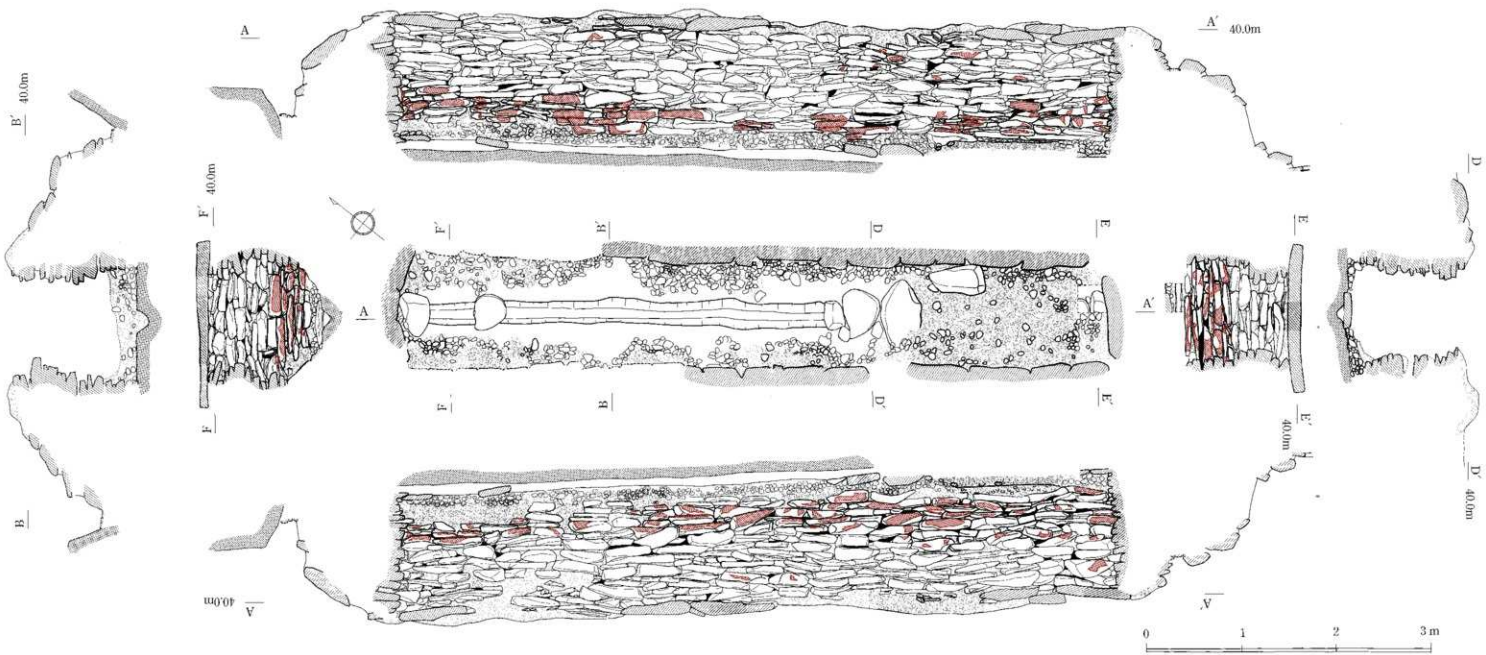
表2　排水施設のレベル　(m)

	蓋石上面	溝底
石室内北端	38.91	38.78
石室内南端	38.69	—
Ⅰ区	38.50	—
排水溝出口	38.02	37.80
排水溝最末端	—	37.68

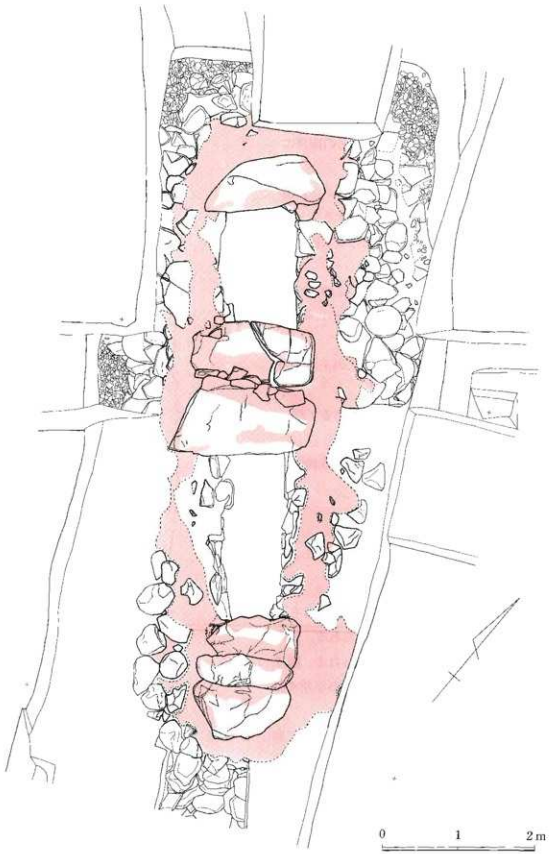
(5)　石室内遺物の検出状況（第16図）

大成古墳の副葬品は既に明治年間に取り上げられており、上師器、三角縁神獣鏡、鉄刀、鉄剣などが知られている。今回の調査では、新たな副葬品の発見と残留遺物の回収を目指した。今回調査時の石室内出土遺物には、明らかに流入土中から得られたものを除くと、鏡片、鉄片、木片、朱塊などがある。これらは明治期の撹乱土である明褐色粘質土中より検出され、これらの遺物と混在した状態で近代の陶磁器やランプ片も出土しており、原位置を保った遺物は皆無であった。最も多かったものは鏡片で、鉄片と木片がそれに続くが、いずれも小片であった。出土遺物のうち鏡片と鉄片について出土位置をドットしたものが第16図である。これによると、鏡片は北壁から2～3mの範囲に、鉄片は4～5mの範囲に集中する傾向が見られる。

副葬品の本来の出土状況については、「1．大成古墳調査研究略史」で詳しく紹介されているように異なる複数の証言があって、今となっては不明という外はない。上記の破片出土状況が本来の副葬品配置を多少なりとも反映していると仮定すれば、鏡は中央やや北寄りに、刀剣類はやや南寄りにあったことになろう。ただし、鉄片が集中していた辺りは、前回調査時にランプの火屋片が多数出た所でもあり、明治年間に動かされた石室蓋石のちょうど真下に当たることから、副葬品を運び出した痕跡を示すものかも知れない。



第14図　竪穴式石室実測図（赤は赤色顔料を示す）



第15図　竪穴式石室全体平面図（赤は粘土の範囲を示す）

(6) 控え積みと墓壙埋め土の諸段階

石室控え積みの調査は、F区、G区、D区、I区において行った。しかし、石室を構築する石をはずす調査はしていないので、控え積みの構造についての詳細は今後の調査に委ねることになる。従って、ここではまに控え積み最末端の石と埋め土との関係について所見を述べることにする。

墓壙の埋め土はかなり細かく分層し得るが、検討の結果、大きく4つの層群に分けて理解することにした。それは、以下のような埋め土の作業工程があったことを推測させるものである。

Ⅰ段階：墓壙の1段目を埋める工程。このレベルまでは控え積みの外側はほぼ垂直をなすのに対し、ここから上では急に傾斜が緩くなる。

Ⅱ段階：蓋石搬入直前までの工程。この上面が蓋石横架の作業面になる。

Ⅲ段階：蓋石を覆う土を入れ石室を埋める工程。

Ⅳ段階：墓壙全体を埋める工程。

である。以下、それぞれの調査区において各段階ごとに説明を加える。

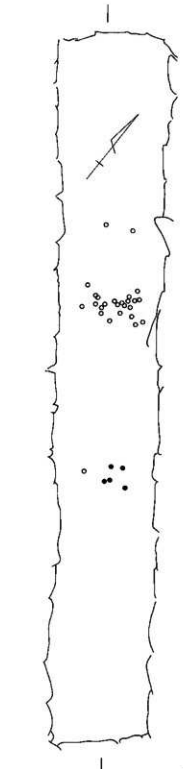
a） 石室中軸直交ライン

（第12図B－B' セクション）

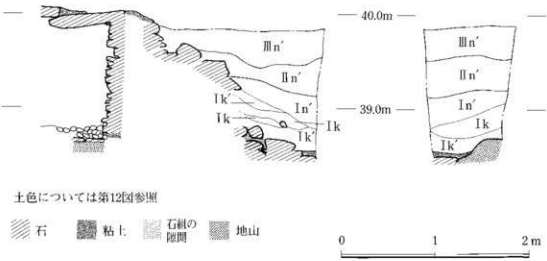
〈F　区〉

Ⅰ段階の埋め土は39.6mのレベルで平坦にならされており、これで墓壙の1段目が埋められる。この埋め土は東西それぞれ3～4層に分けられる。図で見るように、この埋め土の上面を境に、石室控え積みの外側の傾斜が緩やかになっている。

Ⅱ段階の埋め土は東西でレベルをやや違えており、東側は39.8m、西側では40.1m前後と西側が30cmほど高くなっている。この埋め土もさらにいくつかの層に分けられる。この埋め土に先立って、控え積み最末端の石を土で目張りするようにしていることが断面図から分かる。墓壙西部に「置き土」状の埋め土が見られることは前述した。蓋石を覆うⅢ段階の埋め土の上面は東側で40.2m、西側で40.4mの



第16図　石室内出土遺物分布状況



第17図　Ⅰ区東壁・南壁土層断面図

レベルである。Ⅳ段階の埋め土上面は全体的に撹乱を受けているが、西側では墓壙外まで埋め土が及んでいることが観察されている。石室の上部は陥没のため埋め土の状況は不明であるが、石室西側では「墓壙の埋め方」を捉えることが出来た。Ⅲ段階では石室中央から墓壙の端に向かって埋めており、まず石室を埋めようとする意図が感じられた。それに対してⅣ段階では、逆に墓壙の端から石室中央に向かって埋めている。東側においては西側ほど明瞭ではないが、Ⅳ段階には同様な手順が認められる。なお、先に触れたように、東西両翼にはそれぞれ別の遺構が存在するが、いずれもⅣ段階の埋め土の終了後に掘り込まれたものである。

b）　石室中軸ライン（第12図A−A′セクション）

〈G　　区〉

墓壙1段目を埋めるⅠ段階の埋め土は39.4mのレベルで平坦にそろえられている。Ⅱ段階は39.8mないし40.0mのレベルまでで、5層に分けられ、墓壙の2、3段目を埋めている。ここではまず墓壙の段を緩く消すように埋めた後、全体を平坦にならすように埋めている。Ⅲ段階は40.5m前後のレベルで平坦にそろえられており、石室を埋めると同時に、墓壙の4段目も埋められる。やはりⅡ段階と同様に、まず墓壙の段を緩く消してから、平坦にならしている。Ⅳ段階の埋め土は表土直下の40.8mのレベルまで残存しており、墓壙外まで及んでいる。

〈I　　区〉（第17図）

石室中軸の南への延長線上に設けたトレンチである。ここでは、控え積み外面の傾斜を目安にⅠ段階の埋め土を認識した。上面のレベルは39.3～39.1mと傾斜する。Ⅱ段階は39.6m前後のレベルまでで、その上はⅢ段階の埋め土となるが、Ⅳ段階については第1次調査でセクション面が失われているため、不明である。

c） D ラ イ ン（第12図D−D′セクション）

〈D　区〉

Ⅰ段階の埋め土はは39.5mのレベルまでで、3層に分けられる。Ⅱ段階は40.1m前後のレベルで平坦にそろえられており、多くの層に分けられる。やはり初めに墓壙の段を消すように埋めた後、平坦にならしている。Ⅲ段階はほぼ40.5mのレベルでそろえられているが、ここでは墓壙端から石室に向かって順次埋めており、F区とは異なった状況を呈していた。Ⅳ段階は表土直下の40.9mのレベルまで残存する。

〈B区およびⅠ区〉

ここではⅠ〜Ⅳのすべての段階が確認されたが、F区とD区で見られたような埋め方の順序は確認できなかった。Ⅰ段階は約39.2mのレベルで平坦をなし、4層に分層出来る。Ⅱ段階は39.5m前後のレベルまでで1層からなる。Ⅲ段階は石室側から墓壙端に向かって緩く傾斜した埋め土で4層からなる。Ⅳ段階は上面が攪乱をうけており、明確な面として捉えることは出来なかった。

以上述べたことから明らかなように、墓壙の埋め土の諸段階は石室の構築過程と対応している。石室控え積みの外面は、主軸ラインでは石室北側ではレベル39.6m付近、南側では39.5m付近で、主軸直交ラインでは39.6m前後の辺りで傾斜が明らかに異なっている。このレベルより下部では石はほぼ垂直に積まれているが、それより上部ではやや斜めに積んで緩い傾斜となっている。この変換点は墓壙1段目のレベルとほぼ対応しており、前述のⅠ段階の埋め土に相当する。さらに興味深いのは、前述した石室壁体に観察される横目地がほぼこのレベルに対応している事実である。従って、このⅠ段階の埋め土の上面で、一つの広い作業面が作られていたと考えることができる。

(7)　石室構築の復元的考察（第18図）

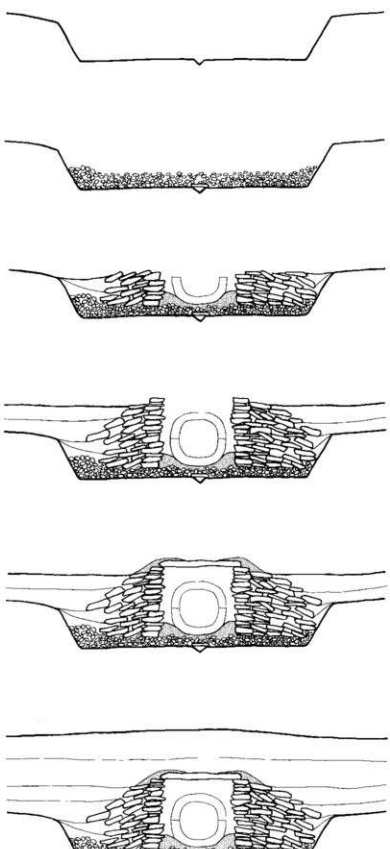
以上の調査により明らかになった事実から、石室の構築過程についてまとめてみたい。前述のように大成古墳の石室基底部は徹底的に攪乱を受けており、また、壁体をはずす調査をしていないので不明な点も多く、推定をまじえて記述を行う。なお第18図は、墓壙最下段のみを描いた模式図である。

① まず地山に墓壙を掘る。墓壙は場所によって3ないし4の段を有している。南側には開口部をつくり、墓壙最深部の中軸から開口部に向けて、排水のための溝を掘る。

② 排水溝に扁平な蓋石を載せた後、墓壙内全体に礫を敷く。礫は拳大の円礫で、15〜25cmの厚さで敷かれたようである。

③ 壁体を積む部分の必要箇所に緩衝材として粘土を置き、その上に壁体の石を積み始める。壁体は粘土を挟みながら積み上げられる。このとき、石室内面側にベンガラが塗布される。背後に控え積みをしながら土も入れ、ほぼ墓壙1段目の高さまで積んで、このレベルにそろえて整地する（Ⅰ段階の埋め土）。この段階で棺床粘土を敷き、棺の身が置かれ、そして遺体が納棺され蓋がされた可能性が強い。

④ 更に壁体の積み上げと背後の控え積みおよび埋め土を続けるが、控え積み上面は緩い傾斜になるようにし、蓋石の搬入直前で平坦面がつくられる（Ⅱ段階の埋め土）。これが蓋石搬入・



① 地山に墓壙・排水溝を掘る。

② 排水溝に蓋石を載せ、墓壙全体に礫を敷く。

③ 壁体を数段積み、墓壙1段目でそろえる（Ⅰ段階）。

④ 更に壁体を積み、蓋石のレベルで平坦面を作る（Ⅱ段階）。

⑤ 蓋石を横架し、粘土で目張り。

⑥ 墓壙を埋める（Ⅲ段階・Ⅳ段階）。

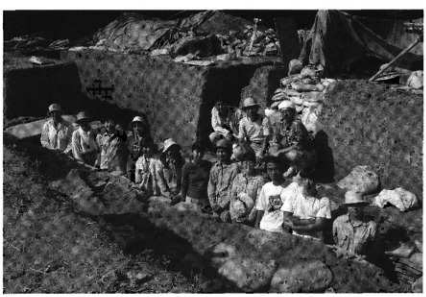
第18図　石室の構築過程模式図

横架の作業面になる。石室内面にはベンガラが塗布される。

⑤ 蓋石を横架した後、粘土による目張りを行う。粘土は灰白色の良質のものが用いられており、被覆するというよりは、石の隙間を埋めるといった性格のものである。

⑥ 石室蓋石を覆う埋め土を行い（Ⅲ段階の埋め七）、続いて墓壙全体を埋め戻す（Ⅳ段階の埋め土）。Ⅳ段階の埋め土は一部で墓壙の外にも及んでおり、墳丘全体を覆う盛土があった可能性もある。この後で、F西区に柱が立てられ、石室上方に土器片群が置かれ、石室の東西両脇に別の遺構がつくられたはずであるが、それらの前後関係は明確ではない。

（細田美樹・岩田亜希子・田浪文雄・渡辺貞幸）



5．その他の遺構の調査

(1)　C・F区土器溜り（第19図、図版14）

発掘区東寄りのC区とF区にまたがって、大量の土器片が集中して出土する箇所があった。この辺りでは、30～40cmの表土層を除去すると墳丘盛土の褐色土層が現れるが、その一部で、多量の土器片を含むやや暗い色調の土の広がりが認められた。その範囲は東西およそ2m、南北約1.6mである。

上器溜りは墳丘面にできた落ち込みの中に形成されているように観察されたので、グリッドの方向に合わせて分布範囲を4区画に分け、平面図と断面図を作りながら土器片を取り上げていった。しかし、落ち込みは予想外に深く、複雑な様相を呈していたので、途中で完掘を断念せざるを得なかった。

落ち込みの平面形は、検出面で東西約1.5m、南北1.3mぐらいの不整な円形で、周縁はすり鉢状に落ち込むが、内側はややなだらかになり、更に中央部は急に深くなるようであった。そこで、南西の区画を選んで深く試掘したところ、断面図で見るように、いったん中央に向かって規模が縮小した後、底が抜けたように下方でまた広がる形となっているらしく、検出面から60cm掘り下げても、まだ土器片の出土は続くという状況であった。そのため、この土器溜りの性格や発掘方法について再検討する必要が生じ、とりあえず今次の発掘をここで中止する判断をした。

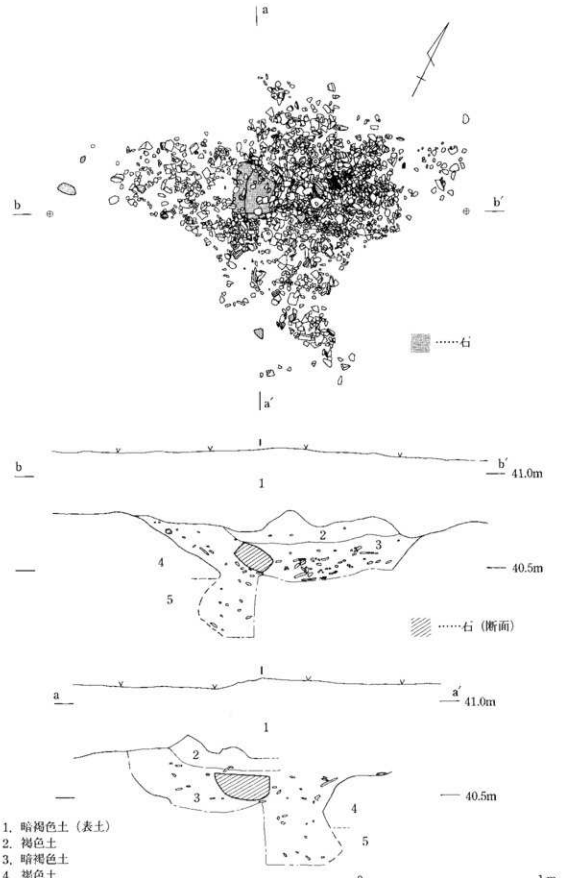
土器片は、落ち込み内の覆土である暗褐色土の中に包含されており、その上層の褐色土および表土からも出土している。ほとんどが数cm以下の細片であり、深いほど破片が大きいというようなことは認められず、発掘停止面の深さまでほぼ均一に包含されていた。なお、暗褐色土層の比較的上部で、約30cm×20cm、厚さ約14cmの角礫が土器片とともに出土したが、人為的な加工の痕跡は認められなかった。

完掘していないため、この土器溜りの性格についてははっきりしたことは言えないが、上器溜りのすぐ北のF区東トレンチで粘土槨らしい遺構が確認されている（次項参照）ので、それとの関係がまず考えられよう。例えば、粘土槨の陥没によって供献土器群が落ち込んだというような可能性である。しかし、今回発掘した範囲で言えば、土器が接合しない細片ばかりなのが気になるところである。また、墳丘築造後もしくは後世に何らかの目的で穴が掘られ、そこに多量の土器片が二次的に埋められたというような可能性も無いわけではない。いずれにせよ、結論は今後の発掘調査に委ねられることになる。

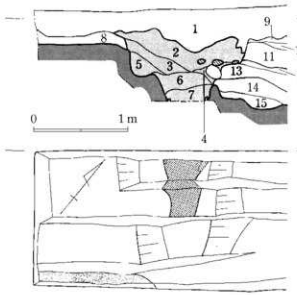
（藤原光代）

(2)　その他の遺構

墓壙の掘形を検出する作業に伴い、石室を中心に東西に複数の施設を確認した。しかし、今回の調査は石室の資料化であるため、その存在を確認するまでにとどまったが、周知の石室以外にも大



第19図　C・F区土器溜り実測図



（Fライン西土層注記）
1．褐色土
2．明褐色土　クサレ礫含む
3．橙褐色土　クサレ礫含む
4．明褐色土
5．明褐色土
6．明褐色土
7．橙褐色土　クサレ礫含む
8．褐色粘質土
9．明褐色土
10．明褐色土
11．明褐色土　クサレ礫含む
12．明褐色土　クサレ礫含む
13．明赤褐色土
14．明黄褐色土
15．明茶褐色土　クサレ礫含む

第20図　F西区実測図（部分）

型の埋葬施設が存在する可能性が強まった。以下、その概要を記す。

〈F東区の遺構〉（第12図B－B′セクション参照。図版15(1)(2)）

Fトレンチ内、石室の中心から東に7mを頂点とする、幅2.8m以上（推定4m）、高さ0.6mの南北に軸をもつ蒲鉾状の粘土の高まりを検出した。西端の幅1.2mには円礫が敷き詰められている。現地表面から深さは0.7mである。粘土は厚みをもっており、表面は赤い砂が覆っている。最近掘り込まれた円形の植樹穴と切り合っているが、この部分の断面観察によれば、粘土の下にかなりの空洞があった。これらは土層の観察から、石室の後に構築されたもので、粘土槨の可能性がきわめて高い。なお、地中レーダー探査の図ではこのあたりに石室に平行する反応がみられる。

〈F西区の遺構〉（第20図、図版15(3)）

Fトレンチ内、石室の中心から西に5.3m、深さ0.4mの位置で上段幅1.3m、下段幅0.7m、深さ0.6m以上の二段掘りの土坑を検出した。長さは0.5m以上で、さらに北に広がる様相を呈している。中央には板石二枚が0.3mの幅をもって立てられており、石室東でみられたような赤い砂で被覆されている。土層から石室の後に構築されたもので、埋葬施設の可能性がある。

また、この土坑の南に隣接して、西に向かう落ち込みを確認したが、これも何らかの施設に伴う可能性がある。

土層の観察から、これらの遺構は石室の墓壙を埋めた後に構築されたものである。なお、遺物は検出されていない。

（金山尚志）

6．出　土　遺　物

(1) 土　　器

今回の調査での土器の出土地点は、石室上方の墳丘上、C・F区土器溜り、F西区柱穴内の３地点に分けられるので、各地点ごとに出土土器の様相を述べてから、若下の考察をしてみたい。ただし、出土土器はいずれも風化が激しく、小片ばかりなので、確実なことは言えない状況である。また、今回の調査では後世に混入した陶磁器片も出土しているが、省略する。土器の色調は特記のあるもの以外は明黄褐色である。なお、4・15・17・21・76～79は第１・２次調査の時に出土した土器であるが、参考資料として採り上げた。これらは東京国立博物館が所蔵している。第１・２次調査については、研究成果報告書『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』（以下、研究成果報告書と略す）を参照されたい。

a） 石室上方出土土器（第21～24図、図版16）

〈壺形土器〉

【口縁部】（１～８）

口縁部はいずれも外傾しており、口縁端部は平坦面を持つタイプであるが、３は口縁端部を折り返しているような作りになっており、外面の色調は黒色である。口縁下端部は次の３種類に分類できる。

A類：突出部から頸部にかけての部分が平坦なもの（４～６）。

B類：明確な突出をせずに稜にしかなっていないもの（7）。

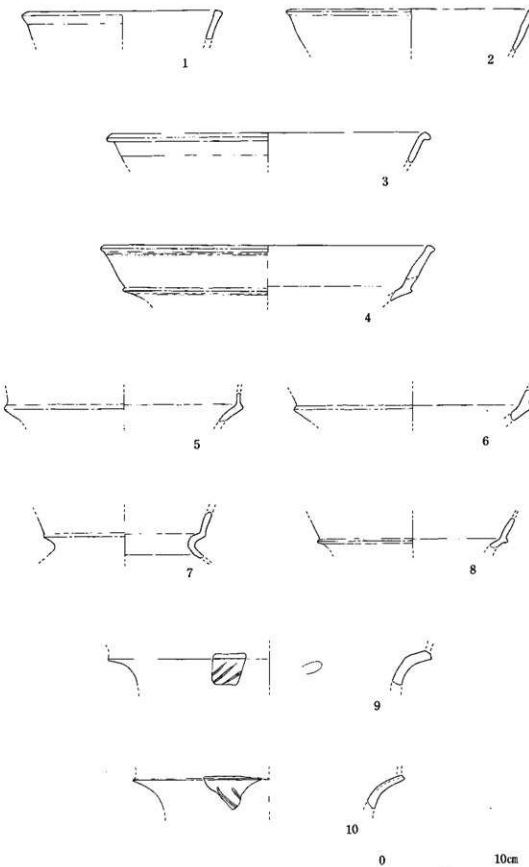
C類：横方向に明確に突出するもの（8）。

なお、4は第１・２次調査時の出土品であるが、口縁部の全形が分かる資料ということで参考として掲載しておく（研究成果報告書P.15第９図７）。

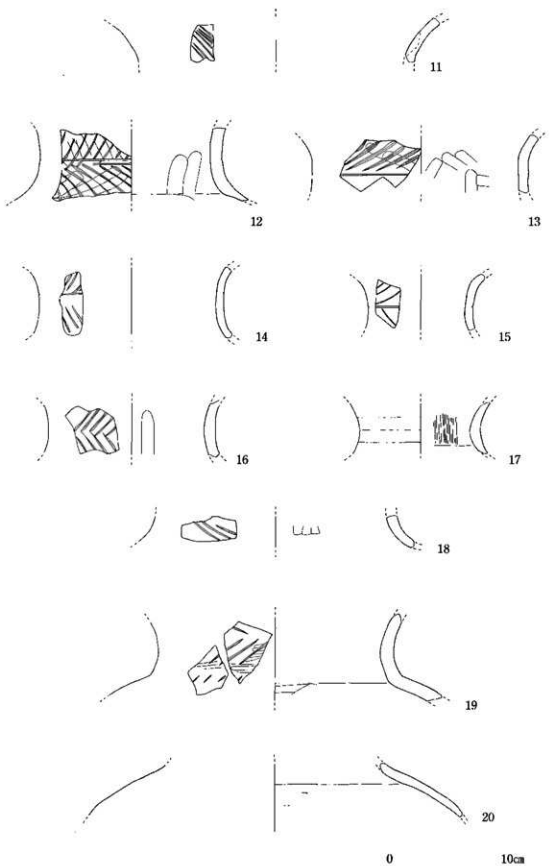
【頸　部】（９～19）

石室上方で出土した土器の中に壺形土器の頸部に綾杉文を施したものが多数発見された。類似例としては、夫婦遺跡・塩津山１号墳・松本１号墳等の出土品があげられるが、これらはすべて古墳時代前期の遺跡で、大成古墳と時期的に近いものである。綾杉文の施文方法としては、ヘラなどで描くもの・刺突によるもの、の２通りが挙げられ、さらに刺突をする工具は刷毛目原体・櫛状工具・貝殻腹縁などが考えられる。今回出土したもので確認できたものはほとんど刷毛目原体による刺突であった。なお、11・15は刷毛目原体による刺突ではない可能性もある。また、12～15のように中央に軸を描くものもあれば、描かないもの（16・19）もある。綾杉文の方向は多くが『く』の字状であったが、10・11・19は逆『く』の字状の可能性がある。

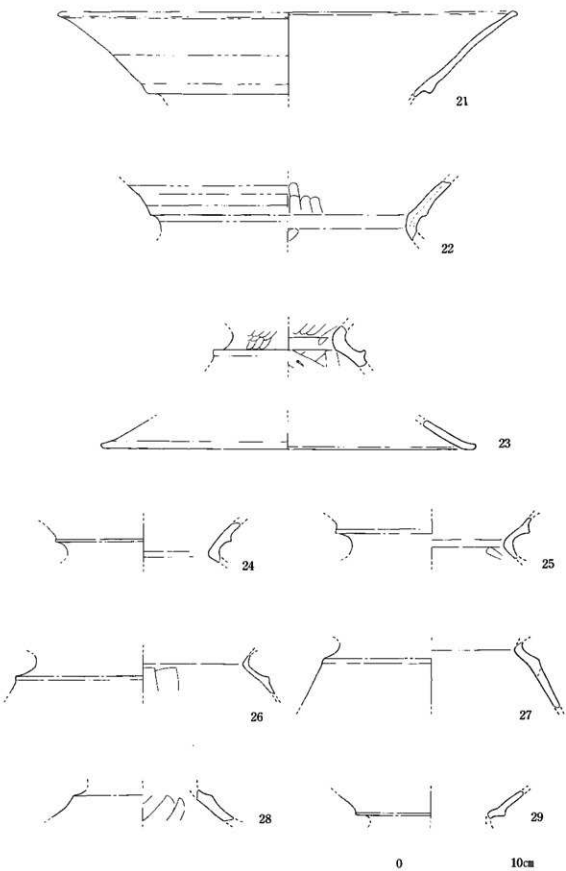
15・17は第１・２次調査時の出土品であるが、今回出土したものの中に似たような例がないので参考として掲載しておく。15は綾杉文が施された壺形土器の頸部である。これはヘラで描かれている可能性がある（研究成果報告書P.15第９図13）。17は第１・２次調査の報告では高坏の脚部とな



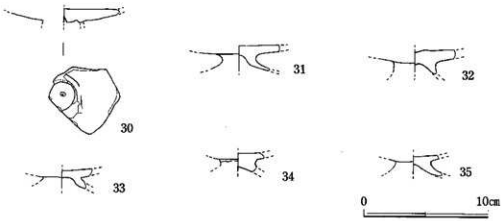
第21図　石室上方出土土器実測図(1)



第22図　石室上方出土土器実測図(2)



第23図　石室上方出土土器実測図(3)



第24図　石室上方出土土器実測図(4)

っていた（研究成果報告書P.19第11図42）ものだが、今回確認したところ高坏ではなく壺形土器の頸部であることが判明したので報告しておく。このように頸部が無文の土器も出土している。

【肩　部】(20)

20は肩部だと思われるが、小片なので詳細は不明である。

〈鼓形器台〉

【受け部】(21)

21も第1・2次調査時の出土品である（研究成果報告書P.17第10図23）。これは受け部下端の突帯が下方に延びるタイプである。これも類例がないので掲載した。

【筒　部】(22～26)

内面の形状により3種類に分類することができる。

A類：筒部内面の稜が2本で、その間の平坦面の幅が広いもの（22・23）。22は突帯が少し摩滅してはいるが、明確な突出ではなく稜のようになっている。また23は鋭い突帯を持つタイプである。

B類：筒部内面の稜が2本で、その間の平坦面の幅が狭いもの（24・25）。

C類：筒部内面の稜が1本で、筒状を呈していないもの（26）。

これらのうち（25）は非常に薄手の作りで、この類は他の2類に比べると数が少ないようである。

【その他】(27～29)

小片なので上記の分類に当てはまらなかった個体について紹介する。27・28は突帯が突出せずに稜にしかなっていないものである。29は小形で、色調が他とは異なり橙色である。

〈高　坏〉(30)

1点のみ出土した。接合部形態は中央に刺突痕を持つものである。

〈低 脚 坏〉

坏底部と坏部の器壁厚により分類することが出来る。

A類：坏底部の厚さが坏部と変わらないもの（31～33）。

B類：坏底部の厚さが坏部に比べて厚いもの（34・35）。

b）　C・F区土器溜り出土土器（第25～28図、図版17）

〈壺形土器〉（36～39）

口縁部はやや外傾しており、口縁端部は平坦面を持っている（36）。口縁下端部の形態は石室上方出土土器の分類によるA類（37）、C類（38）が確認でき、B類は確認できなかった。ただし、口縁下端部の確認できる個体が少なかったためであろう。39はやや厚めの作りの頸部である。なお、石室上方で多く出土している頸部に綾杉文を施した土器は出土していない。

〈鼓形器台〉

【受け部】（40～45）

受け部上端部の形状により3種類に分類できる。

A類：端部に近くなるほど厚くなるもの（40・41）。41は小形で色調は橙色である。

B類：いったん厚くなり、端部は薄くなるもの（42・43）。

C類：厚さがそれほど変わらないもの（44・45）。

【筒　部】（46～52）

A類：筒部内面の稜が2本で、その間の平坦面の幅が広いもの（46～48）。48の脚部上部の突帯部は貼り付けで作っている。

B類：筒部内面の稜が2本で、その間の平坦面の幅が狭いもの（49～52）。51は内面の稜が摩滅して明確な平坦面を持たないが、幅が狭いタイプであると思われ、また突帯は横方向に明確に突出させている。

C類：筒部内面の稜が1本で、筒状を呈していないもの（53）。石室上方と同じく数が少ないようである。

【脚　部】（54～60）

脚部の外面はほとんどが磨きによる調整をしており、内面はケズリの調整が加えられている。様々なタイプのものが見られる。57は脚端部の内面を指ナデで調整している。58はあまり外反せず、脚端部が脚部上部に比べて厚くなっている。

【その他】（61・62）

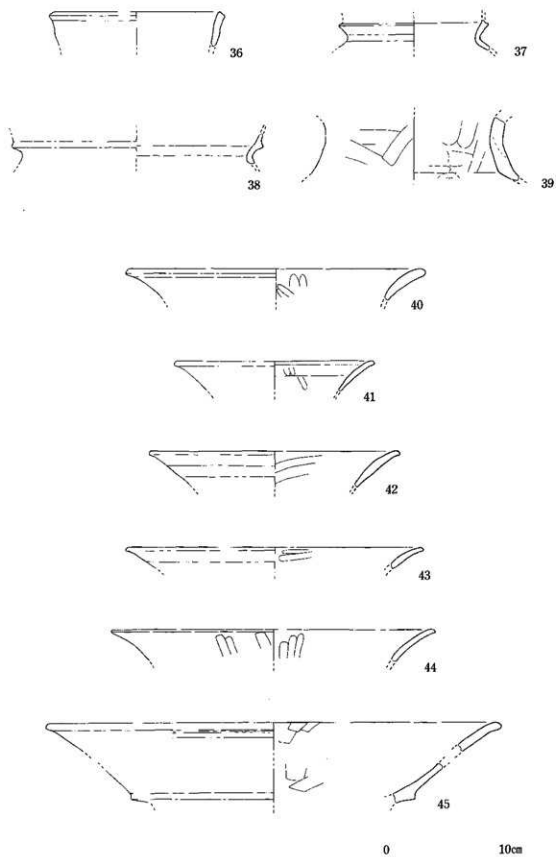
61の筒部はB類の可能性があるが、小片のため不明である。また、突帯部を横方向に明確に突出させている。62は突帯部しか出土していないのだが、脚部上部が内湾している。

〈高　　坏〉（63～68）

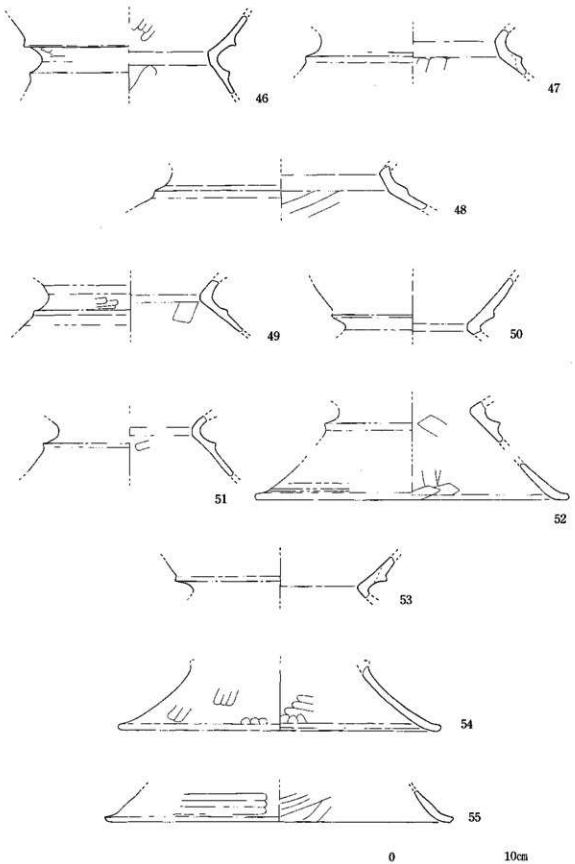
口縁端部は少し外反している。接合部には中央に工具による刺突痕を持つ円盤を充填している。また、脚部は全形を知りうるものがないが、2点出土している。

〈低 脚 坏〉（69～73）

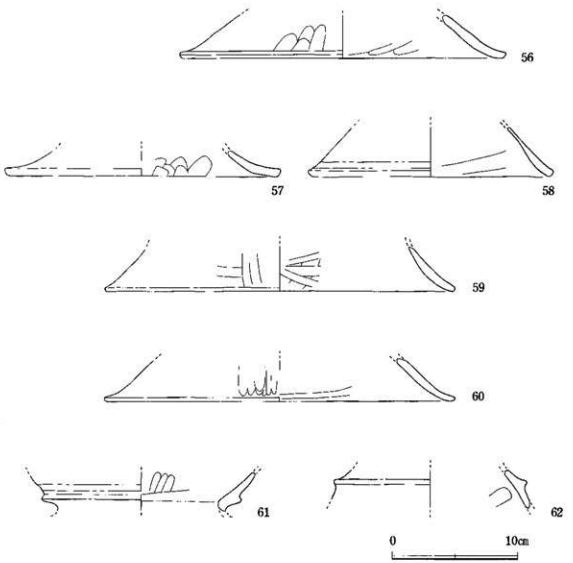
石室上方出土土器の分類に当てはめると、A類（坏底部の厚さが坏部と変わらないもの）の数が多く（69～72）、B類（坏底部の厚さが坏部に比べて厚いもの）は確認できなかった。そのかわり、新たにC類（坏底部の厚さが坏部に比べて薄いもの）が見られた（73）。



第25図　C・F区土器溜り出土土器実測図(1)



第26図　C・F区土器溜り出土土器実測図(2)



第27図　C・F区土器溜り出土土器実測図(3)

c）　F西区柱穴出土土器（第29図、図版18(1)左）

柱穴内より出土した土器のうち、器形が確認できたものは壺形土器と鼓形器台の2点であった。

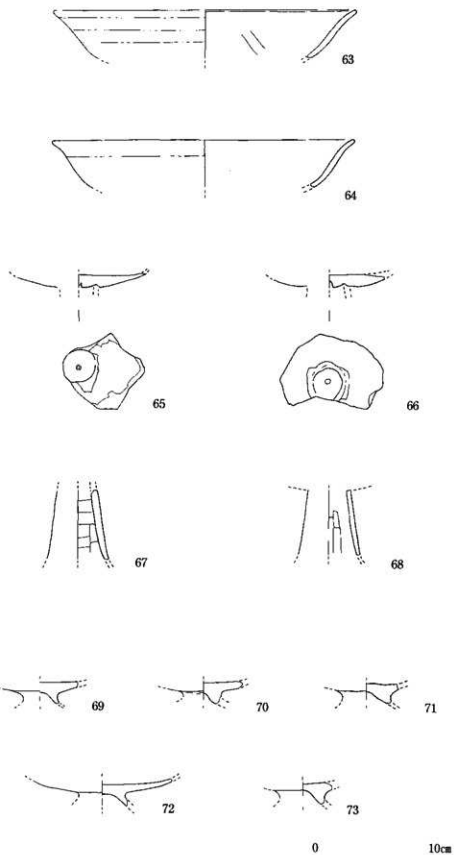
〈壺形土器〉(74)

口縁端部に平坦面を持ち、体部は球形で丸底である。

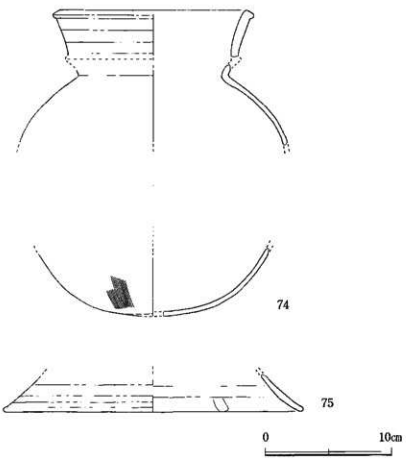
〈鼓形器台〉(75)

脚部の下半分しか確認できなかったが、非常に薄手であまり外反しないものである。

柱穴内出土土器では以上の2点しか器形を確認できる個体がなく、おそらくこの2点がセットとして使われていたのであろう。



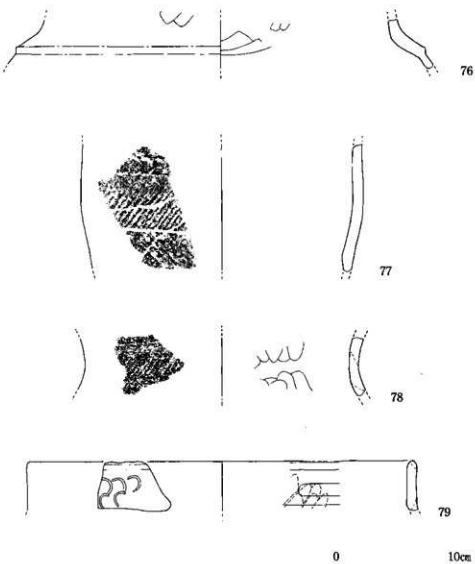
第28図　C・F区土器溜り出土土器実測図(4)



第29図　F西区柱穴出土土器実測図

d）　その他の地点出土の土器（第30図、図版18(1)右）

これらは第１・２次調査時の出土品で、墳丘北斜面より出土したものである。研究成果報告書ですでに紹介されているが、今回改めて検討したので報告する。76は特殊円筒形土器の口縁部と報告されていたもの（研究成果報告書P.21第12図57上部）であるが、塩津山１号墳出土の円筒器台形土器の脚部の形態に近く、脚部とした方がよいと思われる。77は、綾杉文と竹管文を巡らす特殊円筒形土器の肩部であるとされていたもの（同書P.21第12図57下部）だが、表面の風化摩滅が激しく、施文方法についてはよく分からなかった。一見、縄文土器のようにも見えるが、土師器である可能性が強い。しかし、器形や部位についてはこの破片では判別できなかった。78も施文方法は77と同様であろうと思われるが、この土器も摩滅が著しく詳細は不明である（同書P.19第11図56）。同書では壺形土器の頸部のように図化しているが、部位や器形は不明である。79はC字状の原体を用いたスタンプ文が２列廻っている（同書P.19第11図54）。これは塩津山１号墳出土の円筒器台形土器の口縁部と酷似している。これらのうち、76・79は特殊円筒形土器もしくは円筒器台形土器と考えた方がよいと思われるが、すべてをそのように扱ってよいかは不明とせざるを得ない。

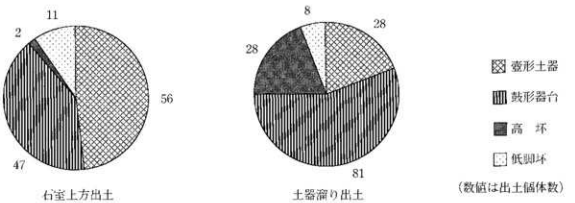


第30図　その他の地点出土土器実測図

e）ま と め

出土土器はいずれも細片だったため詳細は分からないが、いくつか気付いたことを述べてみたい。まず、石室上方出土土器と土器溜り出土土器の組成を比較してみると（第31図参照）、石室上方出土土器は壺形土器が多く、このうち綾杉文を持つ個体が半数を占めていた。高坏は出土数が少なかった。なお、出土土器数は第１・２次調査時の出土品も含んでいる。高坏の数が研究成果報告書のものより少なくなっているが、今回実見したところ、高坏と明確に認められる個体は１点しか無かったためである。土器溜りでは鼓形器台が多く出土している。なお、両地点とも低脚坏の数が少ないことが、特徴として挙げられる。

土器の時期については、山陰土師器編年の小谷式の範疇に入るものであることは間違いないが、その中のどのくらいの位置に置かれるのかについては、今回の出土土器のみでは不明である。また、石室上方の土器と土器溜り出土の土器の時期差であるが、壺の口縁部や鼓形器台の形態の特徴が変



第31図　地点別の土器組成図

わらないことや、高坏の接合部形態が同じことなどから、時期差はほとんど無いと考える方が自然であろう。なお、低脚坏の様相が少し違うようだが出土数が少ないためであると思われる。低脚坏は多くがA類であり、他の２類は数が少ないようである。また、石室上方では多く出土した綾杉文を持つ個体が、土器溜りからは全く出土しなかったことは何か意味があるのかも知れない。ただし、土器溜りがまだ完掘されていないため、実際に綾杉文を持つ個体がないのかどうか現時点では判別できない。また、柱穴内出土の土器も、それほど時期が変わらないものだと思われる。

（竹内　希）

参考文献

古谷　毅・金山尚志「出土遺物」（本村豪章編『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』1992、所収）。
勝瀬利栄『塩津山古墳群』1997、島根県教育委員会。

(2)　金　属　器

大成古墳から明治44年に発見された遺物は、現在東京国立博物館に収蔵されている。今回の調査では、既に知られている銅鏡の破片と鉄片が出土しているが、すべて撹乱土中から検出された。鏡片はブロンズ病が進行していたため、脱塩処理後、akアクリル樹脂を含浸した。

〈銅　鏡　片〉（第32図・図版19(1)）

明治44年に発見された二角縁唐草文帯二神二獣鏡と同一個体である。石室の中央より北寄り部分に集中して細かい破片で検出された。

この鏡は既に３面の同型鏡の存在が判明しており、第Ⅰ段階：善段寺１号墳出土鏡→第Ⅱ段階：阿為神社所蔵鏡・石切劔箭神社所蔵鏡→第Ⅲ段階：大成古墳出土鏡という順番で鋳造されたと考えられている。第Ⅰ段階から第Ⅱ段階の変化は、第一に銘帯が格子文帯になり４つの小乳が加わる。第二に、唐草文帯の13個の銭文のうち４つが小乳に変化する。第三に、乳座が扳文座から格子文に変化する。第四に、鈕座が有節重弧文から格子文に変化する。第五に、その内側の鋸歯文が粗い楕円文に変化している。第Ⅱ段階から第Ⅲ段階の変化は、銭文内の小点が大きくなる(1)。これらの変化をふまえながら実測した。

遺存状況は大きく15片の破片となっている。布の付着した痕跡は認められないが、若干の赤色顔料が認められた。錆はまばらにあるものの状況は良く、文様が鮮明に観察できる。色調は漆黒色（2.5BG2.5/2.5）を呈する。

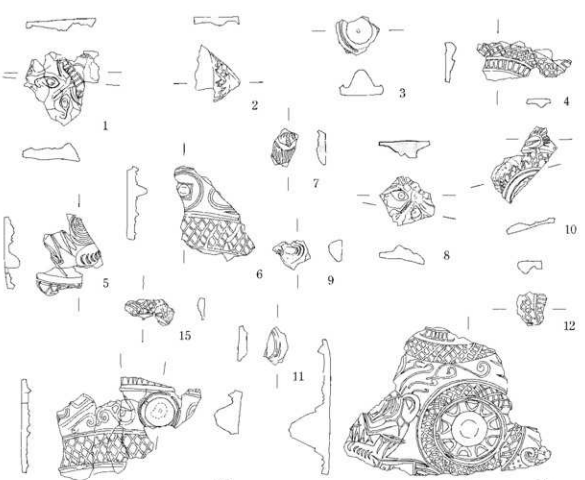
1．大きさが2㎝、厚さが1～3㎜の小片である。獣形の頭部～頸の部分である。同じ獣形の頭部片である8よりも目の間隔が広い。眉間が広く、左目の上は細かい凹凸がある。また、上唇は2つの弧を描いている。

2．大きさが1㎝、厚さが1～2㎜の小片である。格子文の突帯と厚さから乳座とみられるが、弯曲が小さいこと、格子文を挟んで内外面が無文であることなどが問題である。

3．大きさが1㎝、厚さが2～7㎜の小片である。小乳である。唐草文の間に配置された4個の小乳の内のひとつである。東博所蔵鏡では、東王父側の2個の小乳が欠損しており、これらのいずれかである。

4．長さ2.6㎝、幅1㎝、厚さが1～2.5㎜の小片である。紐座の一部である。外側に格子文・内側に櫛歯文を配置する。斜格子文の外側に獣体の衙えた鍼の先端が見られる。

5．大きさが2㎝、厚さが1～3㎜の小片である。神像の左側肘と膝、格子文が見られる。

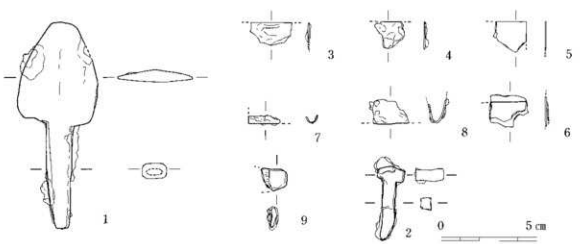


第32図　石室内出土銅鏡片実測図（原寸）

6．大きさが２㎝、厚さが２～５㎜の小片である。唐草文帯の銭文と格子文帯の部分である。
7．大きさが１㎝、厚さが１～２㎜の小片である。東王父横の旋節紋の一部である。
8．大きさが1.3㎝、厚さが１～５㎜の小片である。獣形の頭部片である。同じ獣形の頭部片である１よりも目の間隔が狭い。
9．大きさが１㎝、厚さが１～４㎜の小片である。U字形の枝がつき、神像の膝に相当する。
10．大きさが２㎝、厚さが１～２㎜の小片である。格子文の乳座の外側に獣形の持つ旋節紋が見られる。
11．大きさが１㎝、厚さが１～２㎜の小片である。獣形の顎と推定され、弧を描いて隆起している。
12．大きさが１㎝、厚さが１～３㎜の小片である。鈕座の一部である。外側に格子文・内側に櫛歯文を配置する。
13．大きさが４㎝、厚さが１～６㎜の小片である。唐草文と小乳、格子文帯が見られる。
14．大きさが５㎝、厚さが１～10㎜あり、今回の調査で最も大きい鏡片である。鈕座・乳・西王母の右にいる脇侍の胴部・獣形の尾がみられる。
15．大きさが１㎝、厚さが１㎜の小片である。格子文の乳座の一部と考えられる。

〈不明鉄製品〉（１～９）

１．鏃の形状に類似した鉄製品である。残存長11㎝、最大幅4.2㎝、茎幅1.3㎝を測る。石室上方の表土中から出土したもので、この古墳に伴うものか不明である。
２．長さ４㎝、T字形をした鉄製品である。断面は一辺５㎜の正方形である。錆化が著しい。石室内崩落土中から出土している。
３～８．１～２㎝の大きさで、厚さが１㎜にも満たない非常に薄い小片である。３・４・６は一辺が生きている。５は直交する２辺が生きているが７と異なり縁が厚くならない。７は他の個体と異なり縁部分が若干厚くなっており、小口部分に当たると考えられる。本来、同一個体であったと考えられる。７・８は曲がっており、板状の鉄板をU字形に曲げた製品であろう。石室床面の攪乱土中から鏡片と同じような位置で出土している。



第33図　鉄片実測図

9．中が空洞になり、被せるような構造である。中には木質がみとめられる。茎尻の一部と推定される。

〈木　片〉

鏡片などと一緒に石室床面の撹乱土中から木片が60片ほど出土しているが、長さ２～４㎝、幅0.5～1.5㎝程度の小片で本来の形態をうかがうことはできない。

謝　辞

本報告の作成にあたって、銅鏡の図像の名称については新井悟氏、鉄片の部位については三宅博士氏のご教示を得た。鏡片の実測図（第32図）は赤井和代氏、東京国立博物館所蔵鏡との合成図（第34図）は桃崎祐輔氏に作成していただいた。また、銅鏡合成写真（図版１・図版20）は牛島茂氏に依頼し、杉本和樹氏に鏡片撮影、加納幸正氏に画像合成を行っていただいた。記して、深く感謝いたします。

註

(1) 中原　斉「特集　会見町普段寺１号墳出土の三角縁神獣鏡」鳥取埋文ニュースNo.19、1988、鳥取県埋蔵文化財センター。

（金山尚志）

7．東京国立博物館所蔵の遺物

明治44年6月28日に、石室内から発見された遺物は、大正元年12月20日付で東京帝室博物館（現東京国立博物館、以下東博）が島根県より購入している（本村1980）。遺跡と遺物の概要については、大正年間に梅原末治氏によって報告されている（梅原1918）。

梅原報告には、「盌3個、高坏2個、環頭刀身1口、刀身2口、劍身3口、環頭1個、銅鏡1面、杏葉4個、斧2個、鎗身1個、鏃塊1、轡残缺」とある。しかし、東博受入時の書類には、「鏡1個、盌3個、高坏2個、環頭刀身1本、刀身2本、劍身2本、劍身残缺 -括、石 -括」とあり、馬具・鎗・鏃・斧などが含まれている点に相違がみられ、安来市仏山古墳出土遺物との混乱が確認されている（山本1951）。

現在、東博には、「三角縁神獣鏡1（J6604）、土師器盌3（J6605～6607）、土師器高坏（J6608・6609）、環頭刀身1（J6610）、刀身2（J6611・6612）、劍身2（J6613・6614）、劍身残欠（J6615）、石一括（J6616）」が所蔵されている（東博1970）。以下、東博収蔵品について、銅鏡・土師器・武器・その他に分けて、概要を報告したい。

(1)　三角縁神獣鏡（第34図、図版1・20）

本鏡は早く樋口隆康氏によって、同型鏡の典型例として注目されてきた学史上、著名な鏡である（樋口1953、森1976、田中1981、中原1988など）。東京国立博物館所蔵分（J6604）（以下、東博分）については、その後、大正2年に石膏による修復が行われている。しかし、このときの修復には、内区の神獣像などの配置に誤りがあり、梅原報告にもそのまま拓影が掲載されている（梅原1918）。

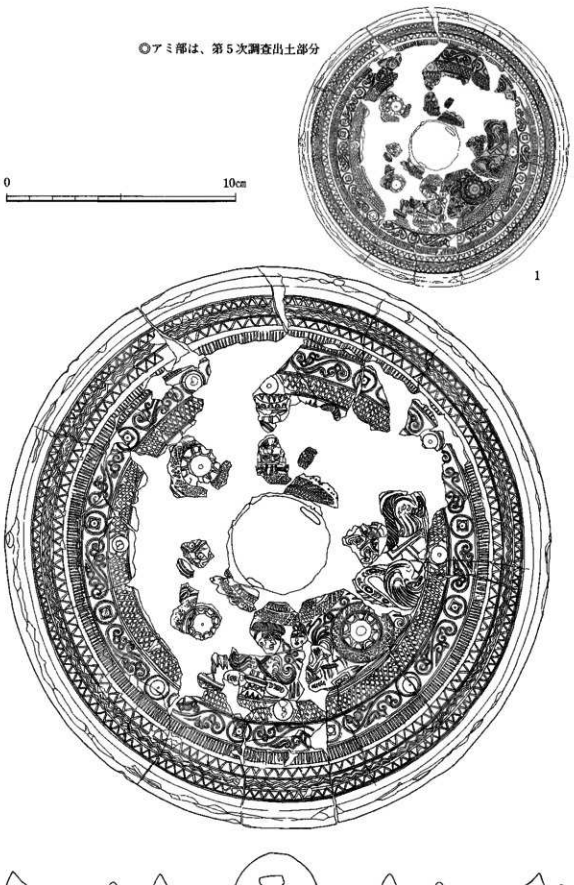
今回、第5次調査では、およそ15片の銅鏡の破片が出土し、全て三角縁神獣鏡で同一個体の破片と予測された。そこで、破片の保存処理後、東博分と第5次調査出土分（以下、5次調査分）との接合関係の確認を行い、図上復元を試みた。ただし、東博分は先に記したように、早く石膏による修復が行われており、鏡破片の断面が全て観察不可能な状況にあった。そこで接合関係の確認は、基本的にはX線透過写真による破片輪郭の確認と、鏡背文様の形状およびモールドによる文様の連続関係を辿ることによって行った。また、全体の配置は、内区外帯にある銭文内の小点以外は文様が全く一致するとされる大阪府高槻市阿為神社所蔵鏡（梅原1918、樋口1953）(1)の写真を参考にして、破片の位置を確定させた。このような作業の結果、第34図2のような復元案を作成した。

本鏡は、いわゆる唐草文帯二神二獣型式（樋口1979）の三角縁神獣鏡である。直径は現状で、23.8～24.0cmである。外区の大部分と、内区外帯および内区の約50%程が残存する。東博所蔵分と5次調査分で位置が同定できたものについては、その区別を第34図1に示した。

外区は、三角縁の外縁が付くが、通常の三角縁神獣鏡のものよりは断面形がかなり小型である。外面は急な立ち上がりをもつが、内面は緩く内弯する。内面には中程に屈曲変換線があり、これを境に微妙に角度を変化させている。また、外面は丁寧に研磨されているのに対し、内面はほとんど研磨されずにほぼ鋳肌の状態である。ここには不規則な水平方向の条線が多数みられ、製作時に遺された鋳型の擦痕が鋳出されているものとみられる。

◎アミ部は、第５次調査出土部分

0　10cm



1

2

第34図　三角縁神獣鏡

外縁の内側には、複線波文帯を挟む二重の外向鋸歯文帯が巡る。これらは同一平面上にあり、鋸歯文数は外帯が160、内帯が120である。外区から内区外帯へ向かう斜面には、いわゆる櫛歯文帯があり、石切劍箭神社鏡では櫛歯文数は432である。これらはいずれも4で割り切れる数であることが注意される。あるいは文様の割付に関係するものかとも考えられるが、欠失部の多い石膏による修復である現状では図文相互の相関距離を確定することは困難である。この問題は完形品で検証すべきものであり、今後の研究課題としたい。

内区外帯には、外側に唐草文帯、内側に格子文帯が巡る。これらは3本の圏線で区画され、やはり同一平面上にあるが、櫛歯文帯の斜面下端と後述する内区よりは高位にある。唐草文数は13。これらの間に13の小乳が配置され、うち4つは円圏内にやや大型の乳が入る。ほか9つはいわゆる五銖銭文の方孔内に小乳が入る。前者の円圏内の乳は必ずしも中心にはなく、うち1つは円圏に接している。後者の五銖銭文の輪郭は、前者の円圏と同一の突線表現で、規模も同一である。方孔の表現は突線で行われるが、これも必ずしも中心にはなく、辺の方向も紐に対して放射状にならずまちまちである。この小乳は普段寺1号墳鏡や阿為神社所蔵鏡に比べ、やや大型であることが指摘（樋口1953）されているが、五銖銭文の形状・規模・位置・方向は写真で観察する限りは同一である。小乳はこの方孔に接しているため、乳の位置は五銖銭文の方孔の位置に規制されているともいえる。唐草文は同一の形態をもつものはなく、全て異なっている。完結した精美な蕾表現をもつものは4つ(2)、うち両端に蕾表現をもつものは2つで、隣接している。また、これらは他の唐草文と比較して、全長が短いことが注目され、これらの差異も文様の割付に関係した可能性があろう。

内区には、本来二神二獣と大型の乳4個などが配されるが、今回出土した破片を補っても、なお欠失部が大きい。西王母と槍を持つ小神仙はほぼ残存するが、東王父は頭部と台座部を除き、欠失する。西王母は両肩に羽毛をもち、東王父は有髭で三山冠を被る。いづれも上着の袂が台座よりも著しく下位に表現されることが特徴である。この点は三角縁神獣鏡における神像の型式変化を考える上で重要な点であろう。白虎は前肢の一部を欠くもののほぼ残存する。口に銜える巨の一部が残る。青竜は5次調査分の頭部のみが残る。格子文座をもつ大型の乳は今回発見されたものも含め、3個が残存する。

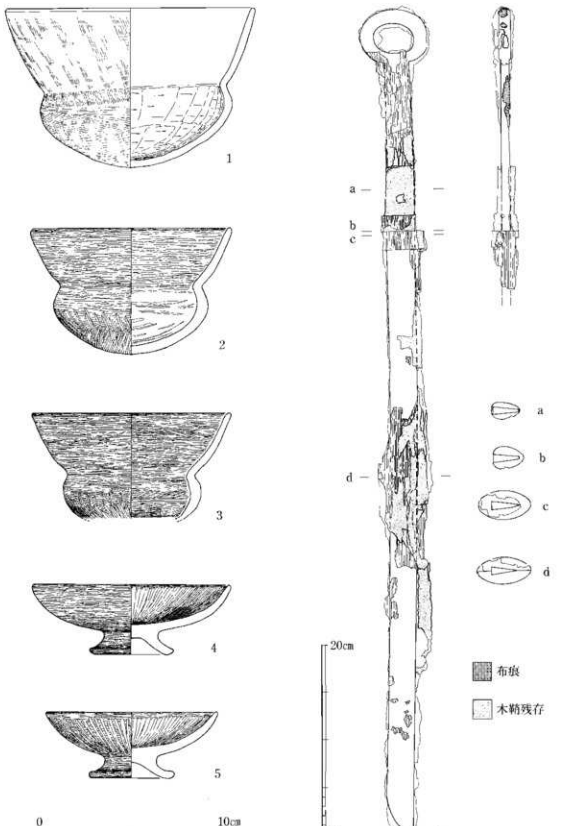
このほか、笠松形文様のいわゆる捻り文座と傘の一部がある。鈕は完存するが、鈕座はほぼ3分の2を欠失する。鈕孔は略方形で、方向は西王母左側から東王父左側に抜ける。なお、東王父と白虎の間にある大型乳については、他と接合する部分が無く、方向を決定できないため、今回、復元図からは割愛した。

(2) 土　師　器（第35図1～5、図版21）

これらは、明治44年に石室内から出土したもので、東博受入時の書類によれば、石室中央から北側に寄った地点でまとまって出土したようである(3)。

a） 小型丸底坩3（1～3）

いずれもいわゆる小型丸底坩であるが、やや大型の個体（1）と通有の個体（2・3）に分けられる。胎土は、1が暗褐色で、2・3は赤褐色である。



第35図　土師器・環頭大刀

1は大型の小型丸底坩で、胴部の一部を欠くが、ほぼ完形である。口径13.3cm、全高8.5cm。器形は、口縁部が僅かに内弯するが比較的直に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げる。胴部は、肩が張り気味に強く屈曲して、やや尖り気味の底部に至る。口縁部との境は、内外面ともやや丸みを帯びており、屈曲はあまい。外面にも沈線などはみられない。器壁は薄手で、全体に3～4㎜と一定している。外面は、口縁部から胴部上半にかけて、やや右傾する細かな縦方向のハケ調整の後、横ナデを施す。胴部中位には横方向のハケ調整のままであるが、底部はナデ調整で仕上げている。内面は、胴部内面が横方向のヘラケズリ、口縁部はナデで仕上げる。口縁部内面には一部に朱が付着している。

2は通有の小形丸底坩で、口縁部を僅かに欠失するがほぼ完形である。口径10.7cm、高6.6cm。器形は、口縁部が緩やかに内弯して立ち上がり、口唇部は丸く仕上げられる。胴部はやや肩が張り、扁平な球形を呈する。口縁部との境は、内外面とも強く屈曲し、明瞭である。器壁は口縁部が3～4㎜と薄手であるのに対し、胴部は4～6㎜で厚手である。内外面とも密な横方向のヘラミガキであるが、底部外面は右傾する細かな縦方向のヘラミガキの後、ナデ調整を施す。

3も通有の小形丸底坩で、約50%を欠失する。復元口径10.6cm、残存高5.6cm。器形は口縁部がやや内弯気味に立ち上がる。口唇部は僅かに外反気味に開き、丸く仕上げられる。胴部は、底部を欠くがやや扁平な球形を呈すると思われる。口縁部との境は、内面はやや丸みを帯びているが、外面は強く屈曲する。器壁は口縁部が3～4㎜と薄手であるが、胴部は肩部で最大6㎜とやや厚い。底部は再び薄くなるようである。内外面とも、細い密な横方向のヘラミガキを施して仕上げている。

b）低　脚　坏（4・5）

いずれも山陰地方特有のいわゆる低脚坏であるが、やや大型の5と小型の4に分けられる。胎土は、いずれも明灰褐色で近似する。

4はやや大型の低脚坏で、完形である。口径10.6cm、高3.7cm。坏部は大きく外反しながら、口縁部付近で丸く立ち上がる。端部は丸く仕上げられ、外面は密な横方向のヘラミガキ、内面はやはり密な縦方向のヘラミガキを施す。脚部は僅かに筒状になった後、屈曲して外反し、ほぼ直に開く。端部はやや尖り気味に整形され、内面は横ナデで仕上げられ、外面には密な横方向のヘラミガキを施す。器壁は脚部が0.6～0.4cm、坏部は0.5～0.3cmとあまり変化がない。坏部内面には、僅かに朱が付着する。

5は小型の低脚坏である。口縁部に欠失部があるもののほぼ完形である。口径9.1cm、高3.5cm。坏部は緩く内弯して立ち上がり、口縁部は僅かに直に開く。端部は丸く仕上げられ、外面は横方向のヘラミガキの後、疎らな縦方向のヘラミガキ、内面はやや密な縦方向のヘラミガキが施される。脚部は強く外反しながら開き、端部はやはり丸く仕上げられる。内面は横ナデにより調整される。器壁は脚部が0.5～0.4cm、坏部は0.5～0.3cmで、口縁部に向かい次第に厚みを減じる。坏部内面に僅かに朱が付着する。

(3) 武　器　類

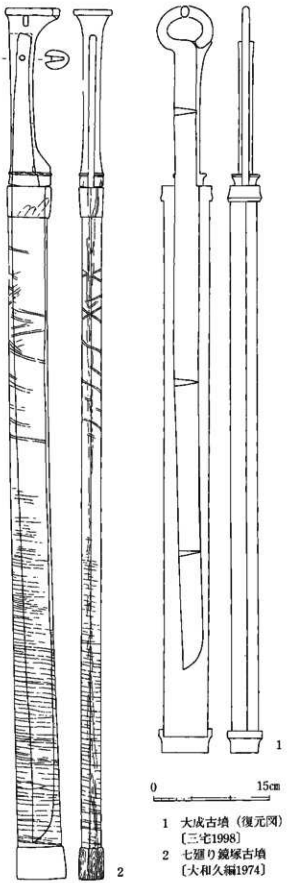
(第35図6、図版22)

これらも、明治44年に石室内から出土したものである。東博受入時の書類によると、石室の長軸方向に並んだ状態で、中央からまとまって出土したようである(4)。

a) 素環頭大刀1 (6)

残存長88.0cm、柄部長23.8cm、刀身部長62.3cm。素環頭部長径7.3cm、柄口長1.7cm、鞘口長1.9cmである。全体に木質がよく残り、拵えが比較的明瞭で、大刀の柄・鞘構造が観察できる稀有な例として著名である（町田1976、置田1989)。刀身はほぼ完存し、ふくら切先をなし、茎部も含めて緩く内湾する。平棟平造で、茎尻に鍛接された素環頭が付く（J6610)。

鞘は、刀身中位に木質がよく残り、断面形は略楕円形である。残存部で幅は6.0cm、厚さは復元で約3.0cm、鞘口部で厚さ2.4cmである。鞘尻は欠失するが、鞘口部は下端を除きほぼ完存し、鞘口には突帯が付く。鞘口部は柄側が細く、一回り太い鞘尻側にめぐる幅約0.5cmの面に向かって緩く内湾しながら開く形状である。厚さは復元で鞘口部約2.6cm、最大約3.4cmである。鞘は基本的に表裏2枚の板材からなる。しかし、鞘口部は佩表では鞘本体の木材とは明確に分離しているが、佩裏では鞘本体と一体になっており、鞘口部は一木で完結している。このため鞘の構造は、断面楕円形に整形した一木から、鞘口部と鞘尻部を遺して分割して造られた板状の佩表材と、コの字形になった佩裏材の2枚を合わせたものである。佩裏材は、佩表材と同様に刀身を納めるための刳形を施すと同時に、鞘口部に刀身を通すための鞘口を刳り込んだものと考えられる。復元的に考えると、鞘尻部にも同様なデザインの突帯を削り出していたと思われる



1　大成古墳（復元図）〔三宅1998〕
2　七廻り鏡塚古墳〔大和久編1974〕

第36図　大　刀　外　装

(第36図1)(三宅1998)。

柄は、茎部と素環頭部からなる。素環頭部は茎尻に鍛接されるが、銹化に伴う亀裂などから、茎尻腹側からはじまり茎尻背部に接続しているようである。柄木は全体を茎尻端まで覆う。柄木背部は落とし込み構造によって開放され、上端は茎の内弯に従って緩く弯曲する。柄木腹部は、柄尻部を欠失するものの素環頭部に残存する木質から、素環頭部下端に向かって強く弯曲していることがわかる。断面形は背部が直線上にカットされた倒卵形で、厚さ2.2cmである。腹部は中央付近、木質が1～2㎜程度の厚みしかなく極めて薄い造りである。柄木外面には、柄口寄りの5.4cm程の範囲に繊維状の有機質の痕跡があり、さらにその上に布痕がある。布痕は柄尻部の背面や環頭部にも見られる。一方、柄木と一体に造り出された柄口部には、鞘口部同様なデザインの突帯が造り出されている。やはり、一回り太い柄尻側には幅約0.3cmの面が巡り、柄口が細い形状であるが、背部は落とし込み構造により開放している。柄口の厚さは約2.4cm、復元で最大約2.8cmである。

b) 刀　　剣

ほかに、大刀2、剣3がある。大刀1(J6611)は、切先を遺す刀身部と、柄部の大半を欠く鞘口・柄口部からなる。前者は残存長65.5cm、後者は同20.5cmである。刀身には、木鞘がよく残るが円盤状の鞘口を備える。佩表と佩裏の2材を合わせた構造が観察され、素環頭大刀とは構造を異にする。柄口にも、柄木の及ばない有機質の腐朽部が観察され、鹿角などの鞘口を備えていたと考えられる。柄木は落とし込み構造で、外面には有機質の巻きが施されていたようである。大刀2(J6612)は、鞘尻と柄部の大半を欠き、残存長は94.2cmである。木鞘はやはり鞘口部に円盤状の鞘口を備え、表裏2材からなる構造である。柄木は僅かに落とし込み構造であることが観察される。

剣1(J6613)は、鞘尻・柄尻を欠くが、切先を遺し全体に良好に残存する。残存長は36.2cm。木質の残存も比較的良好で、柄口部には有機質の腐朽部が観察される。剣2(J6614)も鞘・柄口が剣1と同様の構造のようである。剣身の先端と柄尻を欠き、残存長は23.2cmである。剣3(J6615)は5個の剣身片で、鞘口部1を含む。うち、1個が平成3年の調査時に出土した鉄剣片と接合した(図版22(2))(本村他1991)。

これらの刀剣類も、木質部の残存が良好で、柄・鞘構造の資料として貴重である。詳細な検討は機会を改めて行いたい。

(4) そ　の　他

a) 石　一　括

以上の遺物のほかに、河原石2、瑪瑙片1、板石片1、白色石材片1(J6616)がある。河原石は直径4～5cmの小石で、外面に朱が厚く付着する。瑪瑙片は長さ5.5cmの砕片である。板石片も長さ9.5cmの小片で、石竃石材の破片であろうか。白色石材は2片に割れているが、長さ9.4cm、厚さ4.5cmで、平面形が円形の孔の一部のような面をもつ。石灰質のやや重量のある石材で、用途などは不明である。

(5) ま と め

従来から注目されてきたように、本墳の石室内出土遺物は山陰地方の前期古墳を考える上で重要な位置を占めている。ここではその概要のみで、それぞれ遺物について詳細な検討を加えることが出来なかったため、明確な位置づけをするには至らないが、今後の課題について、2、3の問題を検討することでまとめに代えたい。

二角縁二神二獣鏡については、早くからいわゆる同笵・同型鏡論の好例として取り上られてきたが、5次調査分の破片を加えて善段寺1号墳鏡、阿為神社鏡、石切剱箭神社鏡との比較検討が容易になった。これには本鏡の正確な復元を基に、これらの鏡との比較を通して、本鏡群の変化点の詳細を辿る必要がある。とくに、鋳肌部分やモチーフの形状変化の観察（難波1991）、各モチーフ表面の顕微鏡下などの観察（樋口1985）などを詳細に行うことによって、鋳型の異同点や同一性を検証し、二角縁神獣鏡製作の実態の一端に迫ることも可能であろう。

刀剣類については、まず素環頭大刀の外装をはじめとした復元的研究が必要である。木鞘遺存例から考えると、6世紀代（第36図2）と5世紀以前では鞘尻に向かっての形状が異なる可能性もある（大和久編1974、埋蔵文化財天理教調査団1995、橿原考古学研究所1996）。また、鞘構造については素環頭大刀と大刀1・2の構造は明確に異なっており、その意味は柄構造をはじめ、刀身自体の比較も加味して検討する必要がある。また、大刀1・2と剣1～3にみられる柄口構造の類似点も素環頭大刀とは異なっており、これらの問題は刀剣の外装を総合的に検討することによって明らかにしなくてはならない問題である。

土器群については、これまで本墳の時間的位置づけを考える上で重視されてきた（池田・東森1980、房宗1984、出雲考古学研究会1985、松本1990、渡辺他1991）。それは、弥生土器にはない「地域的様式差を超越し得る」（小林1936）斉一性と祭祀性をもち、近畿地方においては古墳出現期の布留式土器のメルクマールともされる小型丸底坩を含んでいたからである。しかし、山陰地方においては、とくに近畿地方の庄内式～布留式併行期には他地方と異なり外来系土器の出土が少なく、小型丸底坩は稀な存在であった。そのため、その位置づけは明確には行われていないのが現状である(5)。石室内出土の土器群は、同時に出土した低脚坏の評価と、2・3次調査および5次調査で出土した土器の位置づけとともに総合的に判断するべきである。ここでは小型丸底坩1～3について、若干の検討を加えておきたい。

近畿地方の小型丸底坩は、いわゆる「小型精製土器三種」（原口編1962）の中心的器種であり、これらは布留式土器の基本的な器種を構成している（安達・木下1974、関川1976）。一方、これらの土器と高坏やある種の中型壺とは製作技術が極めて共通し、均質的な特徴を備えているという（次山1993）。それによれば、小型丸底坩に関わる特徴としては、①著しく精良な胎土、②底部外面調整のヘラ削り、③横方向の幅1㎜程度の浅い沈線状ヘラミガキが挙げられている。また、これらの土器は布留式期古段階に出揃い、吉備地方の庄内式併行期後半段階の土器製作技術の影響を受けているという。また、布留式古段階後半から中段階に至ると、胴部径が口縁部径と近似するものも出現し、外面調整についてもヘラミガキが省略されるなど、技術的な後退が顕著となる（安達・木下1974）。

これらの点と本墳出土の小型丸底坩1～3の特徴を比較してみると、2・3は①の胎土の精良さ

と③の横方向のヘラミガキが類似するが、②がみられない。また、１には①～③の特徴がみられない。器形については、２・３が布留式古段階後半の資料に近似しているが、やや大型の１の外面調整はヘラミガキを欠いており、中段階的様相をもっている。

一方、山陰地方の土器編年では、松本１号墳出土の小型丸底坩を布留式併行期中段階に位置づけており、本墳出土小型丸底坩はその前段階に位置づけられている。共通する点は後者の器形を前者より古相とすることである。また、本墳石室内出土土器群は、山陰地方の編年では神原神社古墳よりは後出すると考えられている（前島・松本1976、房宗1984、赤沢1985、花谷1987、松本1990、松山1991、岩橋1994など）。

このようにみてくると、小型丸底坩１～３の編年的位置は後続すると考えられている松本１号墳出土土器群の位置づけによって、まず下限を明確にして議論する必要があろう。また、上限については、近畿地方における布留式古段階の小型丸底坩の特徴①～③と比較して、後出する要素が強いものと判断される。しかし、どの程度の編年的位置であるかは、やや大型の１の系譜と位置づけが問題である。かなり大型の器形とともに、内面に施されたヘラ削りなど、通常の小型丸底坩にはみられない顕著な特徴を備えており、十分な検討が必要であろう。このような点から、本墳出土の小型丸底坩１～３については、現状では布留式古段階後半から中段階に併行する時期と位置づけておきたい。

本報告を成すにあたり、土器については木下正史先生、梅原末治資料については渡辺貞幸先生の御教示を得たほか、実測・その他で犬木　努・金山尚志・朱　岩石・清喜裕二・鍾田剛志・桃崎祐輔氏の助力を得た。記して、感謝いたします。

（東京国立博物館　古谷　毅）

註

(1) このほか、近年、大阪府東大阪市石切劔箭神社所蔵鏡が紹介され、阿為神社所蔵鏡ともっとも近いことが確認されている。これらは銘文の有無・文様の変化から、普段寺１号墳鏡→阿為神社古墳鏡・石切劔箭神社鏡→大成鏡の製作順が想定されている（樋口1979、中原1988）。

(2) 阿為神社墳鏡・石切劔箭神社鏡では、本鏡の欠失部分に１つ確認され、合計５つあったと思われる。

(3) 梅原報告では、地元での聞き取りにより、石室北壁に接して刀剣類、その南方中央に鏡、さらに南方に土器類が存在したとしている（梅原1918）。

(4) (3)と同じ。

(5) 松本１号墳出土の小型丸底坩（島根県教育委員会1963）との比較で、主に布留式併行期中葉以前の段階（松本1990・渡辺他1991）とされているほか、布留式最古相併行期の可能性も指摘（房宗1984・1988）されており、定説をみていない。

参照文献

赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第６号、1985。

安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第２号、1974。

池田満雄・東森市良『出雲の国』学生社、1973。

岩橋孝典「出雲における庄内併行期の様相」『庄内式土器研究Ⅶ』1994。

出雲考古学研究会『荒島墳墓群（古代の出雲を考える４）1985。
梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」『考古学雑誌』第９巻第１号、1918。
大和久震平編『七廻り鏡塚古墳』大半町教育委員会、1974。
置田雅昭「中国　鉄素環頭大刀の把の構造」『古文化談叢』20(中) 1989。
橿原考古学研究所編『藤ノ木古墳』斑鳩町教育委員会、1996。
小林行雄「小型丸底土器小考」『考古学』６－１、1936。
島根県教育委員会『松本古墳調査報告書』1963。
関川尚功「纒向遺跡の古式土師器」『纒向』橿原考古学研究所、1976。
田中　琢『古鏡』(日本の美術178) 至文堂、1981。
次山　淳「布留式土器における精製土器の製作技術」『考古学研究』第40巻第２号、1993。
東京国立博物館『収蔵品目録』1970。
中原　斉「会見町普段寺１号墳出土の三角縁神獣鏡」『鳥取埋文ニュース』No.19、鳥取県埋蔵文化財センター、1988。
難波洋三「同笵鏡群２例」『辰馬考古資料館　考古学研究紀要』２、1991。
花谷めぐむ「山陰古式土師器の型式学的研究―島根県内の資料を中心に―」『島根県考古学会誌』第４集、1987。
原口正三編『船橋Ⅰ・Ⅱ』平安学園考古学クラブ報告、1956・7。
樋口隆康「同型鏡の二、三について」『古文化』１の２、1953。
樋口隆康『古鏡』新潮社、1979。
樋口隆康「三角縁神獣鏡の性格について」『三世紀の東アジアと日本』（古代を考える39）1985。
所宗寿雄「「山陰地域」における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』第１集、1984。
所宗寿雄「出雲地方における古墳形成期の土器編年について―最近の研究状況をめぐって―」『島根考古学会誌』第５集、1988。
埋蔵文化財天理教調査団「布留遺跡（里中）三島地区発掘調査報告書」1995。
町田　章「環頭の系譜」『研究論集』Ⅲ、奈良国立文化財研究所、1976。
松本岩雄「山陰」『古墳時代の研究（地域の古墳Ⅰ　西日本）』10、1990。
松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相―大東式の再検討―」『島根県考古学会誌』第８集、1991。
三宅博士「古代大刀復元作業から派生する諸問題」『刀剣美術』第495号、1998。
本村豪章「古墳時代基礎研究稿(1)」『東京国立博物館紀要』第16号、東京国立博物館、1980。
本村豪章編『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』平成３年度科学研究費補助金（総合研究A）研究成果報告書、東京国立博物館、1991。
森　浩一「どうして鏡の銘文が消されるのか」『古代学研究』第81号、古代学研究会、1976。
山本　清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」『島根大学論集（人文科学）』１、1951。
渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄「出雲」『前方後円墳集成』中国・四国編、1991。

8．石室現状と構築方法の検討

竪穴式石室の発掘調査に伴って、石室の現状と石室の破損状況を、また現状の構造となった要素と破損の原因から考えられる構造的な特徴を考察する。結果として、一般の石室構造と異なる点について疑問を提示するとともに、構築過程については明確ではないが、当時の人達が考えた構築方法についてレポートを作成した。

調査方法としては、発掘調査によって竪穴式石室内部が掘削され側壁石組みが検出された状況での目視による壁面の変形、石材の変位・破壊、裏込や盛土の方法、詰石（詰上）の材料と材質、盛土材等の材料、石室を覆う盛土方法や形状、石室床の構築方法（地山との関係）などを調査し、それらの調査結果を基に、往時の人達がこの石室を構築するためにイメージしたことについて可能な限り考察しようとしたものである。ただし調査方法については、目視と調査遺構図によるところがほとんどであり、詳細な分析データや物理的解析を基に正確な数値による分類や比較をしているものではない。たとえば粘土や粘性土について石室裏や墳丘に使用された土は日視でも粘性分など大きな差があることは窺えるが、数値（パーセント）化しての分析評価をしていないため、“良好な”“粘性が高い”などの表現となっている。

以下、⑴石室の現状として石室の構成と構築方法について、⑵石室の破損とその考察として各種破損の状態とその破損原因について、⑶石室構造の検討として破損原因や構築方法から考察した石室構造の特徴と疑問点について検討し、その築造工程や構造に対する往時の人達のイメージを考察したい。

(1) 石室の現状

竪穴式石室の規模は全長約7.5m、幅1.0m（北端では1.2m）、深さ約1.2m（排水施設上部から石室蓋石下まで）であり、形状としては梱端に細長い形態に造られている。円礫敷きの床の上に壁体となる平石（石の大きさは大きいもので60cm程度、厚さ15cm内外、小さいもので幅30cm、厚さ5～6cm程度の自然割石とスレート状の割石を使用している。比較的石の大きさは揃って使われている）によって11段～13段で積み上げられている。

石の積み方は南北東西面に大きな変化はなく、石材の利用は壁面中央部以上について比較的大きなものを使用しているようである。使用材質の位置関係は明確ではないが、南壁面のようにスレート状の石（カンラン石玄武岩）を下部に、自然割石（流紋岩）を上部に利用している例もある。

石室壁面は緩い持ち送りによって石室蓋石に至る曲面を持っているが、長辺方向の積石壁面の変形が多く、当初の持ち送り形状は明確ではない。南北短辺の壁面に比べ長辺（東西面）方向の方が持ち送り程度は大きいように見られる。壁面上部に大きい石材（控えの長さ）を使っていることや、石室平面形において石室下部の四隅が直角に近い取り付きなのに比べ上部の四隅が隅丸のように積石を渡していることが原因になっているものと思われる。

石室石積の特徴は、積石となる平石（自然石とスレート状の板材）相互が直接接していないように窺えることである。積石上下の関係においても、両脇の積石相互についても、直接石どうしが接

しているわけではなく、ある程度均等に敷き詰められた粘土によって石組されているような状態である。たとえば、レンガ積の施工と同じように、レンガブロックを敷き並べモルタルを上部に均等に敷き、また両脇にモルタルをつけ積み上げるような形態である。この場合、レンガ積のモルタルはレンガブロックと同等以上の強度を持つものであり、この石室のように積石石材強度と大きく異なる粘土（粘性土）を目地として利用することに何の目的をイメージしたのか不思議に思えた。

天井石に当たる蓋石については、自分が石室を調査した時点では南北両端の数石のみが残っている状態であり、割れや崩落しているような状況や両側壁との関係について判断することは出来なかった。石室上部の積石崩落箇所などは蓋石の落下に伴うようなことも考えられた。ただ蓋石については、厚さ15cm程度の均一なもので大きさ１mを越すものもあり、表面が滑らかな自然石のように加工痕が見られない良好な石材の採取は、自然界で見付けることが可能なのだろうかとの疑問も生じた。

石室を構成するためには、石室の内側の積石だけでなく、積石裏側の裏込（裏盛土や石）が重要である。裏込の横断的な調査は実施されていないので、その詳細は不明確であるが、一見裏込盛土に投げ入れたような石材の存在が認められる。大きさは約50cm内外の石室積石の白然石と同様なものである。一般の墳丘盛土と異なり、裏込盛土に比較的大きな石材を混入し締固することにより、石室構造全体を一体化しようと考えたものと思われる。

また、石室構築に用いられた粘土及び粘性土は、蓋石近辺に使われた粘土（灰白色の良質粘土）と積石や裏込盛土に使われた粘性土、床に使われた粘土などとはその粘性の比率が異なるものである。墳丘の盛土などに使われる粘性土とも異なり、その使用目的が粘性の比率（粒度分布）によって明確に分けられていたことを窺わせ、各部位での使用土（採取土又は採取場所）が確立していたことを窺わせるものである。

(2)　石室破損とその考察

石室の破損については、一般に石室を構成する部材としての積石や粘土、蓋石などの割れや欠損を示す破損と、壁面や構造自体に変位・変形を示す破損とがある。また、石材の割れや欠損が壁面の面変形（倒れ込み）などで局部的に集中応力によって現れる場合も多数あり、また逆の関係も考えられ、その要因は多種多様である。

大成古墳竪穴式石室の場合、石室蓋石の割れや欠落を除けば積石の状態は良く、積石自体の単純な割れや欠損は局部的に集中している。ほとんどの積石材の割れは、それ自体の強度不足（厚さや形状）によるものではなく、倒れ込みなどの面変形に伴う応力集中による割れのように窺える。

大成古墳竪穴式石室の破損の特色は面的な変形による破損である。壁面の前側への倒れ込みや石積中段の孕み出し変形、極端なところでは積石部分が変形により部分的に抜け落ちているような箇所も見受けられる。

全体的に石室壁面の短辺方向（南北壁面）より長辺方向（東西壁面）の変形・破損が大きい。特に天井石の残る石室半面の両端側に壁面の倒れ込みや変形が大きいのが特徴である。

一方現在、破損や変形の兆候を現象として捉える基準は、石室積石相互の変位や移動によって破損状況を言い表しているのであるが、この石室築造については、先にも示したように積石間に敷き

詰めた粘土の存在があり、当然、石の移動よりも、より変位・変形を起こしているものと思われ、逆に均一に敷き詰めた粘土の圧密変形により面的な変形を誘発していることも窺える。しかし築造当時の正確な形状や粘土の強度を現状から推測することはほとんど不可能であることからも、ここでは石組みや積石の状況から破損状況を考察する。

a）北　壁　面

北側壁面の石積は現状では最も良好な状態で遺存している。積石の一部に割れやクラックが入っているものの、構造的な問題にはなっていない。面的な変形についても蓋石に当たる積石上段2石分が幾分前面に押し出されているが顕著ではない。

b）南　壁　面

南壁面積石の割れは積石下部に一部見られるものの部分的である。面の変形については、上部積石（東壁面側）に一部前面に迫り出すような変位が認められる。東壁面の孕み出しに連動して局部的な変形を起こしたものと思われる。積石全体としては良好である。

なお、石材の割れやクラックについて、北壁面、南壁面共“構造的に問題なし”としているのは、石材の割れ自体が築造的変位・変形による応力集中ではなく、築造時の積石の選び方、両脇石の厚みの違いや上下の石の関係によるもので、割れ自体が面的変形を引き起こすものではなく、割れることによって組石自体が「なじむ」ようなことを示している。

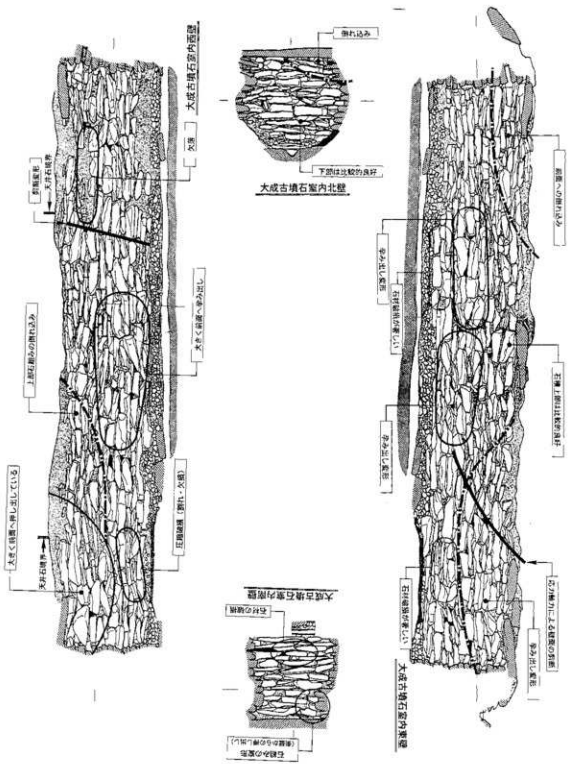
c）東　壁　面

東壁面の変形はその中央部に孕み出しはあるものの、極端に面的な変形を示しているのは南北両端の壁面である。南側壁面は蓋石を中心として大きく円を描くような範囲で前面に倒れ込みを見せ、その変位境界の下部の積石は上部からの倒れ込みによる集中応力で押し出されるような現象を示している。北側壁面も同様、積石上部ほど前面に倒れ込むような変形を見せ、その境界の下部は南側壁面と異なり、顕著な石材の割れやクラックの現象を示している。中央部の石組みは比較的良好に石目地が揃っているのに比べ、南側、北側においては積石手順の原状が把握できないほど乱れている。

d）西　壁　面

東壁面と同様の破損形態を示している。中央部に孕み出し変形を起こしているものの、石組み自体は良好である。北側壁面も上部の積石ほど前面に倒れ込むような変形を示し、その応力変形の境界となるところの周りは大きな集中応力により石材の破断や割れを起こしていることも東壁面の変形と同様である。しかし、南側壁面についてはその変形の様相が異なり、南壁面から約2mのところで壁面自体が縦に破断しているように剪断変形をしている。その下部はその縦目地にそって石材の破断が何石か見られ、大きな剪断力が生じたことが窺える。また、同箇所上部の積石には大きく前面に押し出されたような石材と、積石自体が欠落している範囲が見受けられる。

積石面の倒れ込みや孕み出し変形の要因は、上部（蓋石）からの荷重に対して、積石自体の問題（目地の置き方や上下の石材との重ね合わせ）や石の大きさ（厚さ）などが大きく関わってくるも



第37図　石室破損状況

のであり、積石が良好で均等に荷重が分布していれば極端な変位変形は起こらないものである。長年の荷重に対して均等な孕み出しなどを起こす場合があっても、この竪穴式石室のように変形の境界が明確に確認できる極端な変位は積み方自体に問題があったのか、蓋石の架構が両壁面に均等になされていなかったか、また積石の間に挟む粘土の厚さに大小があり、圧密の変化が生じたことなど、その原因が考えられる。

単純な破損例を挙げてみると、西壁面南側の壁面の剪断変形は当初から積石自体に問題があったことが窺え、たまたま縦に目地が揃うように積石が施工されてしまったことが原因である。一方壁面自体が前面に倒れ込むような変形は蓋石から伝達される上部の荷重の変位（片側への傾斜や接地面積の不均等）により蓋石に引きづられるように起こされたものか、逆に変形境界下部の石材割れやそれに伴う石組（粘土）の沈下により誘発されたことも一つの要素として考えられる。結果として幾つかの要因が重なって現状の破損を起こしているものと思われた。ただこの調査で不思議に思えたことは、変形しやすい中央部の壁面より短辺壁面に支えられた両端の壁面に大きな変形が起きるのは何故かという問題であった。これは後になって気づいたことであるが、蓋石の遺存の有無がこの破損変形に大きくかかわっているのではないかという思いが強い。

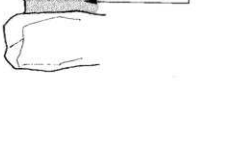
(3)　石室構造の検討

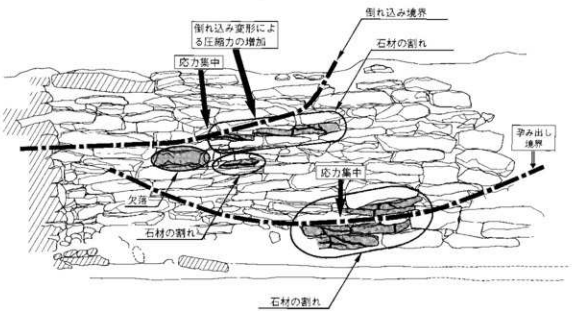
大成古墳竪穴式石室の現状や破損形態から、この竪穴式石室の構造を理解するため、疑問や不思議に思えることを重視し、その解決するところを提案し、往時の人達のこの石室構築に伴う考え方とその特徴を推察したい。特に積石壁面に使用した粘土の役割について、裏込盛土や使用粘土の問題、石室変形の原因とその考察に絞って検討してみたい。

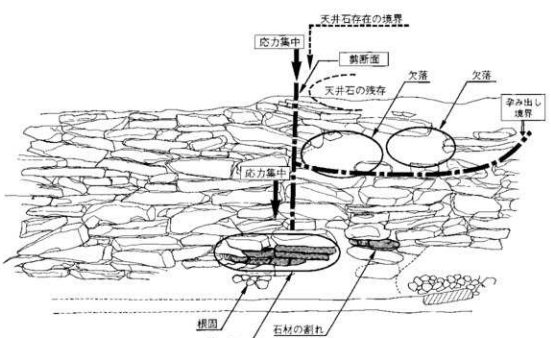
a）　積石壁面に使用した粘土の役割について

一般に石室壁面を構成する積石構造については、積石となる平石を石どうし接するように積み上げて、石の強度により上部からの荷重（蓋石や蓋石上部盛土の荷重）を負担するのが普通である。積石相互（上下両脇）が接することにより、その摩擦係数を期待して石組み自体を成り立たせる構造である。大成古墳竪穴式石室のように、明らかに積石ごとに粘土が敷き詰められたように一様に見受けられることは特記されるところである。このようなことは、積石（平石）を一様に水平に敷き並べ、その上部に粘土を敷き、その上に積石を敷き並べるというような施工方法で積み上げたことを窺わせるものである。

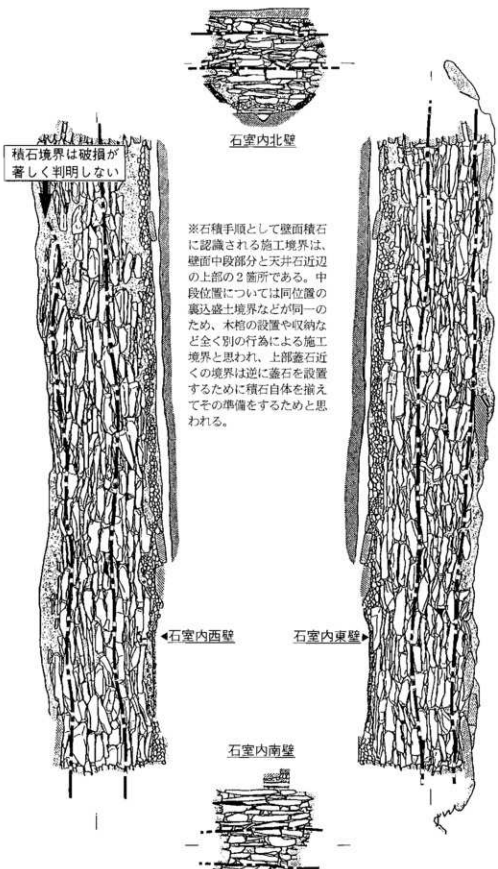
では、粘土を積石間に使用する利点は何だろうか？直接積石どうしが接するような積み方の場合、特に加工しない自然石を利用する場合、石相互が接する面が一様でなく、石面の突起や凹凸に左右され応力が片寄る場合があるが（石材の割れや石組みの変形を来す）、粘土の場合均等に敷き詰めれば石面凹凸に応じた詰め物としての応力を分散する機能が期待できる。しかし問題は粘土自体が弱いことである。変形しやすく、圧







第38図　面変形（倒れ込み）による石材の割れ



第39図　石室構築過程の検討

密を起こしやすい。これを石室構造として安定させるためには均等の荷重がかかっていることが必要（変位を同じくする）であり、余分な集中荷重をおこさないことと、周りからの水の進入（水分を含むことにより流動化する）を防ぐことが第一条件である。また、石の当たりや石の相互の接地を気にしない分だけはるかに施工は短期間で可能なはずである。

b） 使用される粘土の種別について

大成古墳竪穴式石室や墳丘築造に使用される土については、粘土や粘性土として墳丘はもちろん、石室裏盛土，石室蓋石付近に見られる良質粘性土まで、その種類が異なるものである。石室回りでも壁体積石ごとに利用している土と、床，円礫と混じる粘土，蓋石近辺の粘土と、一瞥しただけでも３種類の粘土が利用されているのが分かる。墳丘については、より多種類である。

往時の人達が使用する材料を使い分けることは、その目的が異なることを意味しているはずである。異なる場所にそれぞれ均一な材料を利用していることからもそれは明らかである。一般に粘土は粘土とシルト、それに砂の混合比である。“良質の粘土”と言えば粘土分が高く、シルト，砂質分が少ないことを意味し、粘性土ということは粘土質が少なく、シルトや砂の比率が高いことを云っている。粘性が高いとは、一般にその土の性質として、粒子が小さくねばりがあることはもちろん、遮水性や保水性がよいことを意味し、逆に締固などに適さず、強度が弱いことも云える。

一方、シルトや砂質分が多い粘性土については、遮水性や保水性は少ないが、盛土など強度を必要とする場合に用いられるのが一般である。

竪穴式石室回りで利用する粘土は蓋石上部近辺に薄く（５㎝内外）敷いた粘土がいちばん粘性が高く、以下、床面と円礫と一緒に敷いた粘土、壁面積石に用いた粘土である。蓋石の粘土はより遮水性を期待し、積石に用いた土は粘性と共により強度を期待した結果と思われる。

c） 裏込盛土と石組（控え積）の存在について

大成古墳竪穴石室のように積石をもって石室を構築し、木棺を納める空間を保つためには、壁面表面の積石だけでその構造が成り立つ訳ではなく、壁面裏側の裏込盛土の構造的な補助がなければ成り立たない。積石の変形や外部からの圧力に対して一体となって抗ごうとするものでなければならないはずである。持ち送りの石積構造を支えるためにも裏込盛土に強固な締固が必要であり、蓋石の設置によって周囲の墳丘からの均一な土圧によって成り立つ（中心エアのように）構造のはずである。裏込土の表面に一見乱雑に並べられた控え積石の存在は、強固な裏込とする効果と周囲から集中する土圧の均一化を期待したものではないかと考えられる。

（文化財保存計画協会　川上敏朗）

9．まとめと若干の考察

大成古墳の竪穴式石室は明治末年に徹底的な乱掘を受けており、その徹底ぶりは1991年の東京国立博物館による調査および今回の調査でも十分窺うことが出来た。また、今回の調査が石室内の残存遺物の回収を主要な目的の一つにしていた事情もあって、この発掘によって石室構造の全貌を明らかに出来たわけではない。しかしそれでも、出雲地方の大型前期古墳の実態について多くの新知見を得ることが出来た。これらの詳細は既に本文中で述べられている通りである。ここでは、これまでの諸調査の成果[1]も含めて、本古墳の、主として石室に関わる基礎的データを整理した上で、いくつかの問題を考えてみたい。なお、方位に関しては、本章でも特に断らない限り、便宜的に墓壙開口部の方向を南と表現して叙述を進めるが、実際には、真の方位とは45°前後もの差違があることに注意されたい。

今回出土した残存遺物は、従来知られていた本墳出土品に関する知見に大きく影響するものは無く、また、東京国立博物館所蔵品については、今次の調査にも参加された古谷毅氏による別稿が用意されているので、ここでは扱わないことにする。

(1)　墳丘 ― 大型方墳の問題

墳丘については、従来、1辺36mの方墳とか45mの方墳とか言われてきたが、第1次調査で石室の位置を突きとめ、第3次調査で西側の墳端痕跡を確認したことによって、大成古墳のイメージは大きく変わることになった。石室が墳丘の中軸上にあるとすると、この古墳の規模は石室の辺りでは東西58m前後と復元されるのである。今次の調査で、竪穴式石室の両翼に別の埋葬施設があるらしいことが分かったので、石室がやはり墳丘中央にある蓋然性は強まったと言えよう。

従って、上記の想定は大きく誤っていないと考えられるが、北、つまり地形的に低い方ほど規模を増しているはずであるから、東西方向の規模は「約60m」と表現しておくのが穏当であろう。これは、同じ荒島丘陵にある前期の大型方墳として著名な造山1号墳（第4図）とほぼ同規模ということである。南北の規模については、北側の墳端がやや不確実だが、第3次調査の報告では、南側「区画溝」の墳丘側下端までを約44mと概算している。「区画溝」外側の肩までだと約47mとなる。大成古墳は造山1号墳に立地もそっくりで、規模だけでなく墳丘形態もよく似ていると見られるが、段築の痕跡が現状でははっきりしないなど、課題を残している。

表3は、大型方墳を集成したものである。この表から分かるのは、造山1号墳や大成古墳が造られた時点では、これほど大規模な方墳は倭国内のどこにも無かったという事実である。出雲地方の前期古墳に見られるこうした著しい特質の意味については、かつて詳細に検討したことがある[2]。内容を繰り返すことは避けるが、結論だけ記せば、これらの大方墳は、能義（安来）平野西部を根拠地とする弥生時代以来の雄族「ノギの勢力」と大和政権との間の政治的・軍事的緊張関係の中で図られた、玉虫色の政治決着の産物だったと考えている。

なお、両古墳は丘陵斜面を巧みに利用して築造されていて、平地から望むと60mの巨大方墳だが後ろから見ると1辺40m弱の方墳という、省力的・虚仮威し的造りになっている点も見落とすべき

表3　大型方墳一覧

	古墳名	所在地	時期	規模(m)	備考
1	桝山古墳	奈良県橿原市	中期	96×90	現倭彦命墓
2	竜角寺岩屋古墳	千葉県印旛郡栄町	終末期	80	
3	菓室(越前)塚古墳	大阪府南河内郡太子町	終末期	75×55	
4	山科御廟野山古墳	京都府京都市	終末期	70？	方墳八角墳・大智犬皇陵
5	山王塚古墳	埼玉県川越市	終末期？	65	七円下方墳
	大乞山古墳	滋賀県蒲生郡蒲生町	中期	65	
7	春日向山古墳	大阪府南河内郡太子町	終末期	65×60	現用明天皇陵
8	宅猫塚古墳	奈良県御所市	中期	63	宅宮山古墳陪塚
9	向墓山古墳	大阪府羽曳野市	中期	62	墓山古墳陪塚
	浄元寺山古墳	大阪府藤井寺市	中期	62	墓山古墳陪塚
11	造山1号墳	島根県安来市	前期	60＊	
	大成古墳	島根県安来市	前期	60＊	
	明合古墳	三重県安芸郡安濃町	中期	60	
	カナヅカ古墳	奈良県高市郡明日香村	終末期	60	
	駄ノ塚古墳	千葉県山武郡成東町	終末期	60	
16	山田高塚古墳	大阪府南河内郡太子町	終末期	59×55	現推古天皇陵
17	総社愛宕山古墳	群馬県前橋市	終末期	56	
18	山之越古墳	兵庫県姫路市	中期	55	
	越岩屋山古墳	奈良県高市郡明日香村	終末期	55？	方墳八角墳？・斉明天皇陵？
20	石舞台古墳	奈良県高市郡明日香村	終末期	55×52	伝蘇我馬子墓
21	近内西山古墳	奈良県五条市	中期	54	
	聖塚古墳	京都府綾部市	中期	54	
23	宝塔山古墳	群馬県前橋市	終末期	54×49	
24	多功大塚山古墳	栃木県河内郡上三川町	終末期	53	
25	廟所古墳	島根県松江市	中期？	53×44	
26	近内つじの山古墳	奈良県五条市	中期	52	
	ヒル塚古墳	京都府八幡市	前期	52	前方後方墳か
	中曽根親王塚古墳	長野県小県郡東部町	中期	52	
	竜塚古墳	山梨県東八代郡八代町	前期？	52	
30	東山古墳	大阪府羽曳野市	中期	50	誉田山古墳陪塚
	鐘塚古墳	大阪府藤井寺市	中期	50	仲ツ山古墳陪塚
	高塚山古墳	大阪府藤井寺市	中期	50	仲ツ山古墳陪塚
	中山塚古墳	大阪府藤井寺市	中期	50	仲ツ山古墳陪塚
	八島塚古墳	大阪府藤井寺市	中期	50	仲ツ山古墳陪塚
	梶塚古墳	京都府城陽市	中期	50	久津川車塚古墳陪塚？
	平田岩屋古墳	奈良県高市郡明日香村	終末期	50？	
	茅原狐塚古墳	奈良県桜井市	終末期	50	

（規模欄の＊は、平野側から見た墓壙部幅）

でない。

(2) 竪穴式石室 ― 墓壙と基底部構造

本古墳の中心主体である竪穴式石室は、これまで紹介されていたデータよりも実際は大きく、床面の長さ7.5m、幅は1.0～1.2m、高さ1.0～1.1mという長大なものであった。この規模は、出雲地方の竪穴式石室の中では最長であり、表4で明らかなように、全国的に見てもかなり大型の部類に属する。方墳とはいえ、大成古墳被葬者の性格とそのステイタスの高さを暗示する。棺床部分はほとんど破壊されていたが、基底部の礫敷きの上に設置した粘土床であったと推定される。辛うじて残存する棺床粘土の状況から考えて、舟形もしくは割竹形の木棺が想定されよう。

石室は、長軸およそ16m、短軸約11m、現存地山面からの深さ約2mという大きな墓壙の中に造られている。墓壙は地山のクサリ礫層を穿って掘られ、長軸上の南方に開口部を持つ。墓壙上縁の平面形は、かつて備前の七つ坑1号墳後方部第1石室で確認された[3]ような、徐々にせばまる開口部を持つ隅円長方形であると推定される。開口部に埋設された排水施設が墳丘南側のテラス上に抜けている事実から、開口部は墓壙とこのテラス面を結ぶ構造となっていたことが分かる。従って、ここが資材の搬入路や儀式時の出入り口として利用されたことは十分考えられよう。墓壙は3～4の段を付けて掘られており、それぞれの段は石室の構築と埋め戻しの作業面であり工程の目安でもあった。

石室の構築過程については、本文中に詳説したように、いくつかの段階のあったことが明らかになった。特に注目すべきなのは、墓壙1段目のレベルで石室控え積みと墓壙埋め土に、共通して変化が見られることである。すなわち、墓壙の最下段を埋めた段階で工程の変化があったと考えられ、壁体もこのレベルもしくは少し下位で、比較的大型の石材を配していて目地も通っている。壁体の断ち割り調査をしていないので断言は出来ないが、ここで構築作業が中断されて上面が整えられ、そこを足場にして、棺床粘土を張り、棺の身を設置し、遺体を納棺して蓋をするまでの諸行為が行われた可能性が高い。これより上の壁体と控え積みの構築および埋め土は、蓋石横架直前まで一気に行われているので、これらの諸行為はそれ以前になされたと推定されるからである。

従って、この面は作業面であると同時に、葬送のメイン・イベントを挙行する言わば「儀式面」「斎場面」であったと考えることが出来る。この面は墓壙1段目のテラス面に合わせて作られたわけだが、その広さは、判明している範囲だけでも、東西7.5m以上、南北は12m以上ある。大成古墳の「斎場」は、墓壙の肩からの深さ1.2～1.3mの、2～3の段に囲まれたこのような面積のものとして設営されたのである（第45図参照）。

墓壙最下段の底部には、排水施設設置の後、拳大の円礫が敷かれている。壁体の石は、その上に粘土を間隙材として多用しつつ積まれ[4]、壁体の根石の下にも粘土を噛ませているのが観察されている。この、粘土の多用ということが、本古墳の石室壁体の大きな特徴であり、構造的安定を図るとともに、石室内を密封する効果を生んでいる。壁体の内面にはベンガラが塗られているが、間隙材の粘土の部分にまで施されており、また、粘土床で隠れる部分の壁体にも塗布されている。壁体下部を積んでから棺床粘土を設置したことを示していよう。

墓壙の底に礫を充填しその上に壁体と粘土棺床を設置する石室は、後でふれる排水施設の問題を

表4　長大竪穴式石室一覧

	古墳名	所在地	墳形規模	石室長
1	佐紀陵山古墳	奈良県奈良市（大和）	207m	8.6m
2	馬山4号墳	鳥取県羽合町（伯耆）	100m	8.5m
3	黒塚古墳	奈良県天理市（大和）	130m	8.3m
4	メスリ山古墳	奈良県桜井市（大和）	250m	8.1m
5	松林山古墳	静岡県磐田市（遠江）	116m	7.9m
6	森将軍塚古墳	長野県史埴市（信濃）	99m	7.7m
7	平尾城山古墳	京都府山城町（山城）	110m	7.5m以上
	大成古墳	島根県安来市（出雲）	60m	7.5m
	中山大塚古墳	奈良県大和市（大和）	120m	7.5m
	内裏塚古墳	千葉県富津市（上総）	144m	7.5m
11	金蔵山古墳南石室	岡山県岡山市（備前）	165m	7.2m
12	相の谷1号墳	愛媛県今治市（伊予）	81m	7.1m
	造山1号墳	島根県安来市（出雲）	60m	7.1m
	櫛山古墳	奈良県天理市（大和）	150m	7.1m
	花岡山古墳	岐阜県大垣市（美濃）	60m	7.1m

表5　出雲の竪穴式石室

	古墳名	所在地	墳形規模	石室規模（長×幅×高）
1	大成古墳	安来市荒島町	60×？m	7.5×1.1×1.1m
2	造山1号墳第1石室	安来市荒島町	60×50m	7.1×1.1×1.1m
3	神原神社古墳	大原郡加茂町神原	29×25m	5.8×1.3×1.3m
4	造山1号墳第2石室	安来市荒島町	60×50m	5.6×0.8×1.0m
5	五反田1号墳第1主体	安来市門生町	25m	4.8×0.5×0.6m
6	造山3号墳	安来市荒島町	38×30m	4.7×1.0×1.0m
7	矢田・宮谷17号墳	安来市矢田町	25×19m	4.3×0.9×0.8m
8	大寺1号墳	出雲市東林木町	50m	4.0×0.8×0.7m
9	金崎1号墳	松江市西川津町	32m	3.8×1.3×1.0m
10	奥才1号墳	八束郡鹿島町名分	？10m	3.2×1.0×0.9m
11	上島古墳	平田市国富町	15m	1.9×0.7×0.7m
	塩津山1号墳第1主体	安来市荒島町	25×20m	（規模不明）

除けば、畿内でも類似したものが見られないわけではない。しかし、畿内の例では、明らかに粘土床設置の後で壁体の積み上げを始めるもの（寺戸大塚古墳後円部、駒ヶ谷宮山古墳後円部、鳥居前古墳など）が多い。壁体と粘土床が同一レベルに載り、かつ、棺床設置に先立って壁体の下部が積まれるという点で大成古墳とよく似ているのは柏原市の玉手山9号墳[5]である。ただし、粘土床の下に板石を敷くという違いがある。従って、厳密には全く同じ構造と言えるものは見当たらないのだが、よく似たものが河内地方にあるということだけ押さえておこう。基底部構造をめぐっては従来から多くの議論があるが、粘土棺床の下に礫を敷く構造は最古の段階には無く、少し後れて現れるという理解は、各論者に共通している[6]。

(3)　竪穴式石室 ― 排水施設

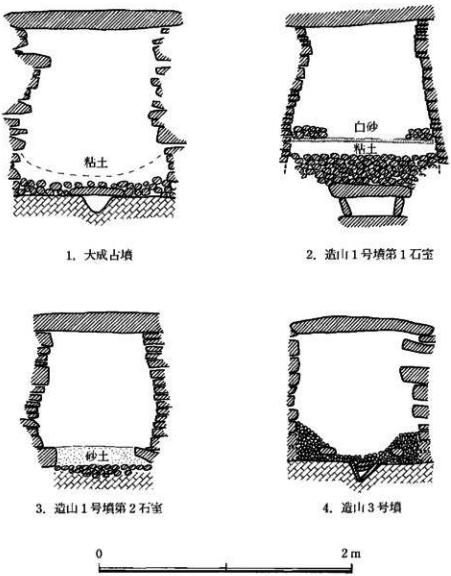
排水施設は石室中軸線の地山にV字ないしU字形断面の細い溝を掘り、平石を並べて蓋をした構造である。その始まりの部分がどうなっているかは分かっていないが、北壁の下から石室内部に入っており、南壁の下を抜けて石室外に出ると、蓋石の上は粘土で被覆されるようである。そして、第2次調査で確認された墳丘南側テラス上の出口へと至るのであるが、ここでは、両側に板石を立てて上に蓋石を置く構造になっていた（第40図）。

竪穴式石室や粘土槨に排水施設が付設される例は多いが、荒島丘陵の前期古墳のそれが、全く類例のない極めて特殊な構造をしていることについては、これまでいく度か指摘してきた[7]。少し西方の東出雲町・寺床1号墳[8]のように、畿内によく見られるタイプの排水施設を持つ前期古墳もあるのに、荒島丘陵のそれは顕著な独自性を発揮しているのである。その独自性とは、石室中軸線の礫床下に暗渠を埋設する点であり、板状の石を多用することも著しい特色である。

第41図に、荒島丘陵の竪穴式石室の横断面形を示した。造山1号墳の第1石室については、須田丰殿氏や野津左馬之助氏の報告に詳しい[9]が、ここでは、梅原末治氏の実測図[10]を掲載した。この石室は、基底部からして誠に奇妙な作り方をしているが、石を組んだ暗渠もまた、石室基底の構造としては類例を見ないものである。造山3号墳[11]の場合は、大成古墳と同様なV字溝だが、板石を溝の壁に添わせていて、蓋石はあったり無かったりのようである。ここでは、墓壙両側の壁際にも溝があって、計3条の溝が石室小口外の控え積み外縁で合流するという凝った作りをしている。そして、石室外では4枚の板石を組み合わせた構造に、つまり、1号墳の排水施設と同じ形の構造になって、墳丘外まで水を導いている。この石の組み方は、底石の有無を除けば大成古墳の排水施設の出口付近の構造とも同じである。このように、これら3石室の排水施設がそれぞれに個性を持ちながらも、強い共通性を持っていることは注目すべきである。

第40図　排水施設出口付近の状況（第2次調査で検出）

当地の竪穴式石室が、直接間接を問わず、畿内のそれをモデルにして造られているこ



1．大成古墳　2．造山1号墳第1石室

3．造山1号墳第2石室　4．造山3号墳

第41図　竪穴式石室の横断面の比較

（2・3は梅原末治原図、4は報告書よりトレース）

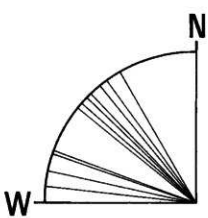
とは疑いないところであり、大成古墳と河内の玉手山9号墳のようによく似たものもあるわけだが、排水施設については、全く独特の構造をしているのである。竪穴式石室の採用に当たって、排水施設の作り方は伝授されなかった、ということなのであろう。

次に、排水施設の機能についてふれておきたい。大成古墳の排水施設は扁平な蓋石で覆われており、北小口の壁体もしくは控え積みの下から始まっている。蓋石と蓋石の間には多少隙間があり、その上には円礫が敷かれているので、粘床粘土を設置するまでなら石室内からも、控え積みの部分や更にその外側からならその後でも、排水が可能である。ただし、南側の石室外では、ほんの一部での確認ではあるが、蓋石は粘土で覆われていたから、こちらでは集水は出来そうにない。つまり、第18図の②の段階までなら開口部側を除く墓壙全体から集水するが、③の段階以降は、石室本体以外、つまり控え積みおよびその外側からの排水ということになる。石室部分は、壁体には粘土が詰められていて、蓋石と控え積み上面は粘土で目張りされ、全体が密封されて、水が入らないようにされるから、⑤段階以降は墓壙全域が集水対象となる。

排水施設がなぜ設置されたのかという点に関して、春成秀爾氏や山本三郎氏は、首長霊継承の「秘儀」で使用する水を排出するためだとする説を出している[12]。しかし、排水施設が一時の限定された用途ではなく、おそらく永遠に機能するよう期待されて作られたことは、その大規模で入念な構造のみならず、現に、大成古墳の排水施設が今も機能している事実[13]からも推測できる。つまり、広大な墓壙は大量の雨水を貯めてしまう危険があるため、墓室構築期間の雨対策もさることながら、その後も、雨水を確実に排出する手だてを講じることによって、密封した石室本体を水の浸入から守ろうとした、と考えて何らの不思議も無い。更に、首長霊継承儀礼について言えば、こうした儀礼があったとすれば、それは墓所でではなく、首長の居館もしくは喪屋において行われたとするのが自然ではなかろうか。これらのことから、排水施設の目的は、地下に封じ込めた墓室空間を防水することにあったと考えてよいであろう。

(4)　竪穴式石室 ― 埋葬頭位の問題

竪穴式石室など前期古墳の埋葬頭位には、地域ごとに優位な方位のあることが知られていたが、都出比呂志氏は全国レベルで竪穴式石室の長軸方位を検討し、出雲地方では北が優位であると指摘した[14]。その後、宇垣匡雅氏は刀剣類の副葬について検討する中で、古墳時代前期の出雲地方では、上位の首長が北頭位、下位の首長が東西頭位であったとする大胆な仮説を打ち出した[15]。宇垣説に対しては、最近、池淵俊一氏が再検討し、「宇垣氏の指摘を追認できる」と賛意を表している[16]。しかし、池淵氏が示したデータは不正確なものを含み、真北も磁北も区別しないなど不備が目立つので、屋上屋を重ねるようであるが、改めて検討しておきたい。



Nから左回りに、造山3号墳、塩津山4号墳第2主体、同第3主体、同第1主体、大成古墳、造山1号墳第1石室、同第2石室、寺床1号墳第1主体、塩津山1号墳第1主体、同第3主体、矢田・宮谷17号墳

第42図　周辺の前期古墳の埋葬頭位

（Nは真北）

大成古墳の竪穴式石室の頭位方向は、真北に対し46°西偏する。都出氏は「N45°WからN45°Eまで」を「北」と表現する、としているので、これは「北優位」の範疇からははずれることになる。そこで、周辺のいくつかの古墳について、埋葬頭位を検討してみよう。なお、以下の資料の埋葬頭位は実測図からの読み値を基にしているが、調査時の磁北や平面直角座標の方眼北によるものもすべて、真北からの角度に換算して示した。

まず、造山１号墳では、第１石室はN49°W[17]、第２石室はN51°W[18]が、石室の頭位方向である。ともに都出氏の「北」からは大きくはずれている。同じ古墳群の造山３号墳の石室はN30°Wを示し、こちらは北枕と言っても良いかも知れない。次に、大成古墳の南方の丘陵にある塩津山１号墳の竪穴式石室は未発掘であるが、おおよその頭位方向はN71°W、発掘された第３主体（砂・礫槨）はN78°Wを示し、むしろ西枕に近い。しかしその北麓にある塩津山４号墳では、３つの主体部がそれぞれN約44°W、N約36°W、N約39°Wで、都出氏の用語では北を指向していることになる[19]。従って、宇垣氏や池淵氏の論理では、１号墳は下位の、４号墳は上位の人物の墓ということになるが、古墳や主体部の規模などから考えると、とてもあり得ないことだと私には思われる。更に言えば、この時期に、出雲のほとんど全域を律するような首長間の上下関係が厳然として確立していたという歴史観そのものに、疑問を感ずるのである。

都出氏や宇垣氏が全国的視野に立って注目すべき提言をしていることは評価すべきであろうが、地域ごとの検討をするに当たっては、もっと慎重さがあってもよいのではなかろうか。第42図に示したように、荒島丘陵周辺の前期古墳の埋葬頭位は、北西から西にかけての50°余りの間にすべて収まっている。今知られている資料だと２つのグループに分かれる気配もあるが、その差はわずか20°であり、このわずかな差を、当時の首長層が彼らにとって重大なことだったはずの「格付けの差」の表現として意識していたとするのは、やはり疑問である。

それにしても、この周辺の前期古墳の埋葬頭位が上記の範囲の方位に収斂していることは事実であり、しかも、これが古墳の立地や地形的制約を超えて貫徹されていることは重要である。その理由を、今、解き明かすのは至難だが、一方で、能義平野を隔てた反対側（東側）では、小谷古墳[20]や新林古墳群[21]のように埋葬部主軸が全く別の方角を向いている前期の小古墳がある。埋葬頭位の問題に限って言えば、むしろ荒島丘陵周辺のグループをひとまとまりのものとして捉え、それと更に周辺の地域とを比較することを、まず、すべきではなかろうか。

(5)　竪穴式石室 ― 付随する遺構と石室上方の土器など

竪穴式石室に付随する遺構として、F西区の柱穴がある。既に検討したように、墳丘頂上の、石室西側控え積み外縁直上の位置に、直径40㎝ぐらいの木柱が立っていた可能性が強い。確認出来たのはこれ1本だけであるが、気付かずに掘り飛ばしてしまったものが他に無かったとは言えないし、未発掘の部分にまだあるかも知れない。

古墳の墳丘内外に柱穴を有する例は、これまで色々紹介されている[22]が、埋葬施設の近辺で発見された柱穴の場合は、埋葬時もしくは埋葬前に立柱されたと考えられるものばかりで、本例のように、墓壙を埋め戻した後に立柱していることが確実なものは知られていないようである。弥生墳丘墓では、わずかに出雲市の西谷３号墓で、埋葬後に埋葬施設の上を囲んで立てた４本柱の例が知

られているのみである[23]。かつて石野博信氏は「本来は大型古墳の墳丘頂部に柱穴があったのではないか」と予測した[24]が、大成古墳の柱穴は、まさにその実例ということになる。ただし、まだその性格について云々出来る状況ではなく、中国の陵墓制度の影響を想定するのも、にわかには同意しがたい。

石室上方の埋め土上面からは、土器の細片が多数出土した。すべて表土層下部からの出土で、盛土中に混ざっていたものはないから、これらの土器片は墳丘上に置かれていたものと考えられる。埋葬施設上方に儀礼で使用した土器を遺棄するのは、出雲地方では弥生時代後期以来見られる伝統である。ただし、土器の出土状況は一様ではない。造山3号墳では「すべて埋め土中に混じていた」と報告されている[25]のに対し、神原神社古墳では「石室封鎖後、蓋石の上面でこれら（土器）を用いた供献儀礼と破砕行為が行なわれ、それが式後、墳頂部に施された1m以上の盛土によって覆い包まれた」と推定されている[26]。大成古墳の場合は、これらとはまた異なるあり方をしていたことになるが、土器が細片ばかりなのは共通している。本文中に報告されているように、本墳では、既に細片になった土器をまとめて置いたように見受けられるが、土器の破砕行為がどこで行われたかを示す情報は無い。

なお今回の調査で、石室の東西両側に、別の埋葬施設らしき遺構のあることが分かった。東のものは粘土榔らしく、西のものは板石を使用したものらしいが、未調査のため詳細は不明である。いずれも、中央の石室埋置後に改めて掘削され設置された陪葬主体である。

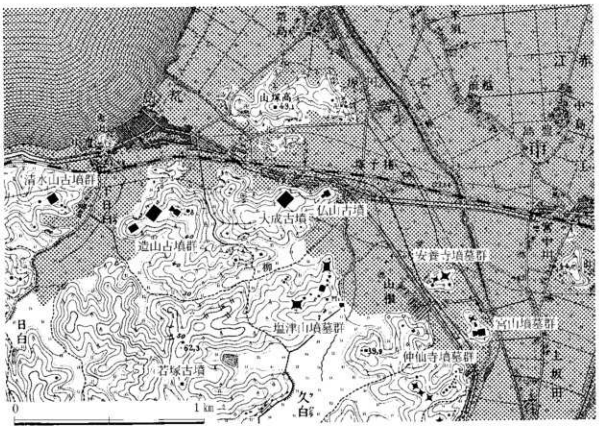
また、東の粘土榔らしき遺構の近くで発見された土器溜り（C・F区土器溜り）についても、その性格はまだ突きとめられていない。

(6)　荒島古墳群の中における大成古墳の位置

荒島丘陵は出雲地方切っての有力墳墓集中地域の一つであるが、特筆すべきは、そうした有力墳墓の築造が極めて長期間にわたって持続した点である。弥生時代後期から古墳時代終末期まで、この地域に盤踞した支配者層は、紆余曲折はあったにせよ、出雲の、そして倭国内のさまざまな政争の中で生き残り、高いステイタスを保ち続けたのである。こうした地域は全国的に見ても誠に珍しい。従って、この地域は古くより考古学的に注目され、さまざまに検討がなされてきた[27]。また、最近でも、発掘調査の進展によって新たな知見が加えられつつある[28]。

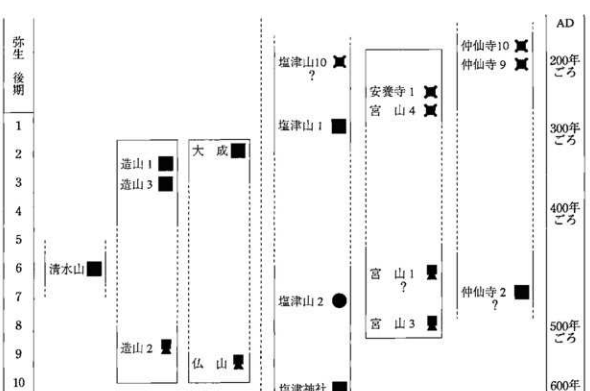
荒島丘陵の前期古墳の中で大成古墳が占める位置については、1970年代初めに、近藤正氏がいち早く見通しを述べている。氏は、東京国立博物館が所蔵する大成古墳出土土器の型式を主要な根拠に、大成古墳→造山1号墳→同3号墳、という順序を想定した[29]。当時は、四隅突出型墳丘墓と古墳の時代的峻別も出来ていない学問状況ではあったが、この地の（当時の流行語で言えば）「畿内型古墳」を根拠をもって編年しようとした最初の試みである。その後、いわゆる「古式土師器」の編年への努力が活発化するが、今日から見れば著しく不完全な編年観という限界の中で、造山3号墳→大成古墳・造山1号墳、という変遷が提示されたこともあった[30]。ただ、大成古墳の土器群を出雲地方の土師器編年の「小谷式」と認識した点は、今日も引き継がれている。

山陰の弥生～土師の土器編年が新しい見通しを得た[31]のを承けて、出雲考古学研究会は『荒島墳墓群』をまとめた[32]。そこでは、造山1号墳の三角縁神獣鏡が倣製なのに対し大成古墳鏡が



第43図　荒島丘陵の弥生墳丘墓と古墳の分布

（アミの部分については本文を参照のこと）



第44図　主要墳墓変遷概念図

（左欄の数字は『前方後円墳集成』の共通編年。右側におおよその実年代を示した。）

「舶載」であり、土器のうち「小形丸底壺は布留式でも比較的古相を呈して」いることなどから、大成古墳を最古のものと位置づけている。また、私どもも参画した『前方後円墳集成』でも同様の考え方に立ったが、古墳編年表では、大成古墳を最古の「１期」でなく、造山１号墳とともに「２期」の古墳とした[33]。大成古墳が副葬品に玉類を含まず、鏡も良質で、造山１号墳に先行する様相を示している一方で、石室が礫敷きであることや、鏡がやや後出的要素を持っている[34]ことを配慮したためである。

その後、東京国立博物館の古谷毅氏らは、大成古墳の第１・２次発掘調査の出土品と館蔵資料の検討を行い、それらが「布留式土器中葉の特徴をもつ」との見解を明らかにするとともに、大成古墳の「特殊円筒形土器は造山１号墳出土例よりやや古相を呈する」とした[35]。更に、岩橋孝典氏は大成古墳の土器について、米田敏幸氏の編年[36]に基づいて「布留式期Ⅰ併行期の中でも若干後出的」という理解を示した[37]。このように、大成古墳出土の土師器は、出雲編年の「小谷式」であることははっきりしているものの、畿内編年のどこに併行関係を求めるかについては、論者の間に微妙な認識の差がある。

この問題を石室の構造から見るとどうであろうか。前記したように、３古墳の石室は排水施設の構造が共通し、いずれも間隙材として粘土を多用するなど、これらが同じノウハウで造られたことを暗示するが、畿内の石室と共通する点の多い大成古墳がまず造られ、それをモデルにしつつ、より特殊化した造山１・３号墳が造られたと考えるのが自然であろう[38]。従って、これらのことを総合すれば、『前方後円墳集成』で示した編年観は基本的に再確認できよう。造山１号墳と３号墳の先後は副葬品だけでは確言しにくいが、丘陵に占める位置関係からすれば、１号墳がまず造られたと考えるべきであろう。『前方後円墳集成』では造山３号墳を「３期」に下げて考えたが、造山１号墳第２石室も含めて、これら３基４石室の時期差はそれほど大きくはなく、いずれも「２期」・「３期」のうちに収まるものと推定される。

さて、第43図に、荒島丘陵の弥生墳丘墓と古墳の分布を示した。出雲地方海岸部の旧地形の復元についてはかなり研究が進んでいる[39]が、まだ、この地域の古墳時代の地形を細かく想定するのは困難である。最近、大成古墳のある丘陵のすぐ南東側の谷（柳谷）に面した岩屋遺跡の発掘が行われ、かつての海岸線を示す波食台が検出された。調査所見[40]によれば、この波食台は離水後しばらく露出していた後、古墳時代前期ごろに埋没し始めたという。また、波食台の上には、ここが古墳時代後期ないし奈良時代に葦の群生する沼沢であったことを示す有機物層が認められている。付近は微地形分類[41]で後背湿地性の埋積低地とされている地形だが、この辺りが完全に離水して安定したのはかなり新しいことが判明したのである。これらの事実を参考にして、試みに第43図では、現在の海域のほか、微地形分類図で臨海低地、後背湿地、およびそれらより低い位置にある砂州・自然堤防および三角州扇状地性低地（大部分は近世以降の堆積と考えられる）の部分にアミをかけてみた。弥生時代から古墳時代にかけての時期の海岸線の位置は不明であるが、当時、アミの部分は水域もしくは湿地、あるいはそれに近い不安定な低地であったと考えてよかろう。

いわゆる荒島丘陵は、西の日白谷、東の久白谷という大きな谷によって分割されているが、墳墓のあり方からすれば、むしろ中央の柳谷を境に大きく南東と北西の２地区に分けて考えるのが妥当であろう。それぞれはまた、いくつかの墓域に区分できる。日白谷を挟む北西のグループは清水山古墳群から仏山古墳までの地区で、３ブロックからなり、前期～後期の大型首長墳を主体に営まれ

ている。弥生時代の墳丘墓を含まないことと、いずれの古墳も北西方向の海域から見られることを前提に造られているのが特徴である。一方、久白谷を挟む南東のグループも大きく３つのブロックに分かれるが、こちらはいずれも四隅突出型弥生墳丘墓と大小の古墳が混在し、東方の飯梨川河口の海湾部、現在の能義平野を意識した立地になっている。

今日知られている資料によると、ここでの主要墳墓の変遷は第44図のように整理することが出来る。大型首長墓は弥生時代後期から古墳時代初頭には南東のグループに、その後、中期のある時期までは北西のグループに造られ、その後は、あちこち移動する。前記した岩屋遺跡の調査成果を参照すると、古墳時代初頭に南東から北西へと首長墓域が移動したのは、柳谷や久白谷などの陸化現象と関連する可能性も考えられる。この問題を含め、二つのグループの顕著な対照性や首長墓の移動の問題など論点は多いが、今は、こうした事実を提示するにとどめておきたい。

（渡辺貞幸）

註

(1) 木村幸章編『既掘前期古墳資料の綜合的再検討（平成３年度科学研究費補助金研究成果報告書）』1992。
渡辺貞幸・金山尚志編『大成古墳第３次発掘調査報告書』安来市教育委員会、1995。なお、本書の「１．大成古墳調査研究略史」も参照されたい。

(2) 渡辺貞幸「「出雲造会」の成立と再編」『古代王権と交流７・出雲世界と古代の山陰』名著出版、1995。なお、本論文執筆の時点では大成古墳の復元規模は判明していなかった。

(3) 近藤義郎・高井健司編『岡山市七つ坊古墳群』七つ坊古墳群発掘調査団、1987。

(4) 同様のことは、造山１号墳第１・第２右室、造山３号墳右室でも指摘されている。
野津左馬之助「史蹟出雲造山古墳」『史蹟名勝天然紀念物』14－11（1939）。後註(10)の梅原末治氏実測図。
山本　清『造山第二号墳調査報告』島根県教育委員会、1967。

(5) 安村俊史編『玉手山９号墳』柏原市教育委員会、1983。

(6) 田中晋弘「前期古墳の竪穴式石室構造について」『史想』16、1973。
北野耕平「摂津会下山二本松古墳における内部構造の考察」『兵庫史学』65、1974。
山本三郎「畿内における古墳時代前期の政治動向についての一視点」『ヒストリア』87、1980。
都出比呂志「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』1981。

(7) 渡辺貞幸「寺床1号墳の諸問題」『松江考古』5、1983。
同「出雲における古墳時代の開始」『東アジアの古代文化』69、1991。

(8) 竹中　哲・松本岩雄編『寺床遺跡』東出雲町教育委員会、1981。

(9) 須田圭殿氏の報告は発見（1936年）直後のもので、『安来市誌』（1970）に抜粋がある。前註(4)野津論文。これらには微妙な差異がある。

(10) 造山１号墳の右室の図は、1940年に梅原末治氏が実測されたものである。同氏が生前、山本　清氏に託された資料中にあり、山本氏の御厚意で閲覧し引用させていただいた。なお、資料はその後、島根県古代文化センターに寄贈されている。

(11) 前註(4)『造山第三号墳調査報告』。

(12) 春成秀爾「古墳祭式の系譜」『歴史手帖』４－７、1976。前註(6)山本論文。

(13) 第２次調査の際に、南の後で排水施設出口から水がしみ出しているのが観察され、今次の調査でも、墓壙

内に雨水が貯まっても極めて迅速に水が引くことが注意された。

(14) 都出比呂志『竪穴式石室の地域性の研究』大阪大学文学部国史研究室、1986。

(15) 宇垣匡雅「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』44－１、1997。

(16) 池淵俊一「門生黒谷Ⅲ遺跡の調査」『安来市門生町所在門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会、1998。

(17) 出雲考古学研究会『荒島墳墓群』(1985) は、本文中ではN30°Wと記すが、掲図からの読み値はN（磁北）42°Wであり、これは梅原末治氏の実測図の読み値とも一致する。従って、本文の数値は誤りで図の方が正しいと認められる。

(18) 梅原末治氏の実測図による。

(19) 勝瀬利栄『塩津山古墳群』島根県教育委員会、1997。なお、４号墳については、報告書には全体図が付されてないこともあって、特に第２主体の読み値に不安がある。

(20) 内田　孝・東森市良・近藤　正「島根県安来平野における土壙墓」『上代文化』36、1966。

(21) 安来市教育委員会が1994年に調査。

(22) 石野博信「古墳立柱」『考古学叢考』下巻、1988。土生田純之「古墳における儀礼の研究 ―木柱をめぐって―」『九州文化史研究所紀要』36、九州大学文学部、1991。

(23) 渡辺貞幸「弥生墳丘墓における墓上の祭儀」『島根考古学会誌』10、1993。

(24) 前註(22)石野論文。

(25) 前註(4)『造山第二号墳調査報告』。

(26) 前島己基・松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』62－３、1976。

(27) 最近の論攷に、東森市良『安来平野の古墳文化』(1995) がある。筆者も、前註(22)などで論じている。

(28) 前註(19)『塩津山古墳群』、片寄野裕・梅木茂雄・守岡利栄編『塩津丘陵遺跡群』島根県教育委員会、1998、など。

(29) 近藤　正・石塚尊俊『出雲文化財散歩』学生社、1973。

(30) 前註(26)前島・松本論文、など。

(31) 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64－４、1979。

(32) 前註(17)『荒島墳墓群』。

(33) 渡辺貞幸・内田律雄・曳野律夫・松本岩雄「出雲」『前方後円墳集成』中国四国編、山川出版社、1991。

(34) 森　浩一「どうして鏡の銘文が消されるのか」『古代学研究』81、1976。中原斉「会見町普段寺１号墳出土の三角縁神獣鏡」『鳥取埋文ニュース』19、1988。

(35) 古谷　毅・金山尚志「出土遺物」、前註(1)『既掘前期古墳資料の綜合的再検討』所収。

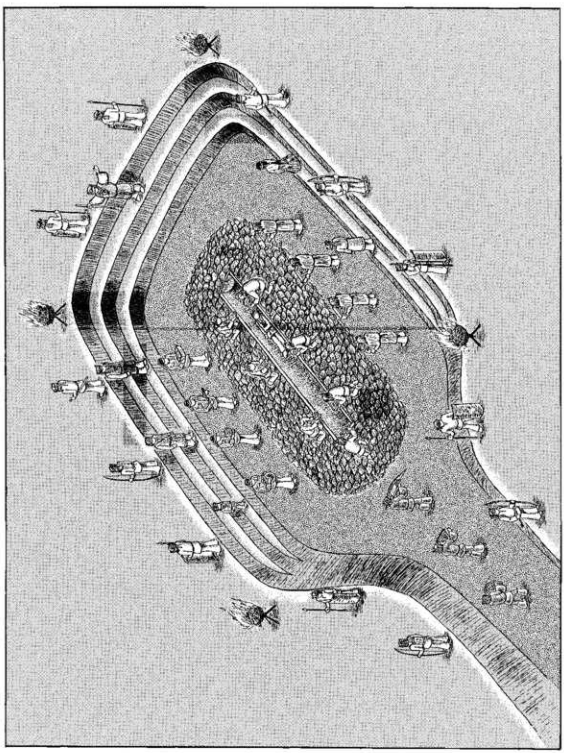
(36) 米田敏幸「土師器の編年 ―近畿」『古墳時代の研究』６、雄山閣出版、1991。

(37) 岩橋孝典「出雲における庄内式併行期の様相」『庄内式土器研究』Ⅶ、1994。

(38) この問題に関連して、その後発見された塩津山１号墳の石室がどのようなものか、気になるところである。この古墳は外部施設に弥生墳丘墓の伝統を残存させていて、「１期」に遡る可能性が高いからである。ただし、石室はかなり小型である。

(39) 徳岡隆夫・大西郁夫・高安克己・三梨　昂「中海・宍道湖の地史と環境変化」『地質学論集』36、1990、など。

(40) 島根大学徳岡隆夫教授および安来市教育委員会永田晶郎氏教示。永田晶郎・大塚充・中村唯史・徳岡隆夫



第45図　大成古墳の「斎場」イメージ図（イラスト：出中浩志）

「安来市岩屋遺跡および小汐手遺跡で発見された縄文～弥生時代の旧海岸地形」『山陰地域研究』14、1998。
(11) 建設省計画局・鳥取県・島根県編『中海臨海地帯の地盤』1967。

図　　版

大成古墳出土鏡合成写真
（第 5 次調査出土鏡片を東京国立博物館所蔵鏡にはめ込んだ。
空白部分は同型鏡である普段寺 1 号墳出土鏡で補った。）

図版２

(1)石室内部（南から）（牛嶋茂氏撮影）

(2)石室内部（北から）（牛嶋茂氏撮影）

(1)石室全景（南から）（牛嶋茂氏撮影）

(2)石室全景（北から）（牛嶋茂氏撮影）

(3)鏡片出土状況（牛嶋茂氏撮影）

(4)石室全景（南東から）（牛嶋茂氏撮影）

図版4

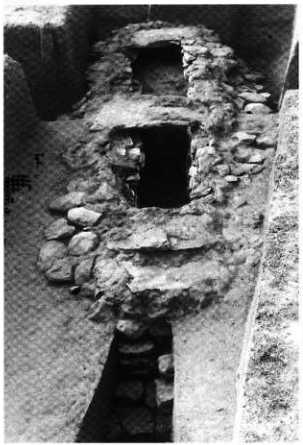
〔1〕石室南壁（牛嶋茂氏撮影）

〔2〕石室北壁

(1)上空から見た荒島古墳群（南西から）（提供　島根県教育委員会）

(2)大成古墳付近からの眺望（上：北西方向，下北東方向）

図版 6



(1)石室全景（蓋石粘土あり・南から）

(2)石室全景（粘土なし・南から）

(3)石室全景（蓋石粘土あり・北から）

(4)石室全景（粘土なし・北から）

〔1〕墓　壙（G区・南から）

〔2〕墓　壙（D区・南から）

〔3〕墓　壙（E区・南から）

図版8

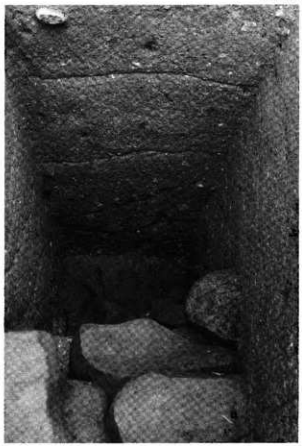
〔1〕控え積みと礫（F東区）

〔2〕控え積みと礫（F西区）

〔3〕控え積みと礫（D区）

〔4〕控え積みと礫（G区）

(1) I 区（南から）



(2) I 区南壁

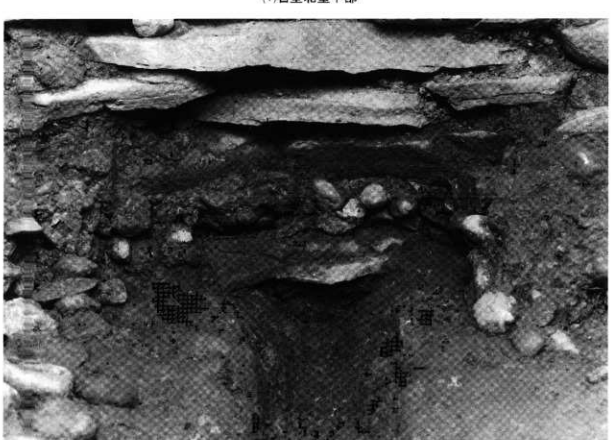
(3) I 区東壁

図版10

(1)石室蓋石（中央）

(2)石室蓋石（南）

(1)石室北壁下部



(2)石室北壁基底部

図版12

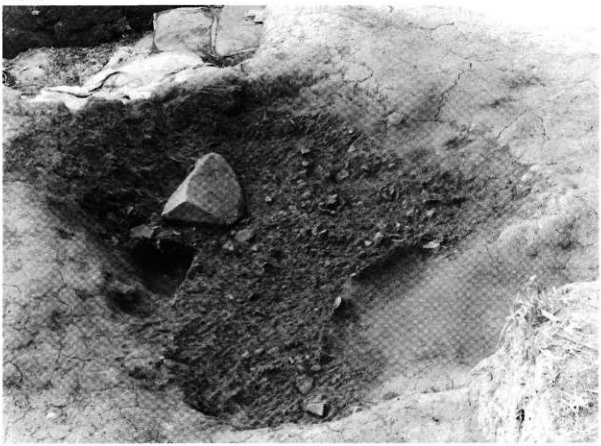
(1)石室壁体の積石と粘土

(2)石室基底部

(1)F西区柱穴内土器出土状況

(2)F西区柱穴完掘状況

図版14



(1)土器溜り

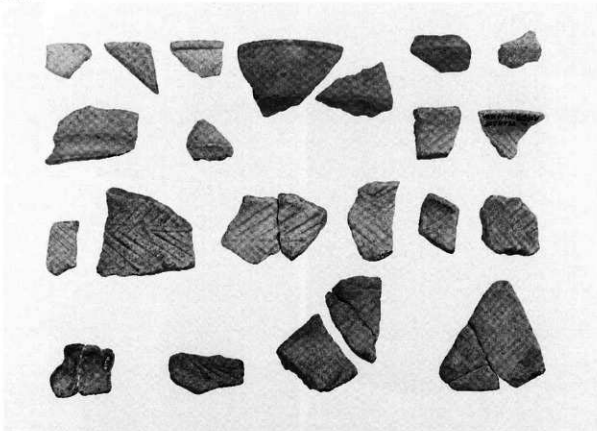
(2)土器溜りとF東区遺構

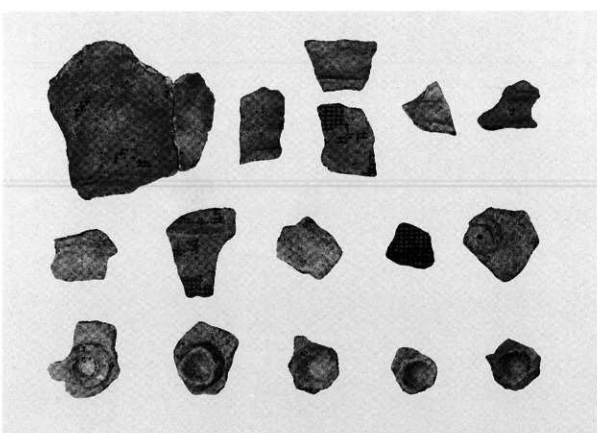
(1)F東区遺構（東から）

(2)F東区遺構（西から）

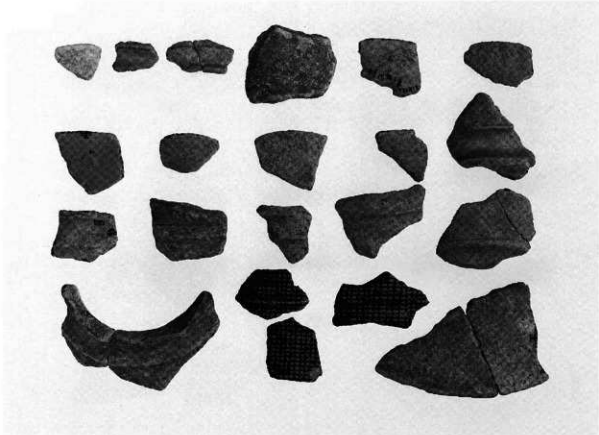
(3)F西区遺構

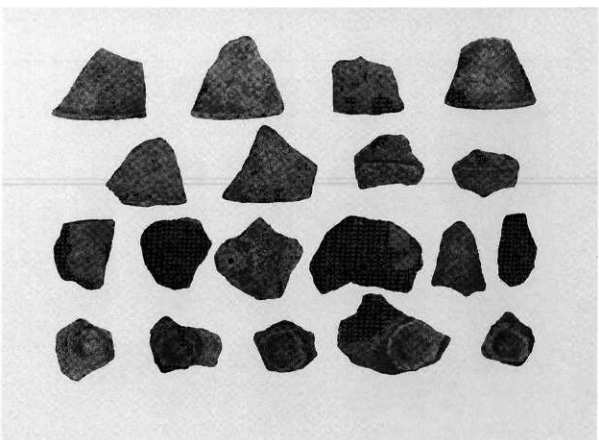
図版16





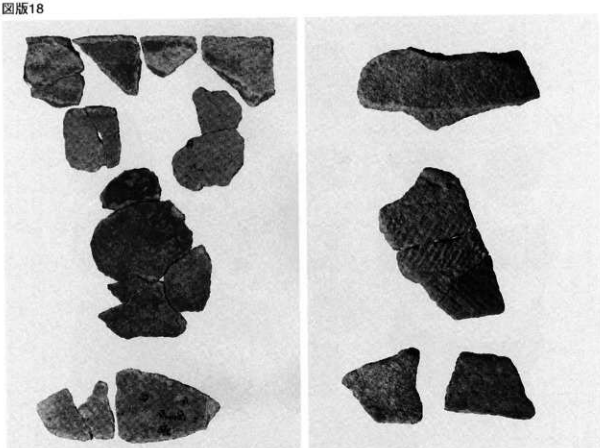
石室上方出土土器



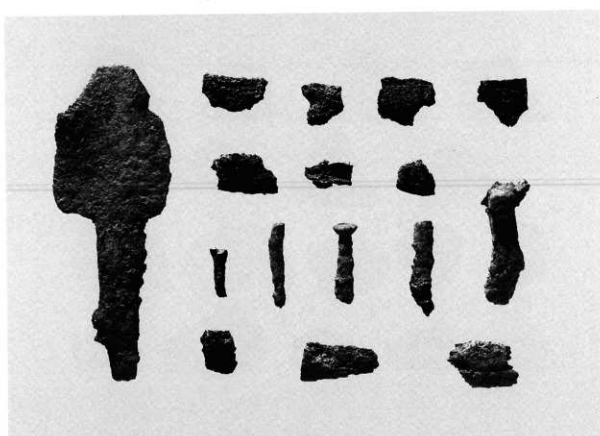


C・F区土器溜り出土土器

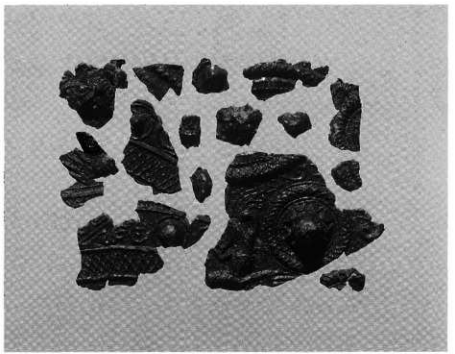
図版18



(1)F西区柱穴及びその他の出土土器



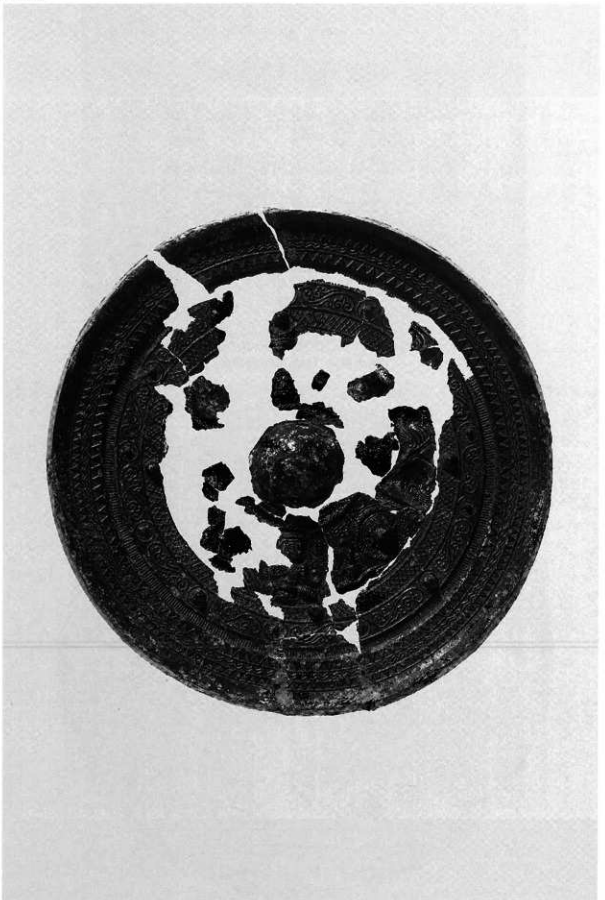
(2)鉄器・木片



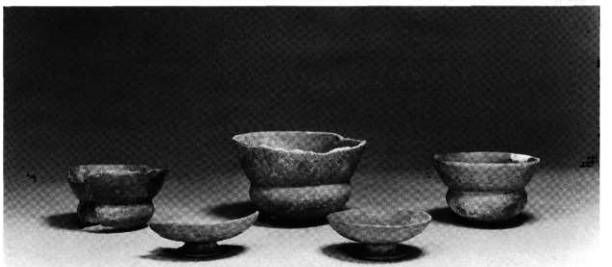
(1)出土鏡片（杉本和樹氏撮影）

(2)普段寺１号墳出土鏡（提供　大安寺・鳥取県立博物館）

図版20



東博所蔵鏡と出土鏡との合成写真



〔1〕東京国立博物館所蔵資料（土師器）

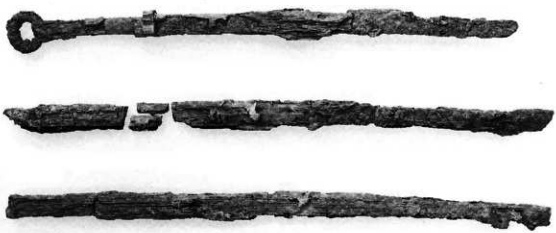
〔2〕東京国立博物館所蔵資料（小型丸底坩）

〔3〕東京国立博物館所蔵資料（小型丸底坩）

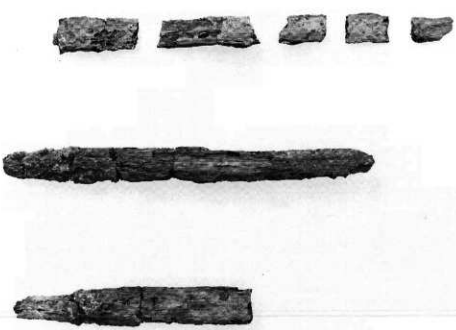
〔4〕東京国立博物館所蔵資料（低脚坏）

〔5〕東京国立博物館所蔵資料（低脚坏）

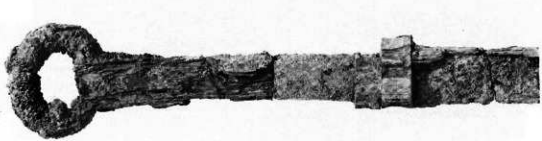
図版22



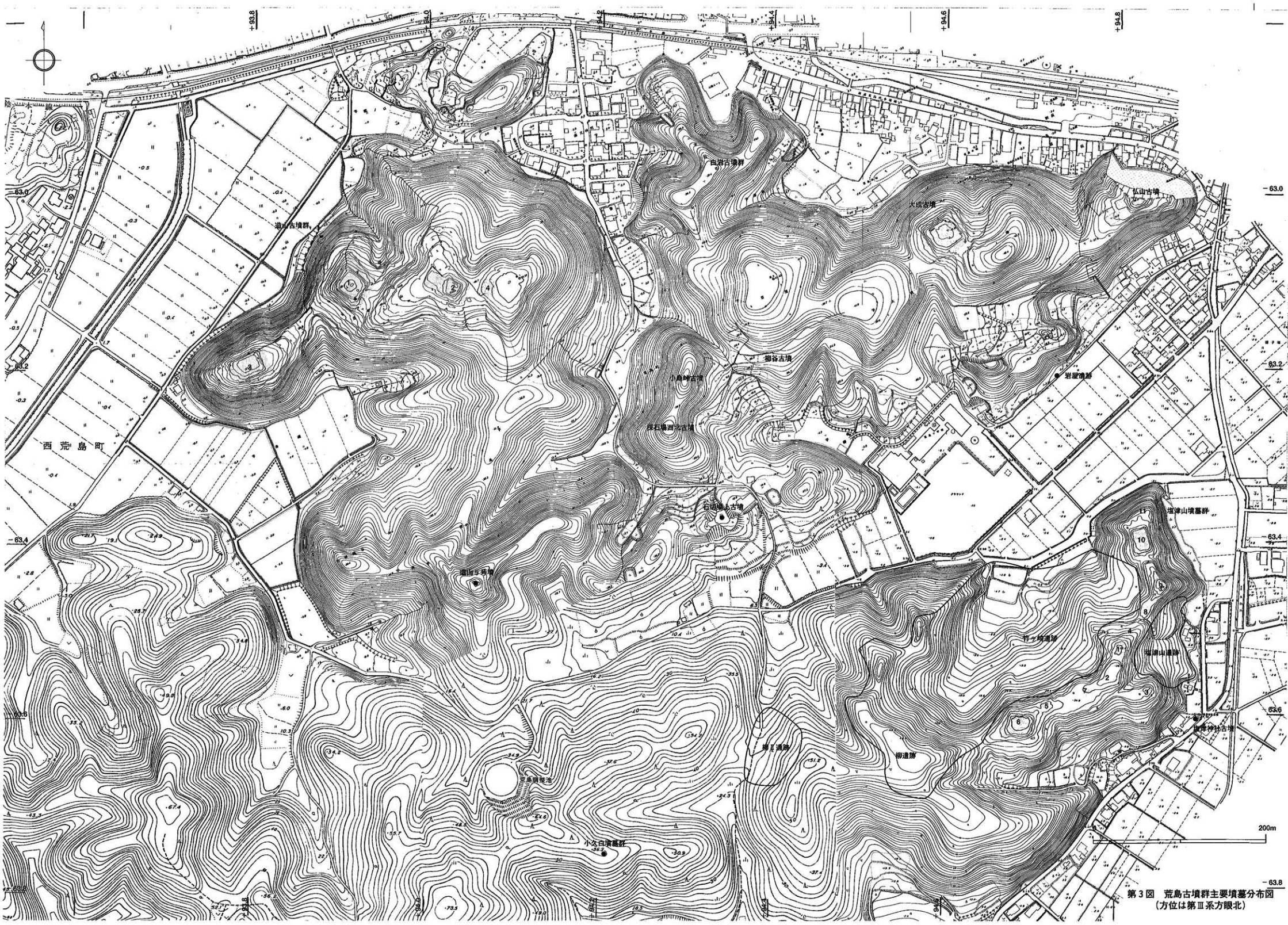
(1)東京国立博物館所蔵資料（素環頭大刀・直刀）



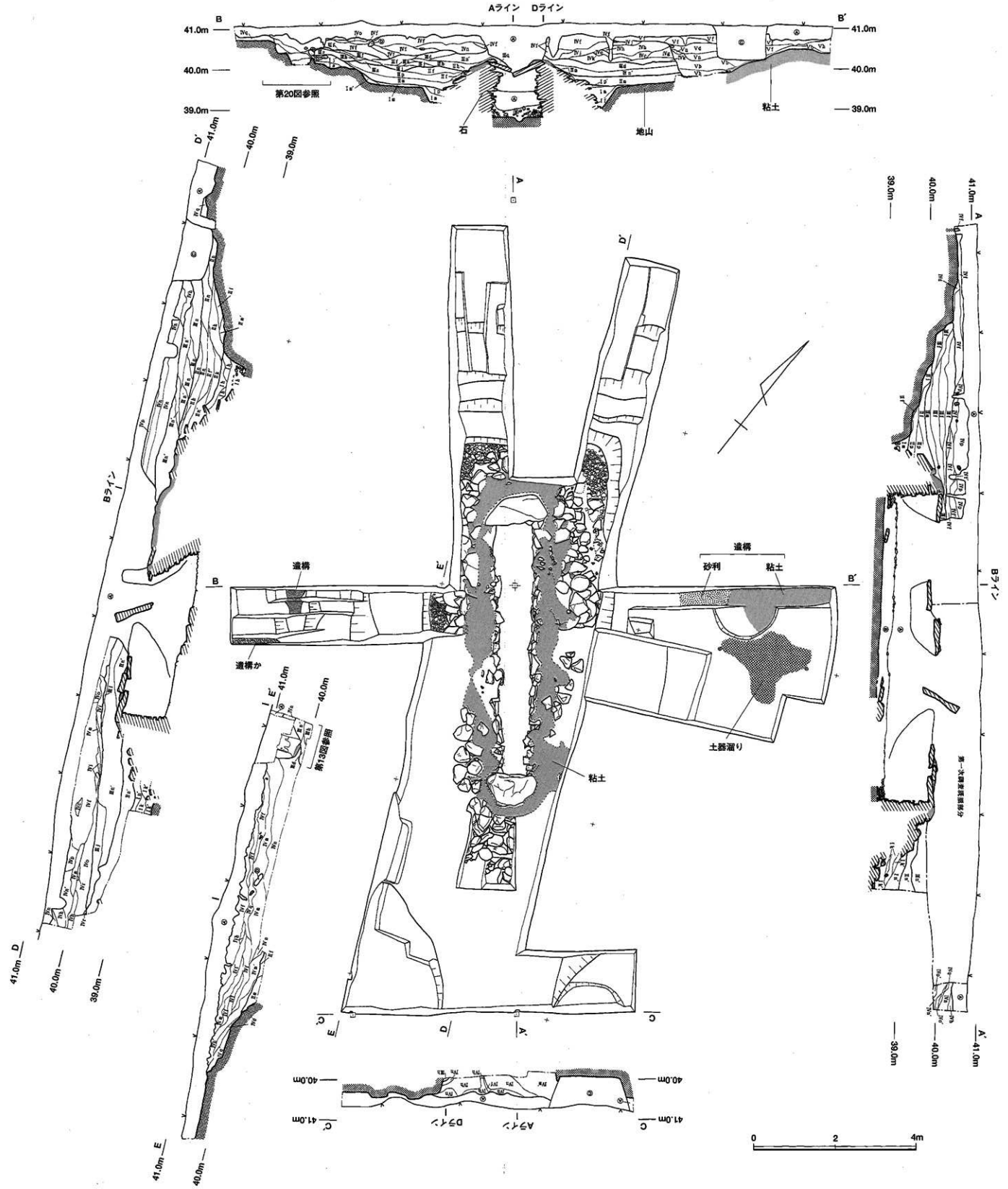
(2)東京国立博物館所蔵資料（剣）



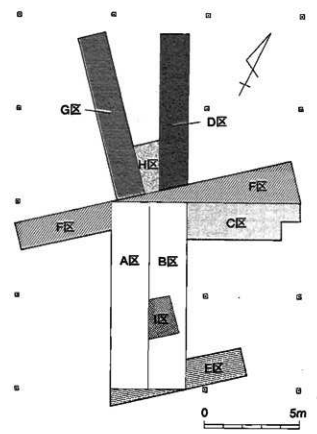
(3)東京国立博物館所蔵資料（素環頭大刀）



第３図　荒島古墳群主要墳墓分布図
（方位は第Ⅲ系方眼北）



第12図　発掘区全体図



（墓壙内埋め土について）
墓壙内への土の搬入は石室構築の段階にあわせ４次にわたって行われている。この段階の順に従い各段階をローマ数字（Ⅰ～Ⅳ）で示す。
その他の遺構に伴う埋め土についてはローマ数字の「Ⅴ」で示す。

Ⅰ：Ⅰ段階　Ⅱ：Ⅱ段階　Ⅲ：Ⅲ段階　Ⅳ：Ⅳ段階　Ⅴ：その他の遺構の埋め土

（土色について）
埋め土搬入の段階の区別と関係なく、同色・同質の土壌に対して同じ記号を用いる。マンセル記号は省略する。

a　明赤褐色土	m　黄褐色土	h　明褐色粘質土	q　褐色粘質土
b　明赤褐色砂質土	m′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	h′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	q′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）
c　赤褐色粘土	n　黄褐色粘質土	i　明褐色粘土	r　褐色粘土
d　橙色土	n′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	j　明黄褐色土	Ⓐ　表土・耕作土・撹乱土及び石室内流入土　暗褐色土・褐色土
e　橙色粘質土	o　黄褐色砂質土	j′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	Ⓑ　石室内撹乱土　明褐色土（粘土ブロック、円礫を多く含む）
f　明褐色土	o′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	k　明黄褐色粘質土	Ⓒ　植樹穴
f′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	p　褐色土	k′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	Ⓓ　根による撹乱土
g　明褐色砂質土	p′　〃　（クサリ礫を10%以上含む）	l　明黄褐色粘土	地山（トーンで示す）

OHNARI KOFUN

A Report of the Excavations in 1997
of
A Burial Mound in Ancient Idumo

Editors Sadayuki Watanabe
Hisashi Kanayama

1999

Department of Archaeology, Shimane University
Board of Education of Yasugi City, Shimane Pref., Japan